中央公論

本號目次



Madam H. P. Blavatsky.

（ブラパスキー夫人）

中央公論　第十六年第拾號

中央公論

世界的日本婦人

○○○○○
醜業婦團
醜恥なる產物

世界第一の醜業婦團。試みに地圖を披ひて我が醜業婦の勢力範圍を見よ。

北、露領柴比利亞に侵入して遙かに烏拉剌の連嶺を超へ、歐羅巴露西亞のニコルスクに達し、南、太平洋の群島を征伏して遠くニユージーランド、タスマニアに及ぶ。東、布哇と太平洋沿岸の米國を席捲し、落機を横ぎり大西洋頭のニユーヨルクに到り、西、香港新嘉坡印度を蹂躙して紅海を過ぎ、亞弗利加の諸港に入る。亞細亞阿弗利加歐羅巴、南の濠洲東の阿米利加と、東西は唯歐羅巴の一部を除いて殆ど渾球を一匝し、南北は北緯六十度の處より南緯四十五度の邊に及ぶ。太陽は日本醜業婦の版圖に出でゝ日本醜業婦の版圖に入る。

（一）

獨逸の商業は今や大に威を印度洋太平洋に振ひ、東洋沿岸の商業、英國と其霸權を爭はんとす、左無きだに狹き日本商人の版圖はますく之れに依て狹められ、窘逐されつゝあるの時、彼れ白人醜業婦の大多數を占むる世界に名高き獨逸產の女郎と競爭して、見事東洋の各港に凱歌を揚げたるは我日本の醜業婦に非ずや。」

（二）

旅順大連、嚴めしきヲロシヤの軍港に大手を振て出入し、時に彼れの軍艦を以て輸入さるゝと云ふ如き、未曾有の奇談を世界に流布する者は日本の醜業婦に非ずや。ボルネヲ又はセレベスの諸島ヲランダの兵營に買ひ入れられ、否寧ろ招聘されて、營內に公然其家屋を許くの特許あるもの、天下廣しと雖ども、日本の醜業婦有るのみならん。

（三）

卑南は馬來の要港なり、カルカッタは印度の首府なり、共に日本商人の目を着け手腕を奮ふべきところ。而も有髯男兒は其隻影をも見ずして、怪げなる天草邊の女性が三々五々街頭に彷徨ふを見る。

（四）

亞弗利加には全く日本男兒の住居せるものなし、又一人の亞弗利加探險を志せし者あるをも聞かず、只歐米漫遊の旅客が其途次ポートセイドに上り、カイローを見舞ひ、金字塔を見るが如きに過ぎず。然るに彼等醜業婦は已にザンヂバルにまで進入せりと云ふぞかし。ヒリッピンやカロラインや南洋の群島中普通の地圖には見出し得ざる小き島々、南洋通ひの船員すら容易に其名を思ひ出さゞる小き島々にも、已に彼等は侵入せりと云ふぞかし。サイベリア荒原の雪にも笑ひ、南洋孤島の月にも歌ふ。埋骨到底故郷の山を期せず、世界到處に平氣の平左たるもの、亦彼等の如きものあらんや、日本の冒險家は唯醜業婦に依て代表せらる。

（五）

高等商業學校の卒業生諸君、新嘉坡邊の我醜業婦が英語を話し、獨逸語を話し、馬來語を話し、支那語を話し、更に又印度語を話すが如くよし片言混りにもせよ五六の國語を自由に繰つる者果して一人有るか。堂々貿易商會の大看を板打ちたる其店員諸君、單身海外に出でゝ白人の金を捲き上ること、柴比利亞邊出稼の一醜業婦の伎倆に及ぶもの果して一人有るか。憐れむべし海外に於ける日本商人の多くは、我醜業婦の需用品を供給せんが爲め、彼等の餘澤を蒙むらんか爲めに出稼ぎせるなり。只お餘りを拾ふの商業たり、同志打ちの商業なり。日本の商業家は唯醜業婦に依て代表せらる。

（六）

香具師興行師の輩、手品も輕業も曲馬も、未だ日本人が歐米の各都を打ち廻はりて成功したものゝあるを聞かず。只獨り巴里の博覽會場内の見世物小屋エムエム會社に買ひ入れられ、醜辱を歐羅巴の中心にまで持ち出したる烏森扇芳亭醜業婦の一隊のみ、博覽會後歐洲の各都に出品されて、相當の收入を得つゝあり。彼川上音次郎再度の洋行も只貞奴の手腕に依ると云ふなり。」

（七）

數年前より歐米の各國には「藝者」と題する演劇大流行を見る。日本に於て芝居興行人が其出し者に窮したる時、忠臣藏をさへ演せば損耗せずと云ふが如く、彼國にて如何程人氣の落ちたる劇場にても「藝者」劇をさ

へ出せば必ず多くの客足を引くと云ふ、以て如何に我が醜業婦的感化の世界的たるかを見よ。

（八）

東洋觀光の外客、船の横濱に入る時、先づ其眼に映じて、海岸に燈光最も鮮かに、日本造りの家屋として最も美麗に見ゆるは神奈川の神風樓なり

（九）

陸に上りて低き燐寸箱の行列の如き土人町（彼等は無禮にも西洋風の住居と區別して土人町と云ふ）を歩み、比較的彼等の目に家らしく見ゆるものは伊勢崎町の見世物小屋に非ず、辨天通りの家並みに非ず、則ち遊廓の構造なり。日本家屋の建築は妓樓を以て代表せらる。而してこれ獨り横濱に於てのみならず、東京に於て然り、名古屋に於て然り、大阪に於て神戸に於て然り、日本全國到處に於て皆然り、彼等は豈流石女郎國の本場なりとの感に打たれざるを得んや。

（十）

日本の風俗若し世界を感化したるものありとせば即ち藝者女郎の服裝なり、チョンキナの俗謠なり。ダイシヤ（藝者）シュンガ（春畫）等の名詞は已に一種の世界語となれり。

（十一）

此の如く女郎國として知られ、藝者國として知られたる日本は、世界の目より見て藝者と女郎を除けば全く空虛なり。

大勳位侯爵伊藤博文閣下と云へば、日本に於てこそ新勝國の大政治家大立物として威名赫々たるものならん然れども其洋行に就て歐米の交際社會は如何に彼を持て囃やし、新聞社會は如何に彼を吹聽するとせるか。憐むべし其歡迎も其評判も遙かに川上貞奴一人の下風に立つを覺悟せざるべからず。

（十二）

某大國駐在帝國特命全權公使何々君と云へば非常にエラキが如しと雖、其公使婦人が藝者女郎も猶厭ふ派出なる日本服を着くるが喝采の種となり、列國使臣の間にやふやく日本公使あるを忘れられずして其交際を維持すと聞ては、誰かナサケ無き感に打たれざらんや。」

（十三）

何々校長、某々會頭、日本第一の閨秀と呼ばる夫人が、女子教育制度の取調べ、又は何々會の參列委員として海外に派遣され、倫敦や紐育の交際社會に大に歡迎されたりと聞けば、大に面目あるが如く肩身廣きが如き

も、實は其夫人が風變はりの袴長き袖の衣等奇妙なる服裝（彼等はお世辭を以てこれを優美と云ふ）を見んとの好奇心に外ならずと知れては忽ち興醒むる心地するなり。

あゝ藝者の日本よ、女郎の日本よ、世界に名譽を博する日本の産物は茶に非ず、米に非ず、生糸に非ず、織物に非ず、陶器に非ず、漆器に非ず、ハタ牛にもあらず馬にもあらず、則ち此醜業婦なり。曾ては奴隸と云へる生きたる人間を産物とし輸出し賣買せる國有りき、然れども已にこれ前世紀の昔物語に屬す。誰か料らん、東洋の君子國文明國と稱する二十世紀劈頭の新興國、唯一の産物此の如きものならんとは。

藝者の日本、女郎の日本、一國を相手とせる鐵血の戰鬪には幸にも忠勇なる陸海軍の兵士に依て世界に面目を施したり。然りと雖、世界を相手とせる平和の戰鬪には、其武器たる商業無く工業無く、外交無く學術無く、ハタ宗教無し。女郎や藝者を其先陣とし中堅とし又後殿とし長へに其戰鬪を續けんとするなり亦心細からずや。

唯、此醜陋なる世界的日本婦人を奈何

（楓堂）

我邦海上權の前途

美人の涎沫を思ふ

國勢は定住なるものにあらず、何物か一種の勢力に依て、常に變遷して止まざらむとせり。而して古來史の證する所を以て見ば、そは海上權力、即ち海上貿易の盛衰に伴へるが如し。フヱニシヤ起り、希臘起り、羅馬起り、西班牙、葡萄牙起り、和蘭起り、英吉利起り、而して今や新大陸合衆國の全勢時代となりぬ。然も此間千數年間の變化を約言せば、唯僅に海上權得喪の一事に歸せむ而已。若其範圍より云へば内海より太洋に打出でたるなり。方位より云へば東より西に向つて運命の循り行きつゝあるあり。果して然らば其米と相對して運命の衝に當らむとするもの、言ひ換ふれば他日太平洋上の覇王たらんものは、抑も何國なる可きや、

恐らくはこれ萬人の胸中に浮べる、少なくとも浮びつゝある疑問ならむ。

試に地圖に對して見よ、如何に我日本の賴多きや。濠、米、亞、三大陸の中間に介立し、殖産工業の原動力たる鐵石炭は、これを亞、米に求むるに易く、羊毛其他の原料品は、これを濠太剌利亞地方より齎し易く、宛然寶庫中に座するが如きは、これ我日本の地位ならずや、山水明媚、風光秀麗、所謂、孤棹嘯風琶湖舟、萬古含雪芙蓉頭、花光一目千樹春、月高八百八島秋、この一大畫幅は、これ我日本の風光たらずや。年々增加、四千万は今や殆んど五千万に垂んとす、これ我日本人口の增殖力にあらずや。斯かる三大勢力と天惠とを恣にせる以上は、噫日本は竟に二十世紀の權力者、大平洋上の覇王たる可きや。唯此に餘す所、而も其最も主要なる問題は、一に我國民の思想也。

元來海上の權力は、平時に於ける貿易の盛衰に伴ふもの、故に貿易に鋭敏なる國民は、即ち海上の權力者たるを疑はず。利益を望み、貨財を求むるは人性の常、而も渡世の要務なり。されども其これを望み、之を好むに於て、其手段歷史を異にす、西班牙及び葡萄牙の人種は、單に貨財を貪るの徒、未だ之を好むにあらざるなり。英人及び蘭人は、縱ひ小賣商人の嘲笑をこそ得たれ、日夜餘念なく勉めて、財産の貯蓄に汲々たり、商人、製造人、仲買人としての特性を備へたりき。故に其本國たると、外國に住するとを問はず、常に土地の利益を開發し、之を輸出して製造品となし、漸次其土地の生産高を增加するを以て任とせり。されば本國と殖民地との間に於ける貿易は、日ましに繁盛に赴き、從て之を搭載するの船舶も亦年を逐ふて增加し、海上の事業を發達せしめ、終に海上權力をも專有するに至れるは、敢て偶然の出來事ならむや。

西、葡、佛、英、四國民が貨財收得の手段に付き、其特性の點を擧げんか、西葡兩國の人民は、土地を發掘して金銀を撰取する、所謂山師根性に驅られ、英人は海外に出でゝ彼我の物品を交換し、又其物品を製造し、或は之を販賣するを以て貨殖の要領とせり、乃ち其法

に道あるなり。これ四國民の特性にして、また英人の勝利者たりし所以なり。而して今や造化意を用ゆるか、さしもの英も亦殆んど後進の米に讓る可くなりぬ。問ふ、日本國民は如何なる方策あつて此道に當らんとする乎。武に偏するの國民、海外移住を厭ふの國民、若しくは此程タイムスの所謂最も信用少なき商人は、長く日本國民の特性なる可きや。若夫れ此儘にして進み行き、米國をして其運を恣せしむるに於ては、遺憾ながら我日本は、此上なき好地位を有しながらも、東西南北何れに向つても手の出し樣なきに至らむか。危機一髮、一刻の逡巡はこれ一刻國勢の退歩、いかでか思想刷新の企なくして止み得んや。西葡の亞流の如何ばかり濁れたるかよ。

凡そ國家の膨脹は國民的膨脹を要す、單に侵畧的手段に依つてのみなされたる國家は、到底永久に、否な平和に存續するものにあらず、其運命意外に脆きものなり。西班牙帝國の瓦解は明かにこれを訓えたり。さりながらこれに引き換へ、偉大なる民族を基礎とし、其自然的膨脹に依つて發育したる國家は、其國民の亡びざる限り、容易に滅亡に陷るものにあらず、大シーザルは殺されたるも、羅馬は死せざりき、依然として千四百年を持續したりき。劔の光を賴多しとすること勿れ、例へば曉の星光にも似たり、旭日の昇天と共に滅せざるを得ず。陽光は寧ろ鋤と鍬との前に守護神たり。日本國民若し眞に海外の膨脹を欲せば、宜しく先づ其家族と共に國外に移住せよ、而して其土地を耕し、其土地に資本を下し、本國政府は勿論充分にこれが保護の任に當らずんばあらず。斯くて日外吾人の論せし如く、中米、南米、乃至、南洋諸島に一大市場を設け、之を踏石として内外相應じ、貿易の盛を計る事、彼の英國民の如くならしめんか、これぞ正しく我日本開運の機、宿望成就の端緒、勉めて撓まずんば、恐らくは二十世紀最後の勝利たらんか。策は唯一のみ。急に迫つて走らむよりは、速に事前に出發せよ。

將來我國民の膨脹す可き方面は、亞細亞、亞米利加、南洋諸島なりとす、而して其膨脹は、平和的、經濟的、

商業的にして、兵力は唯これを保護すれば足る。言換ふれば在外本邦人をして安んじて開拓貿易に從事せしめ、敢て外人の蔑視を受けざらしむれば足る。國際法は即ち其足らざるを補はむが爲めに存するなり。然らば問ふ、如何にせば我從來の偏辟を一新し、過大なる軍備の縮少、不振なる殖産工業の進歩を計り得可きか、これ我日本將來の運命の決する所、輕々に論ず可からざるの問題なるも、暫らく吾人が信ずる所を語らしめば、左の二要件の實施を促すもの也。

（一）拓殖務省を復活し大に移民事業を奬勵すべし

過度の干渉が産業の發達を妨ぐるは、論ずる迄もなき事ながら、方今世界列國の形勢に鑑みば、適當なる程度まで、産業に干渉するは、國家生存の上に於て已むなきの政策なりとす。而して此に吾人の所謂干渉とは、消極的の云ひにあらずして、寧ろ積極的干渉を指すものなり。即ち彼の拓殖務省を復活し、英の移民局に於けるが如き權義を以て、我海外移住民に關する報告を作り、其先導者たるの職分を盡さしむるに在り。今や天下の形勢一變し、また昔日の如き土地占領的の移住民事業の行はれざるも、世界の隨所に新日本を創設し、一大貿易場を起すの業は、須らく我國人をして隨所に移住せしめ、我生活、思想を彼地に齎らし、移民をして安じて業を彼地に就かしむるに在り。而して此偉業は先づ移住地の産業、地理、生活、天然を探索して、普ねく之を國民に了得せしめ、一方に於ては臺灣をして該省の下に管轄せしめ、盛に開拓貿易を鼓舞するに於ては、一省の事業として決して閑なりとす可からざるなり。況んや本邦の如く狭隘細長の國土に於て、海外移民の外、他に膨脹の道なきに於てをや。さりながら現時、財政の困難を嘆くの外、膨大なる軍備を持するの外、一のウヰッテ程の人物だになき本邦に於ては、所詮當局者の耳傾く可くもあらず。若夫れ止むなくんば、暫らく農商務省に殖民局を設置し、これを以て進んで其衝に當らしむ可し。吾人は米の平和軍が、破竹の勢を以て襲ひ來る鐘鼓の響を耳にする毎に、覗として坐して亡國の民たる能はざる也。

(二)軍人と實業家との協力を望む

シルレル嘗て曰く、戰爭も終局の目的は戰爭にあらずと。軍備と實業とは、一は破壞的に、一は平和的に、一見氷炭相容れざるが如きも、歸する所平和に在りとせば、兩者の關係はむしろ密接にして、兩者の協戮は目下の急務たらずんばあらず。軍備縮少の緒、恐らくは此にひらく可きなり。今日我國の軍備が如何なる點より擴張せられたるかは確知し難きも、目下の狀態の示す所を以て見ば、想ふに其要地要港に對つて、幾何の陸軍、幾何の艦船を以て守護せば足らんとの推算に出しならん。されども今一步を進めて、某要港は幾何の商船出入するを以て、此丈けの艦船を以て万一の對領に備へざる可からず、若しくは彼の海外に於ける某地は、本邦商人の居留者多きを以てか、或はこれを保護し置かば將來有望の貿易地たる可きを以ての故に、軍艦を派遣し置き、在外邦人をして生命財產の顧慮なく安じて其土に永住し、貿易振張に熱心せしむる等の諸點迄は、聊か心付かざりしが如し。

英露佛獨の諸列強、殊に世人が尙武國とのみ見つる露國の如きも、實は其主義經濟的にして、實業家と軍人との關係頗る密に、實業振興の爲めには軍人もこれを助け、軍人の爲めには實業家も亦盡力し、國利進捗の前に兩者の協戮を見つゝあり。手近く例せば、彼の勘察加半島の南方に於ける一小島に砲臺を据付け、列國密獵船の侵入に備ふるが如き、甚だ些微なりと雖も、亦以て其一斑を察し得らるべきなり。然るに由來我國に於ては、士農工商の區別甚しく、舊慣尙未だ去らず、軍人は軍人、實業家は實業家にして、相容れざること水の油に於けるにも似たり、尤も此弊を以て獨り本邦のみを罪せざるも、苟も座を世界列强の間に占むるに於ては、最早斯かる思想の存在を許さゞるなり。聞く佛國に於ては貴族にして商業に從事するを卑み、英國に於ては貴族も亦商業を營み國富を計るを以て、却て其一門の榮譽とせりと。故に英國の財本は擧して宇内の貿易に通用し、併せて殖民事業に投入せられたり、これ彼れが貿易の

隆盛と共に其海軍の發達せし所以なり。本邦若し幸に此に注意し、實業家と軍人との協戮を計り、利あれば助長せしめ、害あれば芟除し、共に國富の增殖を計るに於ては、これ自ら貿易の發達を見、殖民事業の成功を見、遂に多大無益なる陸軍の縮少をも遂げ得可きなり。然るに事未だ此に出でず、而も年々其費用を增加し來り、殊に昨年の如きは、總歲出の三分一は軍事費なるにあらずや。吾人嘗て某陸軍士官學校敎官の說なりと云ふを聞くに、陸軍に於ては縱ひ幾許の經費を要するとも、皆な日本の地に於て消費するものなれば、詮ずる所、日本國內に收まるものなり、故に經費の點に於て軍備の縮少を計るは、最も根據なきの說なりと。吾人は敎官が眞面目に斯かる淺猿しき言をなせしを耻づるも、今の軍備の擴張は、殆んど髣髴たる打算の中になされたるものなり。而して本邦軍人の多くが果して如何なる思想を懷けるやを怪むものなり。單に血を見んが爲めの軍備の擴張程、今日に於て拙劣なる、不經濟なるものはあらざる可し。見よ彼の滔々として平和の歌をうたひつゝ、海を尋ねて流れ行く淸流の前途に於て、いつしかに磯岩の橫臥せる忌はしさよ、吾人は實に本邦の軍備に於て此憾なくんばあらず、敎育も彼れが爲めに妨げられ、實業も彼れが爲めに影響を蒙れり。これ乃ち軍備縮少の聲ある所以、而してまた吾人が、軍人と實業家との協戮を望み、漸次縮少の界に出づるを欲する所以なり。唯其策の性急ならざるのみ。而して共これをなさんには、軍人と實業家との間になれる調査會を組織し、屢々其胸襟を開いて國利民福を計るに勉め、軍備をして實業の破壞者たらしめず、却てこれを保護者の地位に立たしめ、成る可くんば寧ろ海軍に重きを置き、特に海外貿易の擴張に就ては、寸時も猶豫なく、凡ての方面より之を保護し、獎勵し、平和的戰爭の驍將たるに耻ぢざらん事を勉めずんばあらず。若夫れ然らんには、軍備縮少の事、何ぞ必らずしも難關とするに足らんや。患これを行はざるに在る而已。」

述ふる所如此く、望む所亦如此きのみ。而も此等の多くは國家運命の關する所、露の優勢を見、米の盛況を

見、而して不振勝ちなる本邦の現状を想ひ、感概端なくも此言をなせり。輕跳なる佛の蝴蝶にも似たる我國民よ、幸に顧慮して、出精なる英の蟻たらむ事を求めよ。我に先つ七十年の長を以て、今や十二億九千七百八十万圓の輸出超過を誇る米よ。これ正しく我當の敵手、嗚呼此の勁敵手よ、我一日の逡巡は、一日敵勢を増さしむる所以、地位に於て、氣候に於て、はた人々の増殖に於て、此上なき天恵を有する我日本國民よ、今は洵に猛省奮起の秋、豈に凡々として止むを得んや。吾人は實に屈平の所謂「美人の遲暮」を思ひて止まざる也。

（沼東）

宗教博物館

西新月旗の帝國から東旭日旗の帝國まで、此亞細亞に國を成して居るものに随分數多きことて、世界の大宗敎は悉く此一州を搖籃地として發達して居る。さりながら我邦を除ひて國らしき國を建てゝ居るものは、此廣き大陸に一ッもなく、波羅門教佛教の本國は遠き昔に亡國となり、猶太教基督教回々教の發源地も、山河荒敗人民離散、はや見る影も無き有様である。火教の本場も同一の運命に遭ひ、喇嘛や薩滿は盲昧頑迷算ふるにも當らず、道教孔子教の老大朽國は今や二十世紀に於ける第二の猶太人民たる運命を迎へつゝあり。ドノ點から見ても我國が亞細亞列國の模範國となり彼等を醒まし導くのは其天職である。政治家は政治の模範を示さねばならぬ、教育家は教育の雛形を示さねばならぬ、商業も工業も百般の事物、文明國相當の設備をなし、他の邦國に代りて東洋を代表せねばならぬ。

此點から見て吾輩は玆に日本宗教家に向て一の希望がある、これは外でもない日本宗教家の仕事として我邦に一大宗教博物館の設立を希望するの一事である。世界各宗教の起原發達より其現狀まで、悉く實物に就て一堂の裡に研究し得らるゝ利益に至ては今更贅辯を要せぬ。まして世界多數の宗教が雜然として入り亂れ、思想界を根底から搖かせる我邦である。國家將來の爲

に否世界全般の爲めに、宗教の弊害ある部分を陶汰し、改善し、其精粹を撰んで二十世紀以後の模範宗教を作るべき天職を持つて居る國民に取ては、其設備の必要特更に大なるものと思ふ。

我國に於て設立する特種の利便

世界の宗教少くとも其の半數以上は我國に集まつて居る、これ丈けにても材料蒐集の利便は實に大なるものである。安南、暹羅、緬甸、錫蘭、印度、ネポール、カシユミル、西藏、蒙古等、佛教印度教火教回教喇嘛教の國々は、歐人が其材料を蒐むるから見て、我國は其勞力や出費を十分一に減じて、而も其十二分たる結果を得る見込みがある。儒教道教其他支那に於ての材料は勿論云ふに及ばぬ。現に世界の東洋學者が欽羨に堪へざる西藏の一切經は、我國人一投足の勞にて二部まで日本に渡つたではないか。白人が最も六ヶ敷危險多き秘密國とせる西藏も、喇嘛僧一回の來朝にて容易に入藏を特許され、遠からず我國人に依て西藏事情の一切を世界に紹介せらるゝを得と云ふではないか。此等諸國より宗教博物館の材料を集めば、唯其寄付丈けにても直ちに世界第一のものとなることが出來る。宗教上より見たる特殊の利便は此の如くである。

柴比利亞、滿州、韓半島、支那本部皆これ一葦帶水の土地。北海道アイヌの故郷からアラスカのインヂアン部落に及び、北米の中部を横ぎりて墨士古、中央亞米利加、それより太平洋の群島、東印度諸島と、皆交通蒐集の利便多くして、其上悉く宗教研究に就て特種の趣味ある土地である。爪哇、ボルネヲ、佛教の遺蹟も、馬來土人臺灣土人の宗教も又蒐集に價ひする。地勢上より見たる特殊の利便は此の如くである。

要するに東洋の宗教に就ては、到底歐米人が競爭の出來ぬ大利便を有するのである。

創設の容易なること

材料の蒐集が困難でないとすれば、創業の大半は終つたものと云ふても差支へはない。只此上は蒐集費と家屋と地所と主任者を得る計りである。主任者も之を得るに困難はない。地所も公園或は寺社の所有地を以て

すれば無代價にて之を得らるゝ。やゝ六ヶ敷は家屋の建築費と蒐集費及び維持費である。これも後の二ッは入場料其他の方法にて、左まで困難とは思はぬ、歸するところ、只建築費の一點である。其建築は決してお役所や寺院の古物を以つて間に合はせすべきものでない、保存の大切なる點から、分類の必要なる點から、縱覽の便利を計る點から、必ず歐米最新式の博物館建築法に依らねばならぬ。併しこれも十四五萬圓もあれば可なりのものが出來るであろー。僅かこれ丈けの錢にて世界に對して誇るに足る一大國寶を得ると思へは、又廉き事業ではないか。

帝國東洋學會の責任

基督教徒は此種の設備を歡迎するに相違はない、然れども微力なり、貧乏なり、且つ東洋宗教の材料を集むるに其資格が無い。佛教徒は金有り、勢力有り、然れどもかゝる文明世界の仕事には全く無頓着である。我輩は玆に於て此仕事を是非帝國東洋學會の責任として成立させたく思ふ。已に標して東洋研究（オリエンタルレサーチ）の學會と云ふ、其會の性質から見ても、其發起人諸氏の種類から割出しても、この宗教博物館の設立は必ず諸氏雙肩の責任なるべき筈である。佛教徒を促がして之を計畫する、政府を說ひて之を贊同せしむる、富豪に謀りて之を設立せしむる、其いづれにしても諸氏が其中心となりて力を致すべきは其責任である。若し諸氏にして此意有らば、その成功は乾度容易であるに相違ない。聞けば近日帝室博物館の外に、政府より學術的の大博物館を設計せらるべしとか。これと同時に此宗教博物館は是非成立を望みたきものである。

（里山）

舊社會民主黨諸氏

此篇社友山中氏の特に本誌に寄せられしところ、いさゝか我社の素論と合せざるところあり、然れども其合せざるは其主張の一部なり、其大部に於て吾人も亦其歩調を同じふす、則ちこれ本欄に收むる所以

（記者）

兎に角一度社會民主黨の發表を見たりしよりして、社會問題は稍々吾國士人の間に研究せられんとするに至

りしは極めて喜ふ可きの現象也。
一概に社會主義と稱す、人は先つ恐怖の念を以て之を迎ふ、爾り極めて恐る可きの主義也、貴族をして跋扈せざらしむるの主義也、富家をして專横を逞ふせざらしむるの主義也、爾れども之を稱して直に社會の根抵を搖撼するの主義なりとなすは一を知て未だ二を知らざるの愚論、素より取るに足らず、彼民主黨と稱するもの果して何等の社會觀を有するか、吾人今將た之を説かざるべし、唯吾人は滔々として天下を風靡して、自由的精神の死没し去りたる極めて臆病の社會に於て、大膽放恢世に蛇蝎し去られたる、是の如き主義を公表して憚からざりし諸氏の勇氣に感せざる可らず、」
一部の士人は諸氏を以て無智の勞働者を煽動するものとなすが如し、想ふに諸氏は飽迄煽動の名を甘諾すべし、夫れ吾國今日の勞働者の如く無智盲昧にして依頼する處なきものあらざるべし、彼等は牛馬の如く驅逐せられて而も之を訴ふる所以を知らず、彼等は奴隷の如く壓迫せられて而も之を脱する所以を知らず、志士仁人の奬勵贊與その本然を警覺するに非ずんば如何ぞ天賦の權理自由を伸發せん、是の如き煽動は社會が寧ろ諸氏に希望せざる可らざる處となす。
資本家と勞働者の軋轢漸く起らんとするを見るや、或ものは資本家の慈善に訴へて相寛和せんとす、慈善素より可ならざるに非ず、天下の勞働者若し資本家の慈善によつて、其妻子眷屬と煕々として天然の幸福を樂しむに至らば天下の太平期して待つ可しと云へども、爾れども今日の如き人情冷淡、私利私慾を滿たすに之れ急にして、一點高尚の道念を有せざる天下滔々の資本家に向て、悉く是の如き寛大なる仁惠を求む、蓋し狼に向て念佛を强ゆるの類、素より言ふ可くして行ふ可らず、よし若し言ふ可く、又行ふ可きものとなさんも勞働なるもの果して他人の慈惠を受けざる可らざるが如く然く卑劣にして而も價格なきものとなすか、夫れ他人の慈惠を受くるものは乞丐者の事のみ、彼等勞働者にして若し勞働し得ずんば已む、苟も彼等長大の軀幹あり、手と足とを有す、何ぞ他の恩惠に待て始め

て生きんや、彼れ富と稱するものを以て資本といふか、吾か額に汗する處奚ぞ亦資本に非ざるを得んや、而して彼れ富の勢力は其所有者をして彼か如くあらゆる逸樂を恣にせしめて休む所を知らざるにも拘はらず、我勞働の價格は六尺の男兒をして營々として朝、夕に至り、尙且つ凍餒に堪へざらしめんとす、知らず是の如き不平等は夫れ何處より至れる。

官吏のみ尊くして人民卑しく、貴族のみ尊くして平民卑しきの國に在て資本家のみ尊く勞働者の卑しき素より怪しむに足らず、而れとも是の如きは封建思想の殘片、天理人道に反するや大也、其本根より打破し粉碎するあらずんば、一國の進捗發展素より期し難し、而して已に官尊民卑を慨するものはあり、已に貴族崇拜を攻擊するものはあり、爾れども勞働の神聖を公表して、堂々資本家の橫暴を制せんとするもの蓋し幾干もあらず、嗚呼强者の權理なるかな、富豪貴族の徒は天下を擧けて味方となして尙足らざるが如きも、彼勞働者なるもの社會の最大多數をなし、而も政治も法律も學問も宗敎も未た嘗て彼等の用たるを許されざる也、知らず吾國には勞働保護條例なるものありや、知らず吾國には勞働組合規則なるものありや、嗚呼一を以て百を推すべし、吾國勞働者の雨打風擊に任せらる想ふ可きかな、今にして諸氏及び天下社會問題に意あるもの是等弱者の爲に一大氣焔を吹くなくんば彼夫れ遂に牛馬たらん。

夫れ十を獲んと欲せは百を求めざる可らず、百を獲んと欲せは千を要求せさる可らず、已に吾國の如き貴族國、富豪崇拜國に在て、數千年間、賤劣取るに足らずとなされたりし勞働者の爲に主張する所あらんとす、其の聲や須らく大ならざる可らず、其手段や須らく激烈ならざる可らず、是の如くならずんば到底社會の一大問題として社會の良心を振盪するに足らさるのみならず、一擧して彼の頑固にして腐敗したる貴族富豪輩の肝膽を寒からしめ反省自覺せしむるに足らざる也此意義に於て吾人は諸氏前日の主張宣言の比較上激烈なりしにもかゝはらず、尙一層激烈ならんことを希望し

れたりしもの也。

前の内務大臣末松謙澄氏は平素平民主義の士と稱せらる、而して諸氏の一度主義を發表して結黨を宣言するや、直に之か禁壓を命せり、人の見て意表とする所なりと云へとも、火の揚らんとする抑ゆれば却て熱す、吾人より見れば末松氏は寧ろ名を禁壓に假て更に大に此主義を奬勵せんとするものに非ざるなきか、想ふに諸氏の熱炎亦更に一層を加ふるものあらん、今や金氣肅殺し秋風野に滿つ、諸氏が第一の禁壓に避易せずして、第二の宣言を表發し、更に大に社會を警覺す、正に其時なるか如し。知らす諸氏以て如何となす。

（山中昂）

小乗の婦人観

あはれ、人生の行路は大砂漠を横斷する旅客の艱苦にも軼きつへし、されとオーシスは常に汝の家庭に於て見出さるゝなり、人生は苦々しき荼毒を以て充ち滿ちたり、されと汝か最愛の妻は甘きこと醍醐よりも過きたる愛の蜂蜜を以て汝を養ひつゝあり、人生は濁りに濁り汚れに汚れたるものなり、されと汝か兒女の無邪氣なる笑ひには淸からにしていと貴き神の面影を認むるを得へし、あはれ、人生競爭の劇闘汝をして困憊せしめ瘡傷せしめ殆んと九死の中に陷らしむ、されと貞烈なる汝の妻は彼女のキッスを以て汝の瘡傷を醫し暈迷せる汝の頭へを抱きて彼女のブズムに安するの時汝は再ひ生氣を恢復するを得へし、於戯純潔なる愛の蜜は汝か忠實なる妻に於て盡きたる源を見出すを得へく、限りなき惠みの露は汝か哀々たる母の懷ろより絶えす滴りつゝあるなり、誰か婦人を以て美神の權化にあらすとする、孰か彼女を以て天來のエンジエルにあらすとせん、詩人は何とかいひし。

Her face so fair, as flesh it seemed not,
　But heavenly pourtraict of bright angels hew,
Cleare as the skye, withouten blame or blot,
　Through goodly mixture of complexions dew;

And in her cheeks the vermeill red did shew,
Like roses in a bed of lillies shed,
The which ambrosial odours from them threw,
And gazors sence with double pleasures fed,
Hable to head the sicke and to recive the old.
..............................And when the spake,
Sweete wordes, like dropping honny, she did
　shed,
And'twixt the perles and rubins softly brake
A siloer sound, that heavenly musicke seemed
　to make.
How shall frayle pen descrive her heavenly face,
For feare, through want of skill, her beauty to
　disgrace,
So faire, and thousand thousand times more
　faire,
She seemed, when she presented was to sight;

蓋し詩人は女性の純潔なる愛情を激賞して醜猥なる劣情の彼女に伴ふを忘れんとし、彼女の花の如き麗質を想化して恐るべき姤蛇の彼女を纏ひつゝあるを看過し、彼女の歌謠に天國の音樂を聞きて彼女の怨語に地獄の喚叫を聽くを欲せさるなり、これ實に一方の極端に走れるもの、之に反して他方の極端に走りて女性を醜惡にして見るに忍ひさる動物とするものは小乘佛敎の徒か、佛本行集經に

或は諸の采女の臂あり、或は手を以て顋頷を拄へて眠り、或は采女あり、箜篌を擲却して一邊に置き、身倚臥し、或は采女あり、其兩臂を以て鼓を抱いて眠り、或は兩手を以て內懷中に著て其の半身露れ出て其中に眠り、或は各兩臂を以て相抱いて眠るあり、或は采女あり、目瞼交らす、睛瞳晄々熟視して睡り、或は采女あり、諸の瓔珞に倚り䏶を垂れて眠り、或は宮人あり、形容端正、從來伏仰具さに慚羞を知り、一切能皆悉く備足す、今重睡の因緣に纏はるゝを以て氣を放ち聲を出し、大小羸細臭處流勃、都て覺知せす、或は身諸の瓔珞の具を脫するあり、或は諸の雜華鬘を擲却するあり、或は衣裳を捨て目を張りて眠り、猶は死屍の如く一も異るなし、傍人觀看して活想を作さす、或は仰臥して長く手脚を展へ口を張りて眠るあり、或は手脚を亂擲し一邊に交へ横へて眠るあり、或は手臂を卷縮して髀脚繚綟して眠るあり、或は地に立ち壁に倚りて眠るあり、身體掉動して猶醉人の如く或は頭を覆ひ鼾睡して眠るあり、或は蹲坐し項を縮めて眠るあり、或は面孔青白色を失ひ、極醜にして眠あるり、或は采女あり、細腰鼓を以て項

上に懸け露腹して眠るあり、或は米女あり、衣裓を以て項に搭して眠るあり、或は采女あり、鼾齁齘々鳴喚して眠るあり、或は頭を垂れ寢語して眠るあり、或は面を伏し冢間の死屍の如にして眠るあり、或は大小便利を失し不淨にして眠るあり、爾時太子忽然として寤め其宮內を觀れは蠟燭及ひ燈、或は拳の如く盛に、或は臂の如く大にして顯赫朗耀極めて甚た光明あり、諸の宮人の是の如く睡臥するを見、或は銅鈸箜篌箏笛簫琴筑琵琶竿笛螺貝を執り口に白沫を出し、鼻涕涎流、是の如き等の種々の相貌を見已りて太子是思惟をなす、婦人形容止た是の如きのみ、不淨惡露、何の貪るへきあらん、外に粉脂を飾り、瓔珞衣服華髮釵釧、假りに身を莊嚴す、癡人は知らすして横に誑惑せられ、色の境界に於て妄に慾を生す……

世間不淨衆惑迷　無過婦人之體性

……咄哉世間是大患あり……此處不淨、愚痴の人妄に愛樂を生す、瓷缾の中糞屎を盛滿するか如し、此處臭穢、愚痴の人以て香美となす、猶猪の厠溷の中に在るか如し、此處空誑、愚痴の人横に染著を生す、猶ほ狗の肉なき骨を抱しか如し云云

見よ原始佛教の徒は窈窕嬋娟たる佳人の姿に接して臭穢腐爛見るに忍ひさる屍を觀し、明眸皓齒の女性に近きて白骨累々の思ひをなし、少桃嬌柳の婀娜たるを見ては枯木死灰の感を惹き起さんと努め、玉顏蓮步の艶妖なるを見ては糞土汚塵の積堆するに比せんとはしたるなり、嗟呼、彼等の偏見も亦太甚しからすや。

抑も佛陀は不淨行として痛く婬慾を斥け、女色に遠かるを以て解脱に入るへき第一の門としたるなり、されは四分律には

寧ろ男根を持して毒蛇の口に著るも、持して女根の中に著けされ

と制し

若し比丘不淨行を犯し、婬慾を行するものは是比丘波羅夷

なりとありて、女色に近くものは波羅夷罪として毗尼の斷頭器にかゝりて出家的生命を失ふものとせり、然れとも生殖動機の人身に於けるは榮養動機の發動すると齊しく、生理的自然の要求によるものなれは決して之を撲滅し得へきにあらす、是を以て佛陀は常に其弟子を策勵して不淨觀を修し以て肉慾を抑壓せしめたるなり、されと佛陀の制戒も容易に自然の動機を壓伏するの力なくして、往々破戒のものを出すか故に渠は入涅槃の最後に至るまて諄々として之に關する敎訓を施すの止むを得さるに至れり、大般涅槃經に曰く

爾時菴婆羅女、顏容端正世界第一なり、……五百の眷屬と次第に城を出て往て佛所に詣る、爾時世尊遙かに彼の來るを見て諸の比丘に告く、菴婆羅女今來りて我に詣る、形貌殊絕、擧世雙ふものなし、汝等皆端心正念にして著意を生する勿れ、比丘當に此身を觀すへし、諸の不淨あり、肝膽腸胃心肺脾腎屎尿膿血其中に充滿す、八萬尸蟲居して其內にあり、髮毛爪齒薄皮肉を覆ひ、九孔常に流れて一も樂むへきなし……不淨流溢して復飾るに雕綵を以て、熏するに名香を以てすと雖も譬へは寶瓶の中に臭穢を藏するか如し、又其死時膨脹爛壞、節々支解、身中に蟲ありて還て之を食ふ云々

是に由りて之を觀れは佛陀は女性を以て神聖高潔なる愛情の對境となさすして但に卑陋なる肉慾の對境となしたるなり、故を以て婦人は吾人を淫蕩に誘ふの惡魔にして色慾を餌として吾人を釣り吾人の血を啜り肉を啖はんとする羅刹なり、且つそれ婦人の愛情は吾人を繫縛して生死の牢獄に投入し、永く解脫するを得さらしむるものとせり、增一阿含に

謂ゆる男子女色を見て、便ち著意を起し、甚た愛敬して人をして永寂に至らさらしむ、牢獄に繫著して解くことなし

といふもの即ちこれなり、婦人は斯の如く口に蜜あり腹に劍あるもの、外貌花の如く內心蛇の如きもの、醜穢不潔の動物なれは、親むへからす、近くへからす、共に笑ふへからす、共に語るへからす、其聲を聞くへからす、其顏を見るへからす、とは佛陀か生平弟子に誨ふる所なり、增一にいはすや

阿難世尊に白す、當に如何か女人と事に從ふへき……佛阿難に告く、共に相見る莫れ、設へ相見るとも共に相語る莫れ、設へ共に相語ると も當に心意を專にすへし、爾時世尊便ち此偈を說く

莫與女交通　亦莫共言語　有能遠離者　則離於八難

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
戀愛を樂觀するものは詩人なり、戀愛を苦觀するものは佛陀なり詩人はいふ

Love in my bosom like a bee
Doth suck his sweet.
Now with his wings he plays with me,
Now with his feet.
Within my eyes he makes his rest.
His bed amid my tender breast,
My kisses are his daily feast.

佛陀はいふ

此欲は衆苦積聚す其味至て少し、過患甚た多し、譬へは飛蛾の愚癡の爲めの故に身を猛焰に投じて自ら燒害するか如し、凡夫は顚倒して妄に染著を生す、渴愛の爲に逼られて焰を逐ふ蛾の如し

吾人は未た戀愛の何たるを解せさるか故に這個の問題

に向て許言を加ふるの資格なしと雖も、原始佛敎の徒か女色に遠さかるを以て無上の道德と思惟したるに至ては吾人の大いに首肯する能はさる所なり、如何となれは婦人の身體にして不潔汚穢臭屍に齊しきものなりとせは、男子の身體も亦不淨充溢して九孔より汚物を流すものなるは彼等の常に口にする所なり、然れは則ち吾人にして婦人の臭穢を嫌はゝ吾人自身の臭骸をも厭はさるへからす、是れ佛在世の比丘か不淨觀を修して自殺するものを生したる所以ならすや、且つ不婬を以て宗敎的道德となすといはゝ、禽獸にも猶ほ婬せさるもの頗る多し、彼等は皆清淨なる宗敎家の資性を具したりとせんか、笑ふへきの甚しきなり、若し斯かる道德を全世界に普及せしめたりとせは人類の絕滅を來さすんは止まさるなり、吾人は斷して此種の道德說を排せさるへからす。

上述の如く原始佛敎は婦人を以て婬慾の對境となすか故に之に向て不淨觀を修するのみにあらす、強ひて女色に遠らんか爲めに婦人を以て先天的に惡德を具へたるものとせり、增一に曰く一婆羅門あり世尊に美女を獻せんとす、世尊之を受けす、時に長老比丘佛に白す、唯願くは如來此女人を受け給へ、若し如來之を要せすは我等に與へて使はしめよ、世尊謂く汝愚惑如來の前に在て此惡意を吐くや、女人に九惡あり、云何か九

一者女人臭穢不淨、二者女人惡口、三者女人無反復、四者女人嫉妬、五者女人慳嫉、六者女人多喜遊行、七者女人多瞋恚、八者女人多妄語、九者女人所言輕擧、女人有此九法繫惡之行

又增一に女人に五種の惡ありといふ

一者穢惡、二者兩舌、三者嫉妬、四者瞋恚、五者無返復

又曰く

小兒以啼爲力、女人以瞋恚爲力、

之に加ふるに婦人は慢心多くして其夫を輕侮す、而して五力を以て其夫を輕んす、曰く

一者色力、二者親族之力、三者田業之力、四者兒力、五者自守力

右の如き惡德を具したる婦人は前生の罪業至て深くして三障十惡ありといふは玉耶女經なり

一者小時父母所障、二者出嫁夫主所障、三者老時兒子所障

一者生時父母不悅、二者養育不味、三者常憂嫁娶失禮、四者處々畏人、五者與父母別離、六者倚他門戶、七者懷妊甚難、八者產生時難、九者

常長夫主、十者恒不得自在

次に婦人の欲望は左の如く數へられたり

一者生豪貴之家、二者嫁適富貴之家、三者使我夫主言從語用、四者多有兒息、五者在家獨得由已

佛陀は婦人を觀察することと上論の如くなるを以て、婦人は先天的に物慾に蔽はれ易く、誘惑に抵抗するの力乏しく、忍耐力を缺けるか故に、到底梵行を修して出家學道するに適せすとの斷定を下したり、是れ佛陀か其姨母大愛道の切なる願ひを斥けて容易に其入道を許さゝりし所以にして、また婦人の出家を許したるか爲め、如來の正法は住世五百年を減したりと嘆したる所以なり、中阿含に曰く

爾時瞿曇彌大愛道、往詣佛所、稽首佛足、却住一面白曰、世尊、女人可得第四沙果耶、因此故女人於此正法律中、至信捨家無家學道耶、世尊告曰、止止瞿曇彌、汝莫作是念、女人於此正法律中、至信捨家無家學道、瞿曇彌如是、汝剃除頭髮著袈裟衣盡其形壽淨修梵行、(中略)大愛道三爲世尊所制、稽首佛足繞三匝而去、……阿難若女人不得於此正法律中至信捨家無家學道者、正法當住千年、今失五百歲

男尊女卑は東洋諸國に普通の習慣なれはにや、佛陀も亦男尊女卑の制を立てたり、即ち比丘尼は絕待的に比丘の下に從屬せしめ、禁戒の如きも比丘尼には特に峻嚴なる律を設けて之を拘束したり、されは佛陀入涅槃の日阿難は佛の陰藏を女人に示して彼等をして男子に生れんことを希はしめたりと傳ふるか如き、又小乘經中一も女性の如來及ひ女性の轉輪王を說かさるか如きは絕待に女子の男子に及はさるを主張するものに似たり。

已上の所說を綜合する時は婦人は第一鮮妍たる麗質を具ふるにあらすして臭穢不淨なるものなり、第二婦人は先天的に貞淑溫柔なる美德なくして憍慢、嫉妬、諂詐、毒舌、輕薄等の惡德を具ふるものなり、第三婦人は堅忍の力に乏しく、誘惑に從ひ易く、煩腦多きものなり、第四婦人は宿世より罪業深厚なるものなり、第五婦人は男子に比して劣等の地位に甘んし男子に從屬すへきものなり、第六婦人は輪王及ひ如來の位に登る能はさるものなり。

果して然れはかゝる醜怪不德なる動物に向て染愛の心を生したらんには如何に神通自在なる大仙人も其通力

を失はさるへからす、されはにや生經に

時仙人、從空中飛下、至王宮內、王女見來、次手擎之、坐着座上、適次手擎、觸體柔軟、即起欲意、適起欲心、愛欲興盛、尋失神通、故不能飛行

とあり

小乘の佛陀は婦人を見るそれ斯の如し、然りと雖も經中に說く所の如き多くは一時對機の假說なる故に、恐く取りて以て佛陀の眞意なりとなす能はすと雖もまた以て小乘の佛陀か婦人觀の一斑を窺ふを得へきか

（螺蛤）



海外新潮

海外大勢

米國に對する歐洲の恐怖

目下歐洲諸國に於ける第一の人氣問題は對米商工政策の論議なり、諸國の新聞雜誌或は米國商工業の現狀を說き、或は其因て來る所を探り、其遂に歐洲の經濟界を攪亂する甚だ遠きにあらざる可きを警告し、大陸新聞は殊に恐怖狼狽せるもの丶如し、之れ嚮にマッキンレー派の所謂帝國主義を見て漸く疑惑の念を起し、トラスト組織の勃興を見て漸く恐怖の念を生じたる歐洲社會が彼のモルガン氏のレーランド航路買占を見て呆然たる矢先きに、又もや紐育の大銀行が歐洲の重なる市場に一々支店を設置せんとするの報に接し、サテは惹く周章狼狽を極めたるなり。

獨乙の保守新聞「アルゲマイ子、ツアイツング」（ミユーニッヒ）紙上に表れたるバヽリヤの經濟學者アレキサンダー、フォン、ピーツの所論を見るに氏は歐洲の將來に於て最も重大にして而も最も長引く可き問題は支那問題にあらす、又トランスヴァール問題にあらすして、却て英獨並に北米の三大工業國の競爭にあり、蓋し英國の商業は除々として進み、獨乙は統一以來長足の進步をなしたり、而かも合衆國の進步に至りては實に霹靂一聲耳を掩ふに遑あらざりきと云ひ、其此に至れる原因の一として米人の享有せる自然的感化要件を說明して曰く、

米人はゲルマン民族の衣鉢を受け、其ケルチック雜種たると、土地の

自然的感化とにより、勇往活潑の氣風を具へ、更に獨乙及び英國よりの移往により居ながら彼等の技能を習得利用することを得たり、此くの如くにして米人は精神上並に宗教上何等擾亂の恐なく、石炭、鐵其他殆どあらゆる原料を包藏して大平、大西兩洋の間に蟠る自然の勝地に據りて、各人一意專心各其業務に勵精することを得たり、これ蓋し其遂に今日ある所以なり。

氏は更に右英米獨の三大競爭國は各其活動の自由を拘束する重荷を負ひ、獨乙の支那に於ける、英國のトランスヴァールに於ける、及び合衆國の菲律賓に於ける、之れ皆上記三國自由行動の一大障礙たる内顧の憂なりとし、三國中最も早くこの重荷を免れんものは蓋し合衆國ならんと云ひ、更に進んで各國の通商條約及び關税組織を考査し、歐洲諸國は須らく相盟約して合衆國現行の關税組織を採用し、以て之れと相對抗す可しと警告せり、蓋し之れ國際法上自衞の一方便として是認せらるゝ所の所謂報復なり、サテ米國現在の關税組織とは果して如何なるものなりやと云ふに、大西洋月報の八月紙上に於てブルークス、アダムス氏の説明したるが如く、外國貨物の侵入を防止せんが爲め、之に對して殆ど禁止的苛重の關税を賦課し、以て國内の産業を保護し、此の如くにして得たる利益を以て輸出貨物の製造に投じ、外商の到底競爭する能はざるの廉價を以て、外國市場を攪亂し、外國に向ては所謂門戶の開放を强ひつゝ自己の門戶は堅く之れを閉して外商の進入を許さゞるの法なり。

伯林發行「ポスト」新聞の論する所も亦之れと大同小異にして、若し歐洲諸國が合衆國に對して最惠國條款の適用を拒絶し、其輸送貨物に對し、課するに特に高率の關税を以てせば庶幾くば米國をしてその態度を一變せしむるに足らん、而して之れが第一着として歐洲諸國は宜しく獨乙帝國を助けて、先づ其目的を達せしむ可しと云へり、蓋し現在の米獨通商條約は明後千九百三年を以て期間滿了となる可きものなれは、其改正を機とし、先づ獨乙帝國をして上記報復の政策を實行せしむ可しとの意なり。

昨年米獨通商條約の改正を論じて大ひに世人の注意を引たるヴオスブルグ、レコー博士は露獨の對米通商同盟を促し、英國も亦早晩之れに加盟す可きを信じ、次て米國の澎脹的勢力に拮抗することを得可しと論じたり、而して屢々獨乙帝國外務省の意見を代表する「ケルニッシエー、ツァイツング」は近刊の論説に於て大に此政策を稱讚し、生存競爭上歐洲諸國は合衆國の特別なる地位を減殺し、或は少なくも之れを失効に歸せしめざるべからず、殊に合衆國は鉄類市場に於て我獨乙帝國の最も危險なる競爭者なれは、其關税政策は必ず此主旨に元きて之れを定めざる可らず、之れ單に便否の問題にあらずして死活の分るゝ所なり、而して合衆國を强制して歐洲の通商組織と調和せしむるの道は露獨の協商を以て最捷逕路となすと云へり。

維納新聞「ノイエス、ターゲブラット」も亦熱心に歐洲各國の對米關税同盟を勸告し、米國を以て歐洲共同の敵となし、各邦は互に相同盟するに非らずんば他に自衞の道なかる可く、其危險の大なる彼の兩國同盟幷に三國同盟をして互に相調和せしめ、殊に獨佛の兩國をさへも遂に握手せしむるに足らんと云ひ、同じく「アルゲマイネ、ツァイツング」は過般如何にして米國の澎脹的勢力より歐洲を救はんかの問題を攻究せんが爲め、プラーグに於て開會せるボヘミヤ商人の集會を評論するに當り、米國は既に商世界を征服するの準備に忙はしく、歐洲を從へて之れを米國の經濟的並に商業的屬邦たらしめんことを期し、最早從來の如く「亞米利加のことは之れを亞米利加人に委せよ」てふ所謂モンロー主義を以て滿足せず、更に一歩否百歩を進めてトラスト組織を標となし「亞米利

加及び歐羅巴のことは共に之れを亞米利加人に一任せよ」との方針を取るに至れり、歐洲諸國にして若し亡國の厄を免れんことを願はゞ、須らくナポレオン一世の故智に倣ひ、米國排斥の所謂大陸法(コンチネンタル、システム)を立つ可しと說けり。

倫敦の「タイムス」はサスがに大陸の大新聞たるの態度を示し、右の所謂大陸法なるものを以て不條理の甚しきものとなし、ナポレオン帝の鐵腕あるにあらずんば到底成功の望あらずとなし結論して曰く。

何れの點より之を觀察するも斯る政策を取るの甚だ妙ならざるは之れを證明するに難からずと雖も、殊に斯る目的に向つて歐洲の團結を得るの到底見込なきは第一の欠點なり、例へ如何なる風の吹き廻しにて斯る結合の成立することありとするも、我英國は決して之れに加入することなかるべく、英米同胞間の通商は依然として從來の如くなるべし、蓋し之れ吾人の利益、因襲、并に傾向の等しく吾人に命ずる所なり、我に廣大なる合衆帝國並に殖民地の市場あり、復何を苦んでか斯る苦肉の策を弄せん。

佛國新聞も亦頗る驚愕せるものゝ如し、今「プレッス」の所論を見るに曰く。

日清戰爭并に列國軍の北清遠征は所謂黃禍(エーローペリル)なるものゝ已に去れるを證明したり、何くんぞ知らん更にヤンキー、ペリルの代つて、歐洲殊に英佛の商業を劫かさんとは。

同新聞も亦對米の策として關稅の改正を說くこと、彼の獨墺の新聞紙と異ならず、其他幾多の論說あるも煩を恐れて之れを畧しぬ。

●佛國の社會的、政治的並に宗教的傾向

佛國の一雜誌「ラ、レビュー」の主筆は今日を以て歷史上佛國一轉の期となし、同國青年所屬の重なる政治的、宗教的並に社會的團體の意見を各其代表者を通じて聞き集めたり、而して其結果は載せて同雜誌六月號上にあり、今就て之れを見るに、王政論者、社會主義者、カソリック信者、無宗教者、宗教一新論者、猶太人排斥論者、並に聯邦論者等雜然として各其主義とする所を表白すると云へとも、先づ大體に於て佛國青年の口調は有望なりと云ふ可し、併し自暴自棄の厭世家は尙甚だ少からざるが如し、左に其重なるものを摘錄せん。

コーオペレーション　即ち國家の權力を移して秩序ある勞働組合に與へんとするものにして、組織の方法等につき多少意見の異同はあるも、更に角此思想を有するものゝ最多數を占むるが如し。

共和主義　を固執するもの、復頗る多數なり、若夫王政を主張するものに至りては團體にあらずして個人のみ、一記者の曰く佛國は必ずやユーゴーの理想を實現して邦國中の共者となさん、即ち正義を以て最高目的となし、必要の實力を以て固めたる共和組織は之れ佛國の將來を照す可き不滅の光明なりと、而して彼は已に其光を微かに認むるものなり。

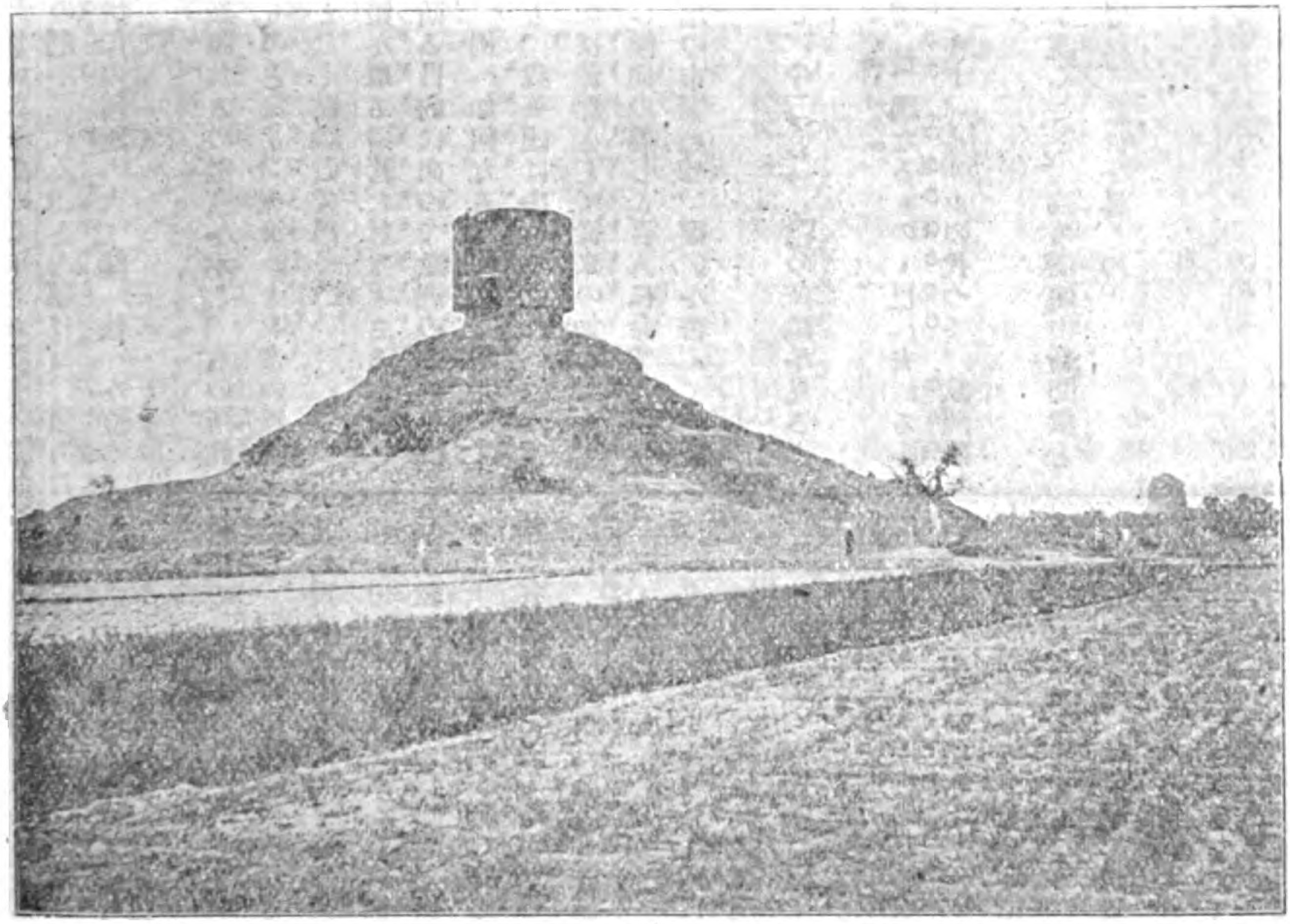
宗教問題　は佛國の治國難を解決す可き一大問題なりとは佛人多數殊にカソリック團體の主唱する所なり、一代表者は佛國從來の宗教主義は既に死せるを以て新に之れに代るべき新宗教を定めざる可らずと云ふ、又或は倫理教を主張するものあり、或は社會主義を以て

宗教となす可しと說くものあり、……要之社會主義を以て大に采色せられたる共和主義は思ふに之れ二十世紀の新佛蘭西を支配す可き思想なる可し。

破產の國家

七月發行のガントン雜誌に於てジョジ・ワルシュ氏は舊世界並に新世界諸邦の財政現狀を評論せり、左に摘譯する所は其一部なり。

英露の波斯蠶食、並に支那の分割は大國が弱國を並呑する近世の最大實例なりと云へとも、而も其以外に於て外國の破產亡滅に瀕せるもの甚だ少からず、例へば葡萄牙は債務關係の結果として殆ど英國の有に歸し、其支配を受くるが如し、又南亞米利加に於ける幾多の弱小共和國は今や殆ど其債主及び資本家の有となり、國家の大問題に就きても會社又は資本家の言は屢々其內閣及び大統領の意見を壓



亡國の遺趾

するに足るなり、蓋し國中有價のものは凡て彼等の所有する所なるを以て其利害に關する國政に對し、彼等が支配權を要求するは之れ自然の勢なり、…………ポリビヤは智利と難を構へたるの結果、今や一億五千万弗の負債に苦み、智利は之れを並呑せしんとして只々破產の自白を俟ちつゝあり、ポリビヤは利子の支拂に窮するも誰あつて金を貸さんと云ふものなければ、止むなく苛酷の重稅を課して國民の疲弊、財源の枯渴を顧るに遑なく、又時に財政の都合を以て軍隊を解散することさへあり、土耳古の財政も亦之れに類し、敢て此に資本を放下せんとするものなし、財政上の壞崩は蓋し早晩免れざる所なる可し。

海外

雜纂

地球發達の方向

兩極論と一極論

地球上の生物は單一の方向に發達したものであるかドウか、斯の樣な問題は元來日本人が一般に餘り趣味を感じない問題ではあるが、其實中々面白いものである、サテ地球は元々南北の兩極を具へて居るから、其發達も多分之れと相對應して南北の兩極から各別に而も同じやうに發達したものであらうと云ふのは、之れは所謂兩極論と云つて從來一般に行はれて居た所の說である、然るにヤツトこの頃になつて三月十八日發行のコスモムを見た處が、パウルコム氏の反對論即ち一極論が出て居て、餘程面白いやうであるから、左に其大體を譯出して見やう。

兩極論の前提として居る所を摘んで云へば、南極の物質的狀況が北極と殆ど同じであるから、其動物も亦殆ど同じでなくてはならないと云ふことである。

併し從來學者が多く右の前提を是認して居たのは、詳しく南極の動物を探見することが出來なかつたからである、實際北極の探見は已に北極に八十二度までも進んで居るに拘らず、南極の方面では、ツイ此頃まてと云ふものは博物學上ケルグエーレン島までしか探見せられて居なかつたのである。

處が一昨年に至つて彼の南極探見船ベルチカ號が、殆ど極の近くまで進入して行つて、色々水棲動物の新種族を發見することが出來たのである、サテ其の結果はドウであるかと云ふに、南北の兩極には各特種の動物が居ると云ふことが解つて、兩極論の前提が全く破れて了ツた、然らば兩極論は立たなく成つたとした處て、偖て其先きはドウなるのであるか。

この兩極各々特種の動物があると云ふ事實は奇妙にも地質學上の一般の基礎、幷に地球上に棲息する動植物、及び人類に關する吾人の智識と相符合するのである。

(一)大陸の形、(二)地質學上の已往時代に於て北極の周圍に動植物の繁昌したるの事實、(三)各大陸の南端に於ける所謂古代生物遺族の殘存等凡てこれ等の事實は、皆地球の發達は絕へず北極より南極に向つて進んだものである、と云ふことを證明しないものはないのである。」

(一)能く各大陸の形を考へて見るのに、皆北に進むに從つて次第〳〵に廣大となつて、其北端では殆んど互に相合するばかりに接近して居り、尙其間に幾多の島や陸が橫はつて之れを相聯絡して居る。

然るに南方は如何であるかと云ふに、北極では殆ど互に相連絡して居るものが南亞米利加、亞非利加及びオーストラリヤの三ツとなつて、遠く相分れ、南極に入つて相合するなど云ふことはないのである。

(二)古生物學上幷に地質學上、我々が今日までに得たる智識に依ると、北極地方には炭素時代以后に於て諸種の植物が頗る繁茂して居つて、地質時代の間絕へず代謝して、地熱の冷却するにつれて次第と南の方へ擴つて行ツたと云ふことを確めることが出來る。動物の移住も亦植物の移住に伴つて行つたに相違ない、我々は既に人類の初めて現れ出たる所も亦北極であらうと云ふことを信じやうとして居る位である。

斯る次第であるから地球上生物の發達及び移動は地熱の冷却するに

従つて植物及び動物の波が北極から次第〳〵と南の方へ押し寄せて行つて、先發者は後進者のために順送りに先きへ〳〵と逐ひ飛された結果であると云ふことが出來る。

(三)其故各大陸の南端に於ては、北極に發生し后進者のために次第〳〵に追ひつめられた所の初期の生物が殘存して居るのである。植物に付て云へば石炭時代のツリーファーン南亞非利加及びオーストラリヤのプロタチー其他色々の例がある。動物で云へばマダガスカルのレミュリヤンス及びエピオルニス、オーストラリヤのマルスピヤルス並にニュー、ジーランドのデイノルニス及びキウイ等の例が澤山にある。人類に就ても亦其例がある、即ち南亞非利加のブッシュメン及びオーストラリヤ土人ヒュージヤンスなどである、此等の劣等人種は彼の北海のエスキモーと相對するものであるなどゝ兩極論者が云ふのは大なる間違である、ナゼかと云へば彼等は溫暖の地に住んで居るのであるから、若し果して初期の人類でないとすれば大に其文化が進んで居なければならない筈である。

右述べた所の理由に由つて我輩は植物、動物並に人類等凡ての生物は皆北の一極に發生して次第に南進したものであると云ふ所謂一極論を主張するのである。

宣教師の掠奪論

茲に紹介する所の掠奪論は「フオラム」雜誌の七月紙上に出て居る宣教師ギルバート、ライド博士の議論であつて、誠に珍無類である、堂々たる博士の肩書を以て居ながら、譯もなく斯樣な議論をやつてのけるその度胸は誠に感心であるが、レベレンドなどゝ尊敬せらるゝ宗教家の口から斯樣な音が漏れると云ふは如何にも淺ましき限りである、これがジーザス、クライストの命を懸けて主張した、所謂神の福音だなどゝ云はれやうか、米國の社會が斯る暴論を聞いて、少しも之れを怪まないは之れ又ドーした譯であらうか、裏の翁さんや、隣の媼さんが頻りと耶蘇教の惡口をついたり西洋人を譏つたりするのも、ドウやら餘り無理でもない樣である。

戰爭の場合に敵人の財貨を掠奪すると云ふことは理論の上では餘り善くないやうではあるが、之れは古來の慣習であつて先例から云へば、正當な行爲である、團匪の暴動が初まつた以前から北京に往つて居たものは只何處に貨寶が澤山あるかと云ふことを知つて居たばかりではなく、又誰は耶蘇教徒の味方であつて某は敵であると云ふことを能く知つて居たのである、であるから暴動が起ると云ふと味方に向つては保護を求め、敵に對しては掠奪を行つたのである…………………實際最初の四日間と云ふものは掠奪の一番烈しかつた時であつて、各國の軍隊は皆頻りと占領の場所を變へて掠奪の便を計つたのである、其故何の支那人が一番惡い奴であるかドウかと云ふことは少しも問題とならないで、何の家が一番金持であらうかと云ふのが唯一の問題であつた、然うしてどの家もこの店も侵入を免れたものは殆ど一軒もなかつた、支那人は手を換へ品を換へて勘辨を願つた、併しよし掠奪せられても格別不平も云はないで自分等の命や家の殘つて居るのを見て結句喜んで居たやうである。

掠奪と云ふことは沒收と云ふことを意味するのである、であるから若し初から戰爭がないとすれば、勿論惡いことには相違ないが、併し一旦戰爭が初つた以上は最早罪惡とはならないのである、若し宜しくな

いとすれば其れは戰爭をやること其自身が宜しくないのであつて、之れに附隨して起る掠奪其ものが惡いと云ふ譯ではないのである。

北方ニゲリヤの奴隷賣買

「エムパイヤ、レビュー」の七月紙上ニ北方ニゲリヤの奴隷賣買と云ふ一項が出て居るが、これはトンキン氏の實驗談であつて、餘程面白い節が澤山ある、今試に其一節を話し申そう。

ニゲリヤの北方では由來奴隷の賣買が甚だ盛であるが、其重なる原因の一は確かに奴隷と云ふ物が此地方では最も便利な通貨であるからなのである、尤も小額の取引には通常貝子(タカラガイ)の殼を貨幣として用ゐるのであるが、少し多額の取引と來るとソウは行かない、ナゼかと云へば英貨一百ポンドに相當する貝殼を百ヤードの距離へ運ふには三百人位も要するのであるから、其距離が百哩もあつた日には丸ッきり運賃にこひて了ふのである。

サテ奴隷の相場は如何であるかと云ふに、其れは年の長幼と性の男女に由て各々差等がある、今其相場表を作つて見れば

男女七歳に達したるもの	二磅十志
同　十歳に達したるもの	三磅十五志
男子十七歳に達したるもの	五磅十志
男子人相好きもの(自十二歳至十七歳)	七磅
女子自十四歳至十七歳者	九磅十志
同　自二十歳乃至二十一歳の者	五磅
男子成人して髯あるもの	三磅十志
女子の成人したるもの	二磅

先つザットこんなものである、英貨一磅は凡そ我十圓であつて一志は其二十分の一、即ち凡そ我五十錢に相當する、其故ニゲリヤ北部に於ては人間一匹の價が平均五十圓弱と云ふ相場である。

* * * *

土人の一隊が凱歌を謳ふて戰場から歸つて來る、之れに出會つた一人の百姓は先つ彼等の凱旋を祝し、然うして小供の賣るのはあるまいかと尋ねた、處が直ちに大きな袋の口が解かれて、中から赤ン坊と云ふよりは寧ろ黒ン坊と云ひたい樣な動物が恰も蛆虫の如くにグヤ〳〵と匍ひ出した、誠に不氣味なものである、併し例の百姓先生そんな事は少しもお構ひないで、槍の尻で以て暫くこの蛆をアチコチ掻き分けて居たが漸くお氣に召したのがあつたと見へて、其れを袋に收め、代金を拂つて彼方へ急いだ。



詞藻

桂花集（風韻社詠草）

○　佐藤大蛾

月をおびて稲の香みてる畦道を行くかげ二人友かおらぬか。

荒磯の浪にくだけし月かげのまどかに澄みて沖しづかなり。

月をのせて敦賀に向ふ船の上に出雲の秋を泣きてわかれぬ。

はしゐして風まつ宵を山畑の芋の葉のぼる月おほいなり。

○　門野三果

讀經する聲のみさえて山寺の秋意しづかに月かたぶきぬ。

菅がさに月のひかりをさへぎりて旅籠をいづる順禮の子の。

釣り得たるうろくづ分つ橋の上に月はのぼりて人さやかなり。

渡場の舟まつほどに野は暮れて川沿やなぎ月ほのめきぬ。

○　都河不老

月の夜に雲の行くへを見てあればたちまち暗くたちまちあかし。

川ぞひのよるの道こそたのしけれ水岩にむせび月波にをどる。

板橋の上に涼みの人おほしゆふだちはれて月きよきよひ。

月の夜を磯みち傳ひさまよへば我が影おはく波にゆらげり。

○　高橋翠柳

山寺の鉦音そゞろ秋たちていけのみぎはに月かげくだけぬ。

巡禮のほつれごろもを風ふきぬ並木の森の月いづると

ころ。

○　森　蔚　堂

人絶えし古城の秋を我れとへば山なほ高く月ひとりすめり。

かつて見し油繪におほく違はずよこの森この月この雲のいろ。

月の夜をやゝくつろぎて上臈の母屋の妻戸に倚立たす見ゆ。

○　溝口　一

やり水のせゝらぐ庭におり立ちて月をこそ待て扇使ひながら。

松山のまつにもたれてゆふぐれを歌誦しをれば秋の月いづ。

○　小池武俊

たゞ一人小萩の庭におりたちて月すむ夜半を笛吹きす



さぶ。

○　白柳秀湖

君が家の籬の一葉口にふくみ柴笛吹くよ月あかきゆふべ。

霜けぶるみやこ大路のかぜさむく半月高しゴシックの塔。

○　渡邊光風

霜こほる野營の月に太刀とりて夜寒をいたむ征衣のやぶれ。

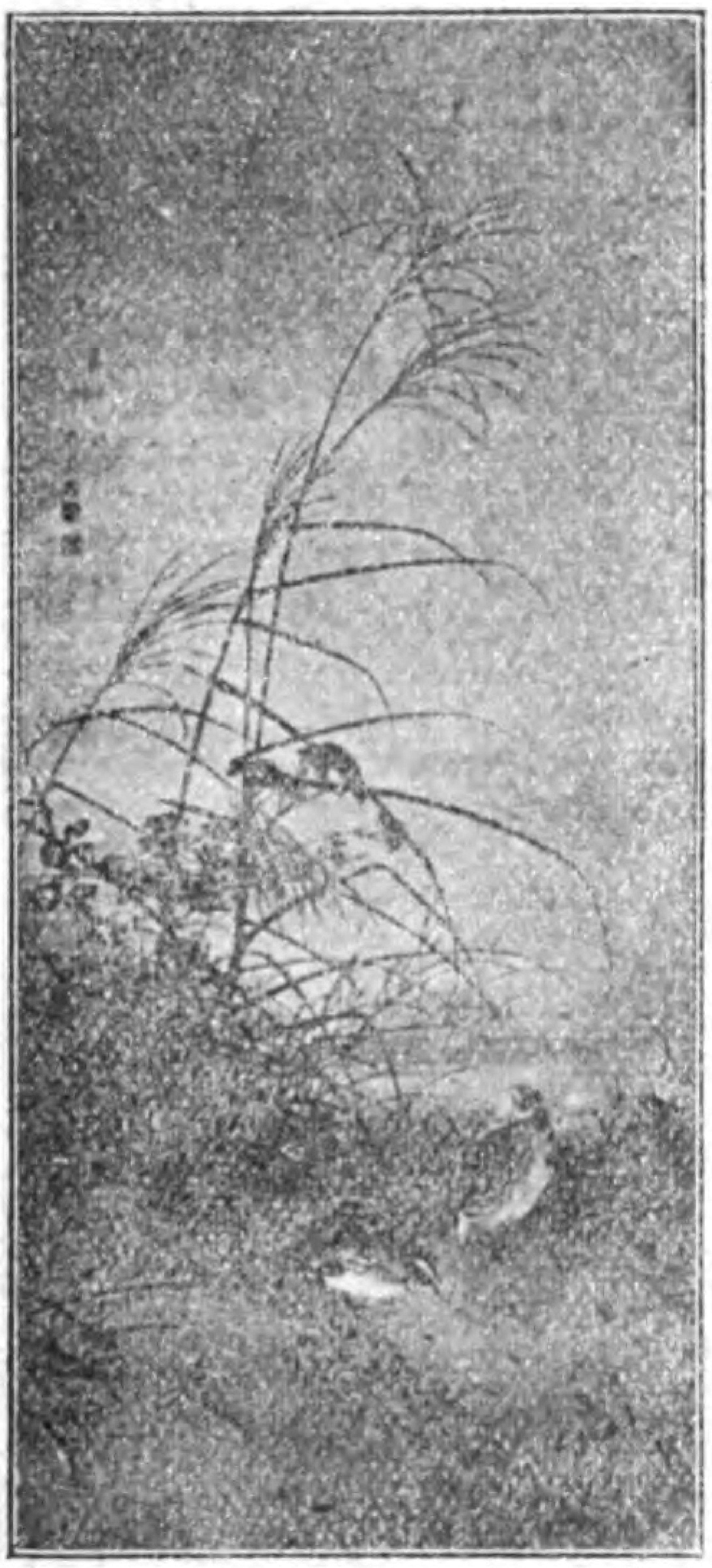
俳句　紅緑選

花火

境内に踊もありて花火哉　北岫

花火果てゝ歸る小舟や二十日月　星史

花火見る夜舟や露の冷かに　松濱
空腹に戻る堤や遠花火　笠雨
水の上に花火の玉や散亂す　江南
宵月の子供花火や橋の上　啞子
稻妻も折々すなる花火哉　快雨
花火見る人夜ふけたる河原かな　烏不關
畠路を走る人あり晝花火　東林
花火舟二十日の月の出汐かな　天眼坊
落て來る紙の達摩や晝花火　鬼水
花火見ろ夜や物干の露時雨　蕉蘋
更けし夜の花火の音や[illegible]にきく　信
振り向けば子供のあげし花火哉　何客
歸り道いたくも上る花火かな　稻青
花火ふる汀の草や白き花　五空
江の闇や花火落ちくる萩の中　樂南



わが船に落ちて來さうな花火かな　仝
屋根に居て待遠き思ひ夕花火　生巢
江頭の夜氣に對する花火かな　仝
とある間に花火揚がりしうしろかな　雨翠
かしこさの高きにのぼる花火かな　仝
椽先に花火線香や蕢盆　活堂
花火船芦押分けて出たりけり　仝
花火消えて再び闇や船の中　虛靜
遠花火矢橋一舟遲れけり　仝
花火見の歌妓の奢りや屋形船　仝
花火見て歸るさ月の夜寒哉　天風
花火みるや人に押されて潦　仝
淋しさは花火線香の仕舞哉　仝
村祭素人の花火覺束な　耕村
花火見の裾草露にしめりけり　仝

木綿取の畑に落ちくる花火かな　耕村

人

雨の手に線香花火の遲速哉　稻青

地

穗芒に花火の筒を倒しけり　天風

天

淀の夜を飾る花火や淀の花　虚靜

撰者吟

草露や花火しまうて歸る人

幽王に褒姒が笑みも花火かな

見當はいづち花火ぞ家根の人

柹　十月十五日まで

時雨　十一月十五日まで

每號三才當撰者に雜誌一冊づゝ贈呈

漢詩

小山驛車上所見　前田舍　潤慧雲

陡崕一帶。氷簾數條懸。綠樹覆其上。奇巖矗在前。流者如鳴珮。激者似沸泉。飛沫吹不已。一溪自欲烟。暑行三十里。到此秋柏肩。巖隙幽花發。嫣然媚人妍。

蒲生浦

佛恩說向北溟頭。擬使慈光六合流。安得潮風千萬里。梵聲送到鄂羅州。

暗潮拍岸樹生風。蕉衫倚石夜涼中。橫截海心三百里。漁燈一陣照天紅。

歸家

行程百里踏炎塵。卸擔偏忻秋味新。好在牽牛花捧盞。一籬風露饗歸人。

小山一首幽峭清妍、歸家絕句、風流自適、使人一讀洗滌胸中塵滓、蒲生浦二絕、雄健之筆、稍異平生、葢蘊於中者、與境相觸、偶然發露者乎、

木公書屋　家園雜詩抄錄 以下皆然　赤松松亭　景福

筆硯家君樂。州閭夙所欽。古松雲屋冷。修竹雨窓深。左氏傳朝讀。右軍書夕臨。嗒然時隱几。遐想寄山林。

前聯幽隽可味、後聯左氏右事巧對、

近古齋後園、種竹一區、家大人命常淨掃、

籬外蕭疎綠影分。風枝露葉帶斜曛。呼僮日掃莓苔上。不使纖埃汚此君。

清人學宋詩者、往々有此種作、

無此香塢

天香曾自月中來。仙種今於世上栽。昨夜搗殘何藥臼。玉犀金粟曉庭堆。

天香、仙種、玉犀、金粟、湊合最妙、

貯雲亭

薰風陣々透茆檐。涼向昏鐘斷處添。臨水龍吟松落々。繞階仙仗筍尖々。雲歸澗底常含濕。人在山中更避炎。閑坐不須童秉燭。早蟾光碎一重簾。

措字造句、頗費商量、龍吟雲歸、殊見工夫、

一桁茅亭絕世紛。泉音鳥語靜中聞。不貪心是先人寶。曾住青山貯白雲。



木曾の秋色

西園懷舊二十韻

夙希邦家樂。曾懷畎畝憂。老成空隱遯。窮僻罕朋儔。結契中書令。親交即墨侯。林園詩料富。門巷俗塵收。清爽碧梧雨。馥芬丹桂秋。月光窺蕙帳。水影浸松舟。景象時々好。經營事々幽。亭因貯雲築。棚為看山修。種竹新開徑。澆花更鑿溝。母畫三兩本。奴橘百千頭。藥甲尖々茁。茶槍短々抽。芋羹宜夕膳。蓮飯可晨羞。酣飲傾樽蟻。詠歸携杖鳩。同陪天女廟。共憇木公邱。靜翼依深樾。恬鱗在小洲。於心皆自得。與世不相求。常見精神健。長祈善慶優。椿年如有奪。薤露竟難留。草樹思遺愛。烟霞念昔游。嗚呼吾父逝。歡宴忽焉休。

對仗齊整、一字不苟、末段悽涼嗚咽、

孝子至情自見、静裏句、並原于東野、静木有恬裏、滑波無躁鐙句、
假以寫優遊自適之意殊好、

覲英皇即位六十年祭於聖保羅（セントポール）寺院、有栖川親王、伊藤侯爵、加藤公使及各國大使、公使等皆列、儀仗莊嚴、觀者如雲、蓋千古盛典也、

佐々克堂友房

正議舊邦維命新。子來民庶祝佳辰、銀鞍白馬佳公子。金帶峩冠大使臣。萬國會同聯玉帛。滿都簾幕絕埃塵。喜看禮樂洋々裏。淑氣氤氳六十春。

莊重典雅

過三世奈勃翁墓

塔尖高聳絕塵氛。云是奈翁三世墳。猶有居民說興廢。疎林落日帶殘雲。

觀佛國共和政紀念觀兵式

旌旗飄風白日曛。千軍萬馬亂紛々。廿年遺恨不磨盡。決眥伯林城上雲。

有燕雲睡手之槪

布立司洛（ブリツセル）白耳義首府有小巴黎之目

創業以來六十年。築城深塹備方全。縱衡籌策何須說。秦楚之間卓獨然。

白國人口不過五百萬、眇焉一小邦、介立普法二强國、堅甲利兵、足以折衝禦侮、視之露國四億萬人爲列國所蹂躪、不啻霄壤之差、乃知國之强弱不由其大小矣、

和蘭所見

柳陰垂釣東家叟。原上逐羊西舍童。滿月烟光催客感。宛然是我故園風。

獨國波堡

歐洲家屋非石造、則甎瓦、今見茅擔白堊、宛然本邦田風景、

眼中無處不平原。斜日斷雲烟樹昏。有似故園風致好。茅擔白堊數家村。

萬里異域、桑梓入夢、而偶値風物似故國、童稚之心、自發、大丈夫亦所不免也、

秋海棠

課題照募三十七首　選錄四首

（甲）

關　青山

賦罷長門恨更長。香閨夜々夢君王。灑將紅淚滿階砌。開作秋花稱斷腸。

着意新警、

（乙）

菅原梅庵

幾枝冷艶媚新涼。幽砌細吹蓮後香。自是秋宵多所思。懶燒銀燭照紅粧。

醉案頗巧、某集中亦有此結搆、或是暗合、

（丙）　松井行義

臙脂含露百千莖。怡似佳人帶宿酲。一様海棠嬌且艶。
纔冠秋字不堪情。

巧思妙案

（丁）　佐々木茶溪

花梢猶帶淚痕新。占得秋芳八月春。悄立階前紅滴瀝。
檀心一點屬何人。

情思脉々

詩課題

◎題菅公謫居圖　七言律○十月十五日締切 ○用紙郵便はがき

右は下谷區谷中三崎町町田柳塘宛投稿の事



雜錄

倫敦と東京　其一

在英　鬼翁

英皇版圖の下には一個の大陸、一百の半島、五百の岬、一千の湖水、二千の河流、及び一萬の島嶼ありと申し候、東洋の英國と威張る我邦のこれまでに膨脹せらるゝは未來何年を要すべきや、敢てこれ丈けのものを我政權の下に置く必要は無之候へ共せめてその十分の一、否百分の一千分の一にても我商權の下に支配したきものに候、アンクルサムの勢はジョンブルを壓したりなど申し候へ共、マダ〳〵本家たる財産名望は十分有之全盛期は此上百年や二百年は續き可申候

一昨年の冬卑南（ペナン）港に立寄りし時、船の上にて一英人と雜談の際、南亞弗利加の遠征に就て英政府の失費莫大なれば如何に世界の大金持たる貴國でも此上二年三年つゞけられては堪まるまじと申したるに、彼は微笑み

て直ちに海岸を指し、「アレ見玉へアノ陸上に見渡す涯り數限りも無く生へ茂れる椰子の樹は廉く見積りて一本十志(ペンシング)(五圓)の價あり、心配御無用、廣き大英國の富源は此卑南港の椰子丈けにても二年や三年の戰爭は續け得らるゝ」と申し候に、サスガの鬼翁も一寸荒膽を挫かれ申候、

最近五十年を平均して倫敦の家屋は一年に一万零百十戸ツヽ増加し來たり候、恰も我新潟市の全部が每年一ツヾヽ附け加はると同樣の勘定に候、東京の戸數は每年何戸ツヾヽ増加する割合になるやは知らざれとも、此一事にて東洋の英國と西洋の英國の差を御諒承下さるべく候

一ツ倫敦と東京を色々の方面より比較すべし、先つ交通の點から初むれば

△倫敦街衢の全數一萬五千

△此町を一直線に延長すれば、ニユーヨルクより桑港まで又は倫敦より露都セントペテロスブルフまで町續きとするを得

△シチー則ち東京で云へば日本橋區の中にて特に繁華なる英蘭土銀行(バンクオフイングランド)の近傍には一日馬車の往來平均九萬二千四百八十八臺、徒歩の人間同しく百十一万千七百八人

△同しシチーのチヤーリングクロッスでは一日五万の馬車通行す

江戸の八百八街が二倍になつたと假定しても知れたものと存し候、東京府の統計て市内の國道縣道里道合して其延長二百二十八里、僅に日本橋から廣島迄の道程に候、又九万の馬車が一日に往復する倫敦の一部と東京の全躰で三百五十三輛しか馬車の無きとは懸隔も亦甚しく候はずや、日本では人力車が馬車の代りをすると云ふ人も有らんが人力車の數とて東京市内全躰にて一人乘二人乘合して四万五千七百八十輛に過きす候、(馬車も人力車も明治三十三年三月末現在)

日本の鐵道官線私線合して其資本三億五千万圓に候、私設鐵道の一番大なる日本鐵道は其線路八百五十七哩、其資本六千六百万圓に候、倫敦は如何に

△倫敦市中に一番小さき鐵道、ノース倫敦鐵道會社は僅かに十二哩の線路にて三千九百万圓の資本を有す

△サウスウエスタン鐵道會社にては四億万圓、ユーストンのは十六億萬圓他は類推すべし

△市内セントポール寺院を中心として六哩の半經を書き其圓中に二百五十六個の停車場あり

八百五十七哩て六千五百萬圓の資本と、十二哩て三千九百万圓の資本を有すとは其差いかゞに候や、全國の總資本を引纏めて倫敦の一會社十六億萬圓の五分の一に及ばずとは情け無き事には候はずや、半經六哩の圓中に二百五十六個の停車場を有し、三分間毎に列車を出たし、或はロンドンエンドノースウエスターン鐵道か一日に十八噸の鋼鐵を磨減する又は市内リバープール停車場一個にて十八個のプラットホームを有すと云ふ如き交通の頻繁に且つ便利なる倫敦と東京市内既往の鐵道や及今後の設計と比へて如何なる感起り候や、イヤ高架、イヤ地平、イヤ地下と喧嘩計り起るも畢竟貧乏から起ることに候、ノースロンドン鐵道會社は市内にて一哩の布設に四百万圓の布設費を投し候、有名なる地下鐵道は一哩に七百五十万圓、最も繁華の地にては一ヤード一万圓一吋に三百圓の布設費を投し候、僅か五百万磅の外資に大政治家大紳商が額を集めて心配し、二度も三度も手古摺る樣にては全く駄目に候

全躰日本のは遊山鐵道に候、花見鐵道に候、神社佛閣詣ての鐵道に候、英國のは工業用の鐵道に候、商業用の鐵道に候、働く爲め勉むる爲め交通する爲めに設けられたる鐵道に候、甲武線の小金井や、山陽線の須磨明石や、其他成田、高野、金比羅、參宮、豊川と其他いづれの鐵道もが逸惰者の爲めに計ると根本的に相違致し居り候

倫敦の便利と親切を主にしたる鐵道は日本の如く御役人風を吹かせらるゝ恐れも無之、ウルサク切符を改めらるゝ面倒も無之、荷物の相符を要すること無之、人に座席を横領せらるゝと云ふことも無之候

電信や郵便は如何

△倫敦中央電信局には一局三千人の伎手有り
△電線は空中線のみにて市内の延長一万哩有り
△全市一日間に九百三十万通の郵便を取扱ふ
△平均一日に二十三個の外國へ郵便船を出たす
△郵便集配人の數四千人毎日十二哩を走りて四万二千哩優に世界を一週す
△電報は全國到る處必す二十分以内に着す
江戸橋の本局が少し目に馴れぬ外國郵便が來ると大騷きする樣な事無之候、本鄕から神田まて端書か七八時間かゝると云ふことは無之候、今度のメールは何日かと外國差出しの郵便を五日も十日も待ち合はす必用無之候、歸宅報知の電報を歸宅後に受け取ると云ふ恐れも無之候、（以下次號）

蠣房鬼話

有樂氏

▲兆民居士病を得て死せんとするや「一年有半」の著あり、已に生前の遺著と稱す、其命する所の奇なるのみならす久しく東方のルーソウと稱せられ日本の曼倩と唱へられたるもの其絶筆とする所必すや奇絶人を驚かすものあらん宜なり旬月を出てすして已に四万部を賣り恐くして尙足らす洛陽の紙價爲に高からんとするや
▲余は嘗て三醉人經綸問答を讀て深く居士の文に心醉し居る者也、奇著の出する如何ぞ躊躇す可き、直に一本を購て匆々之を讀過する書中記する所、斷篇零句所謂一隨筆に過ぎずして素より大議論として見る可きものあらず、東方のルーソウが國民に訣別する最後の着述としては稍〻物足らぬ憾なきに非すと雖も爾れどもサスガに兆民居士也、忽にして冷笑忽にして痛罵、時世を諷議し、人物を軒輕し、或は文章を論し或は義太夫を評す、奇思汪渤、文氣飄忽として字々飛はんとす、如何にしても是の如き奇文が大患身に在り已に頻死の宣告を受けたる人の手に成らんとは遂に思ひ及はす、眞に是れ文壇の一大偉觀。
▲然れとも居士も人也、如何に平然たりとは云へ是の

如き場合に處し逐に平然たる能はさるものあらん、其濱寺の散步に夫人に戲れて相抱て水に投せんといふ、素より一場の諧謔なりと云へとも讀て玆に至り誰か一滴同情の涙を動かさゝらん。

聞く居士の病や將に二ヶ月に耐へさらんとす、而して居士は其間を以て哲學的著書を畢るに屹々たりと、嗚乎一代の奇書の出つるの日は正に一代の奇才を葬るの日ならんとす、吾人は之を待たんか、將た待たさらんか。

▲故友人古河老川肺を病て須磨に臥すこと四年、其間病を勉めて筆を中央公論及ひ其他の新聞雜誌に取り、僅かに養痾の料を支ふ、今「一年有半」を讀て頗る老川病中の文氣に彷彿たるものを覺ゆ、蓋し其况情の相似るに依るか。

▲老川義太夫を嗜む太し、「一年有半」文樂座の記、恰も是れ老川得意の越路談也。

▲蘇峰、矧川等の一代の文運を鼓動したる其功や沒す可らす「國民の友」「日本人」の始めて出でたる殆んと天下の少壯者をして狂せしめんとするものありき、而して頃日古雜誌を晒らして「日本人」創立の矧川の文を見る、文藻の絢爛なるはあれとも議論淺薄寧ろ厭ふ可き者あるを覺ゆ、想ふに蘇峰當年の文亦爾るものあらんか。

▲中西神水操守一ならず、嘗て佛敎に在り自ら新佛敎の勇將を以て任したりしも去てユニテリヤンに入り、ユニテリヤンを去て更に天理敎に隱れ、惜しひかな今や殆んと廢材たらんとすれども、文思汪洋、筆を下して一瀉千里の概あり、論文家として當今多く儔を見さる可し、宗敎革命論、世界三聖論の如き其傑作也。

▲雪嶺の文、文章として妙なるあり、妙ならざるあり、唯觀察の奇警、人を拔く一等、「日本人」の壘愈堅し。

▲大學出身の少壯學士、能文の士高山樗牛あるのみ、其他特に擧げて稱すべきものなし、但し大町桂月、久保天隨は達筆也。

▲其文藻思想の如何にかゝはらず多く名を署し、新聞

雜誌に多く現るもの之を稱して能文の士と稱す、今日文章家の標準も亦賴み少き哉。

▲世の好評を博せんと欲せは唯須く譯もなきことを如何にも六ヶ敷、駄々羅長く書き立つへし、今日の讀書家も批評家も少し長きもの、少し六ヶ敷そうなものは到底讀了するの勇なし、されはとて讀まぬ顏も爲し難し、此を以て倚らず障はず褒め置くなり、今日新聞雜誌の新刋批評率ね是の類。

▲町田柳塘、詩を能くし、文を能くし、兼て俳偕に及ふ、「讀賣」の新詩史の如き尤も見る可きもの也、而して名聲未だ大に揚らず、陋巷に窮處す、天の奇才を苦しむ何ぞ夫れ茲に至れる、

▲今日漢詩に名あるもの何ぞ限らん、而れとも余は特に本田種竹、野口寧齋二人を推す、前者は格調を以て後者は清新を以て。



▲臺閣諸公、伊藤尤も好て詩を賦す、詩として太た見る可きなしと雖もサスがに率ね堂々として大臣宰相の風あり、山縣のは謹整の風あれども貧氣あり、頗る其人に似たり。

現內閣は稱して俗物の集合團といふべし、詩でも作らんとする風懷を有するもの唯一人の芳川あるのみ、是すら尙有名の俗物也と云はずや。

▲所謂良二千石の詩人、山口の古澤公堂、島根の金尾藍田二人

▲子規の俳偕に於ける鐵幹の和歌に於ける兎に角舊圈を逸脫して一新淸運を開く、漢詩は依然として唐宋の餘沫を拾ふのみ、蓋し詩は之にて吾國に於て終りを告けんとするか。

▲末松靑萍多藝多才を以て稱せらる、而して文字を作る太た拙、書翰の如き尤も然り、蓋人の案外とする所、翃川蘇峰亦動もすれは人の讀む能はさる字を作る。

蕉雨殘滴

香山生

◎宋の過賢は高德の禪師なり、而して一生飲酒を事とし酒仙の號あり、醉へば必ず放吟し道俗をして聽かしむ、其歌寓意警拔、世の傳稱する所なり、其例左の如し、

楊子江頭浪最深。行人到此盡沈吟。他時到若無波處。還似有波時用心。

秋至山寒水冷。春來柳綠花紅。一點動隨萬變。江村烟雨濛々。有不有。空不空。笊籬撈取西北風。

生在閻浮世界。人情幾多愛惡。秖要喫些酒子。所以倒街臥路。死後却產娑婆。不願超生淨土。何以故。西方淨土且無酒酤。

超脫の志尙、推知すべし、

◎明の太祖の功臣郭德成も亦酒に隱れ以て其終を善くす、太祖を佐けて天下を定めたる功臣、大概嫌疑を以て禍を蒙むる中に、獨り優遊自適福祿を保ちしは酒の德なり、太祖或る時、郭德成の禿顱を指し、風酒漢、髮毛此の如きは酒の過にあらずやと戲れしに、郭德成枯野(かれの)の薄(すゝき)に似たる殘毛を捻りながら、猶其多きを厭ふ、盡く剃りて光やかさんと欲すと答へたれば、太祖は胡蘆止まざりしと、亦箕子佯狂の古智に傚ひしならん、

◎前田慧雲師の學苑談叢に云へるとあり、夫れ詩文書札は僧家に於ては緒餘の末枝にして貴ふに足らずと雖も、亦或ひは以て禦侮の資誘引の具と爲すべきなり、加之善く墨外の神韻を領し得るときは、其胸塵を淨拭するに於て、或は面壁の工夫に勝るものあり、故に古より禪林多く之を習へり、蓋し以て一種の法門と爲すなり、吾宗の徒、何肉周妻跡を世間に寄するを以て、動もすれば鄙俗に陷り易し、乃ち講經の餘暇、心を筆墨に潜め、思を文字に寄することあらば定て氣象を高傑ならしむるに益なからん乎と、廣瀨淡窓も亦曰く、詩文を好むものは溫和寬厚正直、好まざるものは放僻邪侈偏狹と、是れ共に粹然たる君子の言なり、諺に云ふ君子は欺き易しと、蓋し自己の正直の心を以て他人の心を忖度すればなり、何ぞ知らん彼の小人は君子の好む所を量りて投合するを、詩文を好む者を欺くには詩文を以てし、貨賂を好むものを欺くには貨賂を以てし、其手段千變萬化愈出て丶愈妙なり、今の詩文を好むと稱するものも十中八九は、名を釣り利を得んと欲

するのみ、眞に風流韻事として好む者甚だ少し、

◎廣瀨淡窓の學德は世人皆之を知る、而して旭窓の部吝、人の唾棄する所なり、されども詩に於ては旭窓の技倆淡窓を軼ぎ、嗜好亦極て篤し、淡窓の言の君子に適して小人に適せざる一例此の如し、

◎伯夷叔齊の名は、堯舜禹湯と共に、千歳に照映すと雖も、人其の姓名を知るもの鮮し、伯叔は兄弟の次序にして固より姓にあらず、夷齊は謚號にして亦名にあらず、謚法に曰く熱心克莊を齊と云ひ安心好靜を夷と云ふと、孔叢子の記する所によれば、夷齊の父は墨胎氏名は初字は子朝、伯夷は墨允字は公信、叔齊は墨智字は公達と云ひしと、

◎三十六計逃げるが勝だと云ふ諺は、古來我邦にて云ひ傳へたるものなれども、其出處は南史王敬則の傳にあり、曰く三十六策、走是上計と、

◎昔の名の聞えし俳人遊歷の途次中秋に遇ひ、吟客筵を開きて歡笑せる處を過り、一句を献ぜんと乞ふ、衆其襤褸を纏へるを見て乞丐の徒と爲し、目笑して之を許す、乃ち筆硯を借り先づ三日月のと書し暫く沈吟の躰なれば、衆嘲りて今夜は幾日と思ふ、十五夜なるに三日月とは何事と、詰りしに再び筆を把りて、頃より待ちし今宵かなと一座驚嘆せりとは陳腐なる談柄なれども、明の唐伯虎も之に似たる事あり、伯虎或る時山に游びしに山上相會して詩を賦するあり、伯虎乞兒の躰を裝ひ、一詩を以て一杯に代えんと乞ふ、人々嘲罵しつゝ之を領す、伯虎先づ一上と書す、衆已に輕侮の意を洩す、次も一上と書す、衆笑ふ、次に又一上一上と書す、衆捧腹絕倒せしに、以下筆を走らすこと奔馬の如く、終に一首の好詩を成す、曰く一上一上又一上。一上直到高山上。舉頭紅日白雲低。四海五湖皆一望。衆始めて唐伯虎たるを知り、慙悔して失言を謝せりと、

◎李白の字太白、其詩名の盛を慕ひ、張氏にして名を碧字を太碧と稱せしものあり、時人之を笑ふ、現今我邦にも相似たることあり、仙臺より國分青厓出で、同地の後輩に萬里崎船崖、浪烟崖等あり、森槐南の門下に湘南、梅南等南の字を附する者甚多く、尾崎紅葉の門人は風葉、春葉、荷葉等あり、友人某詩あり曰く、勿謂師門經琢磨、其如狗尾續貂何、或呼風葉或春葉、木葉爲堆秋色多。文壇諸條木葉小說家の多き怪むに足らず、

◎安井息軒の文は屢々見る所なれども詩は多く見ず、

此頃遺稿睡餘漫稿を讀むに詩長短數百首、風格整はずと雖も、命意は概ね可なり、劈頭第一、讀宋紀の一篇あり、曰く寇至色然駭、寇退復恬嬉、悠々三十日、未聞一策奇、謝安鎭物情、豈無所設施、陽戰陰主和、欺人又自欺、百年論自定、誤國竟歸誰、一誤猶尙可、再誤不可爲、と借りて以て今代第一の政事家たる某侯を戒むべし、陽戰陰主和、欺人又自欺は二十七八年の戰役より馬關條約、遼東還附の事情を論括して十字にあり、其後一誤再誤に止まらず、國民をして嘗薪臥膽を叫ばしめながら、身は妓を東山に携ふ謝安石を學ぶ、字々適切、息軒豫め量りて作りたるもの丶如し、

◎息軒の讀書餘滴は奧羽漫遊の紀行なり、其中佛敎觀の如何を窺ふべきものあり曰く、十八日風雨、架上書數卷あり、亂抽して之を繙けば、題して遺老話と云ふ、中に云へるとあり、享保十九年攝州四天王寺の重修や、最初の法窟なるを以て、僧寺をして月に錢三文を輸せしむ、此の如きこと十七年、此の時に當り、海內の寺凡そ四十七萬六千五百八十一、通じて錢二十五萬五千九百〇一貫一百三十六文を得たりと、嘻夥し因て思ふにこの四十餘萬、貧富懸隔、亦空院あれども、通じて之を計れば、寺ごとに五人を以て率となし、過ぐるありて及ばざる無し、則ち今日僧尼の數二百三十八萬二千百〇五人嘻夥し、古人云ふ、百姓十人僅かに能く浮屠一人を養ふと、是れ二千三百八十餘萬人の膏血を朘して、以て此無用の蠹を養ふ、民の窮して且つ盜むも亦宜ならずや、况んや是の踞奢僭度無く、偃然王侯を以て自ら居り、世人又從つて之を貴ぶ、其居は城の如く、其從は雲の如く、錦衣玉食を以て四海に横行す、至卑の者と雖も亦皆平民を奴視し、肯て少しも屈せず、財あれば貸して之を殖し、無ければ則ち之を榷越に賦し、寄する所を索むるが如し、或ひは少しく之を枝梧すれば、葬祭の際劫かして之を奪ひ、言ふに忍びざるものあり、以て其淫荒の資に供す、則ち罪惡貫盈なるものも、亦配流を以て極刑となし、身首處を異にするものは、千百人中一人のみ、我聞く外蕃に西藏國あり、其主喇嘛、世々浮屠を以て之を爲すと、遠夷僻陋固より言ふに足るなし、然れども寺院僧尼の數亦定額あり、則ち世界の大、古今の久しき、未だ今日より濫なるはあらず、國家政俗、千古に度越し、獨り此弊未だ革らず、怪しむべし、云々と口を極めて痛論す、旅次匆卒の際一蠹冊を見て此の如し、其平生釋門の徒を憎む蛇蝎の如き狀想ふに餘りあり、儒佛の確執

古來の通弊と雖も、當時僧侶の墮落或ひは今日より甚しきありて、息軒の言悉く誣妄と云ふべからざるほどならん、

掌豆足蛸

（日光周遊餘錄）

縱横

旅行と云ふと大層だが、僕の旅行などは手輕なものだ。短脚破靴の姿で古い蝙蝠傘一本もつたより、着がへも携へない。何時忙しくなるかも知れない身は、何時ひまになるかも知れないから、いよ〳〵出てもよいといふ段になると、殆ど即日に出發するのだ。「人の命は雨の晴れ間を待つものかは」といつた和尚があるが、全躰世の中の事はぐづつくと兎角故障が入り易いと僕は始終思つて居る。

僕は旅行に地圖や案內記をもつて行つたとは曾てない。こんなものを持て行くと兎角氣苦勞が殖える。動もすれば、豫定の時間を違へまいとか、某々の名所を見落すまいとか考へまはすので、其の通り行かなかつた時は、何だか一種の不快を感ずる。僕は初から何事も豫定しない。夫て隨分失敗もないではないが、其の代り餘り深く失望するといふこともない。僕は保養の旅行に論理學の智識はいるまいと思ふのだ。

僕の旅行を聞いて左も贅澤なものゝやうに嘲ける友人もあるが、これは其實存外しみたれて居るのを知らないのだ。僕の旅行に秘訣（といふ程でもないが）が四つある。一には道づれのない限り汽車は下等に限ること、二には宿屋に泊つて一切茶代を置かぬ事、三には停車場往復はてく〳〵と歩く事、四には土產物なんど買つて歸らぬ事、是だ。どうだ。

裏見瀧に行つた時人通りの少ない坂路に掛茶屋があつた。一寸休むで親爺と色々話して居ると其中に「夕方店を仕舞ふ時に水を一荷殘して置て山を下るといふことを言つた。なぜそんなとをするかと問ふたら、通りかゝりの車夫の爲だと答へた。僕は頗る感心して、內心其の心がけを賞して居たが「イヤさうして置けば必ず客を此處へ引きつけて吳れます」と得意氣に語つたので、僕の「感心」はどぎまぎして少し待つて吳れとためらつた。

湯元から中宮祠へ歸る途て一人の外人に逢つた。摺れ違ふ時丁寧に「お早う」と挨拶したから、僕も感心な人だと思つて答禮した。すると其次に斯うだ、「それて

は英語をお話しになりますな。之から湯元迄はどれほどありますか」と。惜に掛茶屋の親爺位に踏めた代物だ。

湯元の湯の瀧に茶店がある。僕が此處へ着くと其處の親爺が出て來た。僕は瀧を見て思ひがけず其壯大なるに驚いた時であつたから、頻りに之を賞め立てたが、親爺は一句々々に「難有う御座います」と言つて頭を下げた。「今朝　皇妃殿下のお成になつた時も大層お賞めに預かりました」と頗る得意であつた。坊主が佛恩報捨などゝやかましく言ふ筈だと僕は思つた。

湯の瀧は明治十七年の夏湯元の浴客笠原文平といふのが發見したのだと、例の親爺が話して頻りに其徳を頌して居つた。成程其由彫りつけた石碑も其側に立つて居る。所が湯元で天保年間に出版した日光山誌を讀んで見たら、明かに「湯の湖流れて湯の瀧となる」とあつた。

中宮祠から足尾へ行く途中朝十時に汗形峠(あせかた)を越えたが、此處で二三人三間餘りの大材木を背負つて喘ぎ〳〵坂道を上つて行くものを追ひ越した。所が僕は足尾へ着いて工場を一周して四時頃歸途に就いたが其途中で又此等の男と行き逢つた。御苦勞のことだと思つて、僕は自ら顧みて吾を知らず感謝の念を禁し得なかつたのである。

銅山へはやかゝらうといふ處の一大石へ黑々と何やら書いたものがある。「謹で通行の俗夫に告ぐ、汝等野心如何に勃々たりとも本大聖者の蹤痕を汚し天罰を受くることと勿れ喝。勿驚大俗凡夫、我等は是れ給乞食仲間、足尾の琉烟に鎖さるゝこと二日、今方に此毒霧を排して中禪寺の淸霞を迎へんとす、かく記す者は、花然大居士、天心大禪定、明治三十有四年七月廿又九日」とありて其下に二人の顔を書いてあつた。「勿驚」といふなら、こんなものを書かぬ方がよかつたらう。

足尾の工場縱覽案内所へ行つたが、誰も居ないから、餘儀なく事務所へ行つて、縱覽を求めた。應接の間で待つて居ると出て來たのは、十四年前法學院での同窓薄葉君であつた。互に奇遇に驚いて夫から色々昔話をやつたが、其話は先頃なくなつた政教社の畑山呂泣君は僕等と同級であつたことが分つた。世の中は妙に繋がつたものだ。

僕は日光の白根へ登つて初めて山の險といふことを知つた。魚串して登るなどいふことは白根を見て初めて解すべしだ。成程富士の胸突八丁や淺間の何とか石の

傍なぞは隨分嶮峻なものに相違ないが、夫は唯少しの間である。白根に至りては全山皆な然りだ。一歩を誤らば千仭の壑底に落つべしとは妙義あたりでもさうだが、白根のは直ぐに千仭の壑へ落ちずして、先づ十仭二十仭位つゝ木の根や岩角に突き當りながら落ちて行きさうだ。之を雨の最中に登つたのだから「其恐は及ぶべからずと」誰やらの笑つたのも無理ではない。之から見ると男體山は樂なものであつた。

　男體へは米國の軍人と登つたが、之も矢張り雨の最中であつた。頂上の小屋で焚火をして食事をして少し眠氣を催ほした時、軍人氏は僕を顧みて「惜しいとをした。茶道具をもつて來ればよかつたな」と。贅澤をいふにも程があつたものだ。

　足尾で案内の人が高い岡を指して「あれは二十年ほど前廢鑛として棄てたものだが、近頃技術が進歩して、其廢鑛を又もや堀りかへしてそれから結構な銅を採ります」といつた「所謂野に遺賢なしとは之です」と案内者は――別段言はなかつた。

　銅鑛を質によりて上下樣々の種類に分けて居ると、下等の奴には色々の雜り物があつて、往々上等のよりも奇麗だ。全躰鑛石はきら〳〵と金色がして仕上げた銅よりも却つて見た所奇麗なものだが、之は殊にさうだ。世の中には隨分そんな風の奴がある。

　あんまり杖を力にして歩いたから足に蚓が出來、掌に豆が出來た。そこで本題を掌豆足蚓とやつたのだが、實に奇抜なものでないか。何だと、其下へ「大涅槃」と入れたら、「成等覺證」の譜に歌へるつて？――アレあんな勿躰ないことをいふよ、正信偈を歌ふ奴がありますか。

私生子　下

佛蘭西　モウパッサン作

文學士　中日生　譯

翌日小兒が學校に行つた時、又もや冷笑を以て迎へられた。學校を歸へる時例の惡童は又例の樣に始めたが、シモンは確乎として

「私の爺樣はフィリップと言ふのだよ」

喝采は四方から起つた。

「何のフィリップだフィリップて何だ、何處で其フィリップを拾ひ出したのだ」

シモンは無言である。自分は心に確信があるから、彼に反抗の眼光を與へた。學校の教師は彼を保護して無

事に母の家に歸らした。此後三日間ばかりは、職人のフィリップは度々ブランショットの家の前を通る。時々彼女が窓の側に縫物する折などは話も仕懸けて見た。女は丁寧に挨拶した。然し何時も眞面目で、笑ひ合たり、家に入れたりする事はなかつた。唯た彼は世の常の男の樣に少しは己惚れて居つたので。彼女が自分と話する時だけは、常よりは顏を赤らめて居ると思うて居つたのである。兎に角、人の評判が一度惡くなれば、容易に恢復の出來る者ではない。ブランショットが如何に世を避け、人を避け、引籠もりてのみ居つたとはいへ、彼女の醜聞はもー此界隈には隱れもない事實となつて居つた。

又シモンは、彼の新しい父を餘程愛して居て、仕事が終れば毎晩彼と散歩したのである。彼は學校には熱心に行つた。朋輩の中に居りても得意で、彼等の間には返辭だにもせぬ樣になつた。

然るに一日始めに彼をいぢめた餓鬼大將か彼に

「お前虚僞を云うたな、フィリップなんていふお爺はありやせんよ」

「何故」と小兒は少し驚いて言ふ

惡童は手を磨ながらいふた

「お前の爺樣なら母樣の亭主である筈ぢやないか」

シモンは此論理の正しいのには、何とも反對が出來なくて閉口した。が

「だつて私の爺樣なんだよ」と言ふ。惡童は冷かしながら

「そんな事言うたつてだめだよ。お前の爺樣でないよ」

ブランショットの小兒は首垂れ、物思はしげに此場を立ち去つて、フィリップが働いて居つたロアゾン老爺の鍛冶場へ行つた。

此鍛冶場は森の中に在るから、餘程暗い。唯た大きな鎔爐の赤い火は、恐ろしい響を以て鐵砧を打つ毎に、袒いた五人の鍛冶師を照らした。彼等は鬼の樣に赤くなつて立つて居つた。目は常に彼等か打つ熱した鐵槌の上に注いて。心も其鐵槌の樣に重く昇降して居つた。

シモンは何時の間にやら入り來り、靜に行つて友達の袖を捕へた。友達は振向いた。俄に仕事は中止され、皆不審がりてながめた。

すると此思ひ懸けぬ靜まりの中にあつてシモンの小さな柔しい聲は聞えた

「あのねーフィリップさん、ミショウドの小供共は唯た

今私に斯う言うんですよ。あなたは何言うたつて私の爺様でないつて」

職人は問ふ

「何故」

小兒は全くあどけない風で

「だつてあなたが母様の御亭主でないからつて」

誰も笑ふ者もない。フィリップは立つた儘動かない。鐵砧の上に載せた鐵槌の上に臂でもたれながら、双の手で顎を抑へて居る。彼は何か考へて居る。彼の四人の仲間は彼を注視して居る。そして是等の仁王の樣な人々の間に、シモンは小さくなつて心配げに待つて居る。すると突如に鍛冶師の一人は衆人の考を代表してフィリップに言うた

「あのブランショットは、實に好い女だよ、不仕合ではあるが、中々締のある女だよ、あれなら人の嚊となつて耻ぢないよ」

他の三人は「そうとも／＼」と言を揃へた

フィリップは是れに續いて

「彼の女の失策りといふのは、自分が惡るかつたからか知らん。彼の女も度々緣組の相談は受けたことがあるのだがなー」

三人は一齊に「そうとも／＼」

フィリップは續いて言うた

「あの女が腕一本で、彼の兒を育だて上げる爲にや、いくら苦しんだか知れやしない。又敎會堂へ行く外には他行しない樣になつてからと言ふ者は、人知れずにいくら泣いたか知れやしないよ。實に神樣でなけりや彼の心配なんていふものは分からんよ」

「眞にそうだよ」

此に至りて一座靜まりかへつて、吹子の響の外に聞えるものもない。するとフィリップは俄にシモンの方を振り向いた。

「お前母様の處へ行つて、今夜私が話に來るつて左樣言うて御出」

斯いうて彼は小兒の肩を取りて外に押し出した。

自分は其仕事に取かゝり、一打の合圖と共に五個の鐵槌は鐵砧の上に重く落ちた。

彼等は夜になる迄此樣にして仕事を續けた。手に持てる槌と同じく、力強く勢よく、そして愉快に、其中でもフィリップの槌は一きわ勢よく耳をつんざく許りに他の者共の槌音を打消して聞えて居る。丁度祭日などに響き渡る大敎會の鐘の音か他の鈴よりは一層強く鳴

る様にてそれから彼は目に一種の光を浮べ、火花散る眞中にありて心ありげに鍛えて居る。

夜の空は一面の星の光となつた頃、彼はフランショットの家の戸を叩いたのである。彼は教會行の衣物を着て、襯衣なども新しいのを着、鬚にも手入れをして行つたのである。

年若の婦人は戸口に顯はれた。顔には深い悲しみを表はしながら、

「フィリップさん、斯う夜更けて妾の處へ御出になるなんてお止なさいよ」

男は何か返辭しやうとしたが、何も言ひ兼てもじ〱して立つて居る。

其處で女は

「貴郎も御存の通り、今では妾を思うてくれる人などは誰もありませんよ」

男は俄に

「あなたが私の女房にさへなれや、そんな事は何も構はんぢやないですか」

彼の此言に答へる者はなかつた。彼はつくねんと獨り戸外に立て居つた。室の暗がりの中には何か物か重なり合ふ樣な音がした。

今は彼も急いて室内に入つた。するとシモンは床の中に眠りて居つたが、母様の接吻を受け、母様が低い聲で自分に話して聞かせるのを、聞いて居つた處であつた。フィリップはシモンを筋骨逞しき腕に持ち上げて

「お前、お友達に斯うお言よ、私の爺樣は鍛冶師のフィリップルミーといふ人で、若し私に悪戯をすれば、誰でも耳を拔いてやるつて言うたつて」

翌日學校の生徒も集まり、教場も開いた時、小さきシモンは顔色を青くし、震ひ聲で言うた

「私の爺様は、鍛冶師のフィリップルミーといふのだよ、誰でも私に悪戯をすれば、爺様か耳を拔いてやるつてろういふたよ」

今度こそは誰も冷笑しない。畢竟誰でもフィリップルミーを能く知つて居り、斯う言ふ爺様は誰でも欲いと思うて居つた樣な人であつたからである。（完）



思　潮

華族廢止論

「廿世紀」記者

我國進歩の樞軸にして道德智識の中心は常に中流の人士たるは固より世人の異議なき所なるべし、然らば時餘りあり資餘裕ある華族にして國民の卒先者たり指導者たる能はざるは何故ぞや、其地位の安全にして堅固なる進歩の要件たる競爭を欠けばなり、物沈滯すれば則ち腐敗す、華族には競爭なく淘汰なし、故に進歩なく沈滯す、其の腐敗見るに忍びざるは當然の理なり、其の資金を利用するを知らず、座食して飽醉す、學界彼等に負ふ所なく、慈善事業の擧りたるを聞かず、殖産興業は彼等と境を異にす、切めて德義の旌表たるべきを留めば子爵夫人にして池中に慘死するあり、令孃にして車夫と姦するあり、言語同斷閑居不善を是れ事として耻ぢず、華族先づ廢せらずんば一夫一婦は行はれ難く、罪業日に募りて殆んど停止する所を知らざるなり、宜なり、學習院に於ける彼等子弟が年々平民に蹴落されて大學部最上級に一人華族なきや。士族平民と雖亦帝臣なり、其の忠良に於て安んぞ華族と擇ばむ、特に皇室の藩屛として華族を設けざるも四千萬の忠民は悉く熱誠なる皇室の藩屛たるべし、若し夫れ華族世襲財産制の前途に至りては夙に識者の頭腦を煩はせる所、況んや上述の如き現狀を見るは誠に國家の慶事に非ず、吾人は我國の一隅に此の如き劣等者を有し、利用せられざる資本の貯藏を喜ぶ能はざるなり、速に救濟の道を講じて國家の進運を期圖せざるべからず、故に曰く、勵冑を待つには別に其の道を以てし、速に華族の階級を廢し彼等を驅つて競爭の渦中に投じ共に進歩の潮流に泳がしむべしと、是れ實に自然が命ずる百年の大計にして又時代の精神に添ふものと謂ふべし。

臺灣を南洋道と改稱すべし

「教育時論」記者

我帝國地理上の區劃が。一畿八道に分かれ居ることは、直接政治的區劃に關係する所なしと雖、其國土的觀念を我國民の腦裏に固定せしむるに、大に便益あるものたるは、更に疑を容れず、而して昔時今の北海道を蝦夷と唱へたる頃は、同島に對する觀念は、全く國民の國土的觀念と區別せられ、政治上、教育上の不都合尠からざりしに反し、一たび北海道と改稱せられてより後は、此區別全く廢絶し、南琉球諸島より、北千島列島に至る、一千餘里の我版圖に對する國民の國土的觀念は、全然融和渾一するに至り、同島の開拓教導上、其便益する所至大なるは、何人も能く知るところなり、領土の名稱、豈に輕視すべけんや。然るに臺灣の我版圖に入りてより、既に七年を經るも、我國民の同島に關する觀念は、尙別に一種の區劃を爲して、從來の國土的觀念と、融和渾一するに至らず、隨ひて政治上教育上に、不利不便を與ふること亦尠からず、苟も同島にして一たび我皇版圖に歸したる以上は、既に純然たる大日本帝國の一部分にして、其土地及人民は、天皇陛下の主權に屬する者なれば、我國民の國土的觀念より內地と同島とを區別せしむべからず、宜しく全然融和渾一せしめ、國民の同島に對する、亦猶西海道、南海道、北海道等に對するが如くならざるべからず、斯の如くにして同島

の開拓教導、亦必ずしも困難ならざるを知るべし、而して國民の國土的觀念を融和渾一し、政治上教育上の便益を至大にするの法、先づ臺灣の名を廢し、新に南洋道と改稱するより便なるはなし。

富籤を排す

「東朝」記者

今より五年前、勸業債券の始て議會に現はれたるとき、世或ひは夫の割增金を富籤なりとして攻擊するものあり。法案の賛成者は鋭意其の然らざるを辯じ、漸く之を通過するを得たり。此時までは尙富籤を非とするの精神、有識者の間に存したるなり。今や則ち然らず。富籤の隨喜者は政府の要路にも之あり。民間の赤貧者にも亦之あり。啻に隨喜者あるのみならず、富籤の息子とも稱すべき勸業債券は、今日の金融必迫に際して尙且つ定額四倍の應募者を得、獨り其成功に得々たるの色あり。我が富籤論者は之を以て零碎資金吸取の本望を逹したるものとし、いよいよ其の有功の手段たるを傲らん。予輩は只我民心の輕浮にして、日に衰殘を加ふるの一徵證として之を悲むのみ。富籤、割增金の末を悲むにあらずして、國民堅實の氣風なきを悲むなり。利巧なる我國民は正經の利を收むるを以て迂なりとし、額に汗して餘財を積むは、手を袖にして幸運の來るを待つに若かずとす。此の如く惰氣滿身の國民にして、果して興國の資ありと爲すか。予輩は之を信ぜざるなり。資金の欽乏は我國上下通じての弊害たり。政府及び民間の理財家が目を皿にして資金を求め、苦計自ら欣ぶも亦諒すべき所なきにあらず。然れども彼等は資金の豐富は以て一切事を了すべしとなすか。民心衰殘の餘弊に乘じ、更に浸染汚下の手段を採るも、尙國家に利ありとなすか。郵便局及び農工銀行をして割增付債券を發行せしめ、臺灣銀行支店をして富札を賣出さしめ、築地の支那人をしてチーハーを公行せしめは、謂ゆる零碎資金の吸取は滿遍なく行はるべく、日本は一足飛に資金豐富の國となるやも知る可からず。只予輩は此の如き富國たらんよりも、寧ろ健全にして眞面目の國民を有する貧國たらんことを望む。貧なるは尙將來に富むの望あり。惰氣は之を去るの方なければなり。



女子の戸外遊戲に就て

「太陽」法學博士　添田壽一氏

英米に於ける遊戲の方法は、多くは戸外に於て爲し、而かも自働的にして、彼の音樂の如きも、舞踏其の他運動に關係を有するもの多きに居る。是を以て其の結果たるや、健康、經濟及び德義養成に適合す。故に英米人は其の性質有爲活潑身体精神共に健全なるのみならず、能く艱難

苦痛に耐へて、大事業を起し、之を成効せしむるに適し、所謂膨脹的國民たる資格を有す。均しく歐洲に在りても其の遊戯方法の幾分か東洋流なる羅甸人種、即ち佛蘭西、伊太利、白耳義、西班牙等諸國の國民は躰力、腦力に於て遠く英吉利、米國、獨逸等アングロサクソン人種に屬する國民に劣るのみならず、此等有爲なる國民との競爭上漸次敗者の地位に立ち、從て其の國運も隆盛ならず、所謂收縮的運命に陷れること、今や爭ふべからざるの事實なり、故に遊戯の問題は獨り各人の强弱に關するのみならず、國家の盛衰興亡に關係を有す。

是を以て苟も各人の發達、國家の進運を期せんと欲せば、須らく遊戯の方法を撰擇し、就中戸外自働的即ち各種の球戯、競舟、遠足、自轉車等に重きを置かざるべからず。今日我國に於ける欠點は、將來に於て最も有爲有望ならざるべからざる青年の因循、柔弱、奢侈、就中女子身躰の發達完全ならざるにあり。故に斯の弊を匡正する方法は戸外運動に依るの外其の途あるべからず。彼のローン、テニスの如きは、最も女子に適せる戸外運動なるを以て、須らく之を奬勵せざるべからず。然るに戸外遊戯を奬勵するに當りて、女子身躰下部の暴露を避くるが爲め、少なくとも衣と裳とを別ならしむる等女服の改良は之に伴ふて必要なり、と雖も、是れ自から別問題に屬するが故に、茲に之を略す。然りと雖も健全なる國民は健全なる母を待ちて望むべきものなるが故に、女子戸外運動の如きは、宜しく國民擧つて注意を怠たらず、大に奬勵を加ふべき所なり。

衣服及び家屋

伯爵　板垣退助氏

予は風俗改良の重なる部分を占むる衣服並に家屋の改良に就き聊か卑見を陳ふべし。

人は勞働によりて其衣食を得ざる可らず故に歐羅巴人の衣服家屋に就て之れを見るに何れも勞働に適せしむるを目的とし此方面に向つて發達進歩したるものに非らざるなし我が日本に於ては其の衣服は唐風に摸倣したる如し然かも其の本家本元たる支那に於ては愛親覺羅氏滿州に起り其の服裝を一變し日本服に比すれば比較的勞働に便利なる趣あり然るに我か日本に於ては上流社會に於ては長袖寛帶にしてイザ働かんとするに當つては兎角衣服が邪魔になり不便利なりとの感を生ず勞働者の如きは腹掛、股引、胖天等の身輕なる扮裝にて勞働には不便利なりと雖も其の下等社會に於ける服裝なるがために充分なる改良を加へられて社會全般に用ゐらるゝに至らず又た婦人に於ても其の勞働者に至りては勞働するに便利なる服裝を用ゆれども上流の婦人の衣服の如きは單に勞働に適せざるのみか歩行するにも便利ならざるの觀なきに非らず。

我國の衣服斯の如くなるが故に家屋の如きも之れに適當なる樣に構造せらる斯の如きは單だ人々の惰風を養ふに過ぎず若し是れか洋服を着し靴を穿つとならば屋內に出入するは極めて容易なりと雖も日本の座敷に於ては殆んと始終寢臺にあるが如く一寸外出するにも衣服を改め下駄を穿たざる可らざるが爲めに尠なからぬ不自由を感じ從て身體軟弱に精神怠惰となる故に我國人の衣服及び家屋を改良するは即ち身體を强健に精神を活潑ならしむる所以たらん然かも今日の如き情態にありては大くいへは國家の富强にも關係すべし。

世上或は吾等が主張する社會改良に就て誤解を抱くものあるが故に一言之を辨ぜざる可らず　或は風俗改良は先つ精神の改良より着手せざる可らずといふものあり然かも吾等は外形上の改革に力を盡さんと欲す其精神上の改良の如きは之れを宗教家及び教育家に委し吾等は外形より之が改良の實を擧げんと期す。

然りと雖も風俗改良といふが如きは唯少數人の決議等により實行せらるべきものに非らず必ずや先づ世の風潮を制し輿論を動かさゞる可らず。

(同氣倶樂部に於ける同伯演説中の一節)

亡國の聲

「警世」松村介石氏

かれハンプデンは數百万の財産を有しながら、僅か廿七八錢の税金を拂ふことを潔とせず、進んで牢獄に入りて意氣々壯んなるものありし。利害より之を言はば廿七八錢と多年の入獄とは共に語るべきものにあらず、而かも其の俠骨稜として義膽鐵の如きに至つては、百世の下尚は吾人をして奮起せしむるものあり。礦毒事件の如き實に一代の問題也、田中正造君叫んで止まず、利より之を言へば彼れ滔々たる利己人の如く賄賂を攫んで去るに如かず、而かも一片の義心、一生を通じて磨せざるものあり、乃ち衆に代つて奮鬪す、其成敗を問ふ勿れ、其の利鈍を評する勿れ、若し此心にして日本を去らば、則ち日本は已に亡國的支那朝鮮の伍に落ちたるものなり、利の爲には外交を洩し、利の爲めに砲臺を示し、利の爲には敵國の間者と爲り、而して舌を皷して相慶す、是れ目下支那朝鮮人の根性なり、而かも又た之を笑ふ勿れ、毒水問題を小視するものは即ち半ば支那人化したるものなり、礦毒事件を冷笑する聲は正しく亡國の聲たるもの也。

人あり更に笑ふて曰く、又た松村の亡國論かと。吾人は已に病の膏肓に入るを認む。



殺伐の氣風と動物の愛護

「太陽」時評記者

鳩が人に慣れて、足元に餌を拾ふは淺草に其例あり、遠くベニス乃至マイランドの寺院を語るに及ばずと雖も、余の一驚を喫したるは巴里のリユクザンブール公園なり、食事の際必ず多少は生ずべきパンの粉を袋にして、可憐なる少女が、日々該公園に來りて之を與ふること、何時の頃より始りたるかは知らざれども、多年變ることなかりし結果として、尋常一様の雀が、此小さき恩人の姿を見るや、爭つて其周圍に集來り、若し渠を驚かさゞる迄に徐に好餌を與ふれば、頭上に留り肩先に留り、甚しきは欣然として掌の上に上りて之をついばむ、是豈獨り優美可憐なる擧動と云ふのみならんや、此氣風を以て生長し、而して惡んぞ同胞を殺傷するに忍びん、試に犯罪統計を比較せよ、殺傷事件は、英國最も少く、やゝ之よりも多き佛國にしても、我日本に比しては

遊に少きを、顧みて我國の少年は如何、夏來れば蟬を捕り、秋來れば蜻蛉を釣り、犬を打ち、猫を敺り、文明國の最も惡む動物苛責は少年一般の風を爲すにあらずや、而れども是頑是なき少年の罪にあらずして、教へざるものゝ罪なり、父兄も固より之を戒めざる可らず、但し父兄自身が之を教ふる必要と利益とを解せざる過渡時代に於ては、轉じて小中學の教員に其責を負はしむる、寔に已むを得ざる所なり、勿論少年をして斯る惡風を改めしむるに付き、社會的の利害關係を說くが如きは、何の効顯もあらざるべく、寧ろ人に慣れたる小動物の愛すべきを談じ、外國の事例を面白く談す等、各種の工風と方便とは、一に之を教員たるものゝ技倆に任せて、止た余は此細事の改良が一般社會の改良上鮮からざる利益あることを注意す

基督教の悟道

「女學雜誌」　巖本善治氏

日本の基督教は申さば青年で、何んと言つても、まだ若いと評ぜられるとを免かれないのである。其の傳道者も若いが、傳道法も若い、傳道の居き方も至つて若くて、總べて何處にも若のついた、サビの出來た樣な趣きが無ひのである

何事も、青年！　青年！て、之れが即はち善い所であると自から得意になる若者もある。無論其の意味がないのでもない。然し、たゞ得意にばかしなつて居ては間違ひの種である。

第一甚はだ遺憾に思ふことは、傳道法の一樣一色なとてある。機關の單純なのが進化の幼稚な證據とすれば此の傳道法などは極めて幼稚なものである。而かも、此の幼稚らしき一樣一篇の傳道法から少し違つたとをなするものがあれば、直に福音的でないと云ふ宣告を下す。何が「福音的」かと問へばたゞ淡然たるもので、ツマリ某々の信仰箇條めきたるものを揭げさへすれば夫で善いのである。穿鑿も實に無雜作極まるものである。

凡そ、宗教に尊とぶ所は生命ではない乎。何等の心術にも總く生命を尊とぶと無論であるが、宗教就中、基督の宗教に於ては、主としてしばしば「生命」と云ふとが說かれて居るのである。既に生命となれば、如何なる人間の仕事、働らきにも關係すべき筈で、又其仕事、働らきの生命とならなければならぬと言ふ迄もなからふ。今更、何々との關係などゝ疑問して、其關係のありしやを考がへるとなどは入らぬ筈である。學術にせよ、政治にせよ、すべて此の生命が徹せればならぬ。生命が徹せぬほどならば、即はち活きた宗教になつて居らぬのである。

此處に至つて、吾人が殘念に堪へぬとに思ふ一事がある。即わち基督教の生命が各種各方面の機關に徹すると、乏しく、若く、新らしくして、まだ／＼中々佛教などに及ばぬと云ふとである。

其證據には、先づ試ろみに日本在來のいろ／＼の藝術を調べて見るが宜しい。すべて極意秘傳と云ふ所ろに至つて見れば皆な宗教で、夫が大槪、禪である。凡そ何事によらず、極意とする所に至れば、言語道斷のもので、之を口にすれば既に早や形式となるのである。然し、口にして言わさねば亦た傳はらざるが故に、不立文字、以心傳心と云ふ中にも、そう言ふ心はすでに多少の言葉にせねばならぬ。コノきわどい、微妙な要點が即はち生命であるから、是非、心の生命を第一とする宗教に依つて此の心持を傳へねば成らぬ所ろから、すべて藝術の極意には皆な宗教の悟りが浸つて居るのである、

うつるとは月も思はずうつすとは水も思はぬ廣澤の池

不離不着、鶺鴒水に點ずるの工合などが即はち其の一例で、劍にも、馬にも、茶の湯にも、禮道にも、皆な肝要とするが、扨て其教の主旨は矢張り禪と一致して、禪を以て說いてあるのである。之れ、禪の生命がかゝるいろ〳〵の藝術に這入つて居るので、申さば、禪の傳道がかゝる諸機關、諸藝道の奥に迄て徹して居ると云ふのである。

然るに、日本の基督教に於て、此般の消息を說いたものがある乎。又說かんとするものがある乎。啻に極めて乏しいのみならず、斯樣なことを言へば、何か佛教的であるかの如くに言ひ做す樣で、眞に此の類の趣味は稀有の姿である。

左らば、外國では何如である乎と言ふに、流石に、其教の舊國だけあつて、宛がら佛教が我國各種の機關藝術の根抵に浸潤せる如くに、彼國のあらゆる方面、あらゆる人事に行渉り、すべての生命、すべての悟道となつて居る。眞とに左もあるべきことで、左なくんば其宗教は砂の上に植てられたるものゝ根もなく生氣もなきものと言はれはならぬ。

統計思想の普及

「社會」　伯爵　柳澤保惠氏

統計思想の普及と云ふことは、既に歐米で殘らず擴がつたとは申されませんが、斯の如き調べをやつて居つて、その結果は、まづ滿足の者と申すを憚りません、此の統計思想の普及と云ふ事は統計調査上最も必要なる骨子でありまして、如何に國家が充分のことを調べやうと思ひ、骨を折つた所で、一般の人民の方で、これは何か負擔が多くなるのではないか、コンナ調べは將來自分の迷惑になる事がキットあるだらふと云ふやうな疑惑を起した日には、熱心に調査を始めても結局有効なる結果は得られません、夫れ故我國での今日の急務は統計思想普及の一事で有ます、此は統計學者は勿論の事、直接に統計の衝に當る人物の任務である、私は不肖ながら統計の事に多少從事した者、又此學術の發達を計るを以つて、自分の國家に對する職務の一として、常に研究の傍ら其普及に從事して居りまする、要するに今日では統計に付て少々世間の注意を引いたと申すものゝ、まだ〳〵此位では足りません、政府の方で多少前よりも多く注目して參つたか此の邊は分りませんが、それにしても一般に此呼聲をモット高くしてモライタイ、そふなりますれば政府に取つて一層頂門の一針ともなり、豫算編製の上にも十分に統計事業を擴張する丈けの入費を加ふるに至るであらふ、現に上下兩院では先年國勢調査の建議をして政府に容れられましたのであるから、猶更民間で十分に統計事業の擴張を主張せられん事は我々の希望する處である。

外國漫遊者に對する待遇

「警世」　佐藤顯理氏

吾國の偏見なる國粹保存論者の御一考を願い度い、又對外硬とか云ふ看板を掛けて居る先生達にも御一考を煩はしたい、佛朗西の人は先づ自分の國に來る外國に來る外國人をして、出來得る丈け便利に心持ち善く愉快に遊ばせて外國人の金を土地に落させ、以て國家の利益を謀らうと云ふ考へが上下共に等數ある樣に思はれる、巴里は年百年中と申して宜敷かろう、外國人の見物人が輻輳し來る處で其の人に依て國家經財上至大の利益を得て居る、吾國も一の美術國とか公園國とか云ふ名を付けられて每年少なからぬ見物人か外國から來る、此の人々が日本に散らして行く金は少がらぬ額である先づざつとした統計で申しますれば二万人ある

と云ふ、此二万人の外國漫遊者が、幾ら少なくても一人前二千圓は消費つて行く、さすれば之れが二千万圓である、此二千萬圓は貿易年表に載らない輸入金額であつて、つまり日本の純粹の所得である、されば他の事はさて置て此の一の經濟的の觀察に基いた丈でも、海外の遊歷者に對し個人として又團体として出來る丈けの便利を與へ成るべく心持快く滯在して居られる樣にする事の必要は敢て多言を要する迄もない、況や外國に對する吾國家觀念から打算して考ふれば、之れは又一の大切の外交術であると考へる、近頃外交と云へば外務省の專業であるかの如く思ふて居る人もあるが、私に云はすれば外務省は一の外交機關に相違ないが、外交の粹外交の精神とも謂ふ可き者は個人的の交際にありと思ふ、どうか似非國粹保存論者の議論や似非愛國者流の排外に等しい擧動は止めて貰いたい、之れ等は實に國家經濟の上に大なる害を致します、此の點に於ては彼の巴里の都人士等が上下ともに外國漫遊者に對する叮嚀慇懃なる風を學で貰い度いのである　（同氏佛國所感の一節）



評論

社會小觀

新聞記者の局量

紅水

他人の言ひ出したる事、先鞭を着けたる事は、如何なる善事にても賛成もせず援助も與へざるは、陋劣なる黨人根性か偏狹なる商買敵きの嫉妬に出づ、是れ教育無き小人仲間の事なり、苟も筆を公壇に採て一世を導かんとする程の者は、かゝる世間狹き卑劣心に向て最も愼まざるべからざるなり。

近時萬朝報紙上、茶代廢止を唱道し、漸次好結果を收めつゝあり、若し都下各新聞にして此際共に手を携へて此弊風を除去せんと力むるあらば、一世の風潮を作り其効果は更に速かに且つ大なるべきを思ふ、然るに寂然として一言の援助をも與へざるは如何なる故ぞ。

平生風俗の改善を唱道するに鋭意なる時事新報、公德問題に熱中せる讀賣新聞、特に數年前一度び茶代廢止を唱へたる報知新聞、其他社會問題に忠なる社會新報

毎日新聞を初め、日本日々朝日國民等各社の冷然たるは抑も何が故ぞ、別に主張有りと言はゞ、吾人これを聞かんことを望む。

かゝる風教上の問題は黨派問題と異り、善きことゝ信じたる以上宜しく之を應援し、攻守同盟を形くりて可なるべき筈ならずや、各社の之をなさゞる所以のもの要するに新聞記者商賣敵の陋劣心に出づ、先づ自家の惱中にかゝる根性の脱去せざる以上は千枝の筆を禿盡して社會の改善を說き、萬斛の墨汁を塗了して公德問題を奨むるも何の効かあらんや、國民は長へに雅量無き島國根性のものたらんなり。

寄席の取締りに就て

警視廳は前月廿三日廳令第五十八號を以て改正寄席取締規則を發表し、明年一月一日より實施すと云ふ、就て之を見るに、吾人が理想通りの注文には勿論遠きも、從來とは大に面目を改め、改良せられたる事多し、今吾人の最も歡迎すべき改正要點を摘めば

(一)客と藝人の交通を禁ず（藝人の控所に客を入れ若くは藝人を客席に入らしむべからず）これにて女義太夫對ドースル連の弊風其一半を除去し得べし

(二)座席の制限（客席は一坪十人以下の割合となすべし）時に依り、押し合ひへし合ひ手も出されぬ雑踏は、これにて除去せらるべし

(三)通行路を設けたること（各席其前後左右に幅二尺以上及び竪九尺以内毎に幅一尺二寸以上の通路を設くべし）人の頭を跨げて通行する醜態はこれにて其幾分を減じ得

(四)客の風儀規定（袒裼裸躰をなし又は放談高話其他喧噪に渉り他の妨害を爲さしむべからず）盡席に午睡の爲に來る事、或は宴席の如く振舞ふ事等も、勿論此規定中と知るべし

(五)建築場所規定（前面出入口は幅三間以上の道路に面するを要す）則ち狹く穢き路次内に寄席を建築することを許さゞるなり

(六)構造上の規定（三階以上に客席を置くべからず建坪五分の一以上の空地を置くべし非常口を開き置くべし等）一種不快の空氣に頭痛を起こし又は非常の時に怪我人を出だす様の事減じ得らるべし

いづれも皆必要の改正なり、從來の弊は兎角取締りの

緩漫に流るゝにあり、今度は席亭も客も藝人も良習慣に馴るゝまで十分嚴重の取締りをつゞけんことを其筋に望む

又吾人は何人か此改良を機として市內の要所に二三の改良寄席を新築し、完全の設備を施し、中流以上の人士も自由に出入し得らるゝ娛樂場となさんことを希望するものなり。

統計を公開せよ

我邦のお役所には時に猶常識を以て判斷の出來ぬことあり、警視廳及び東京府の各種統計表が年々編纂されて一冊の出版物となり居るに拘はらず、國民に拂ひ下ぐることをせざるが如きも其一例なり、拂ひ下ぐることをせざるならば秘密にするかと云ふに「知り度き部分は問ひ合はすべし、何時でも云て聞かせるが、只全躰の印刷物は渡されぬ」との方針なり、畢竟市民が統計的知識に幼稚にてかゝる出版物を要すること尠きが爲め苦情を唱ふる聲大ならざるも、之れが若し歐米の都會にてありとせば其攻撃果して如何とするぞ、愚弊も亦茲に至て極まる、歐米の如く一枚の端書にて何人にも贈るまでに至らずとも、セメテ之を拂ひ下げ或は民間の書肆に托して販賣せしむる樣、是非共改善したきものなり。

淫祠取締の勵行

金米糖を以て病人を殺す天理敎を初め其他の淫祠に關し、服部兵庫縣知事は左の訓令を發せり、各縣知事の之に倣はんことを望む

敎導職は斯道の布敎傳道を司り道德の標準たるべきものなるにも拘らず神道天理敎會所屬宣敎者中往々種々の不正行爲有之やに傳聞す果して然らば宗敎行政上看過すべからざる儀に付兼て彼等の行動に注意し苟も左記の事項に該當するものありと認むるときは其住所氏名敎師の等級擔任敎會名等速に報告すべし

一、御供物と稱し金米糖を授け若しくは其他の方法を以て信徒を迷し醫療を妨ぐるもの
二、男女の信徒をして種々の裝束をなし舞踏せしめ風俗を害すと認むるもの
三、御籠と稱し祈願の爲め男女信徒を宿泊せしむるもの
四、社會平等財產均一の要を說き信徒を群居せしめ又は群居せしめんとするもの
五、前各項の外治安を害し風俗を紊す所業あるもの各敎宗派宣敎者と雖も前項各號に該當するものあるときは具に報告すべし

集め草

△狩獵期來　又もや殘忍殺伐なる一種の人間が横行

練習の季節となれり、新狩獵法にては丁年以上に非れば狩獵を許さず又税金も倍額になれりいさゝか喜ぶべし

△平專辭職　貴族院を去る、社會猶幾分の制裁力あり

△海外別莊　近衛公、馬山浦に別莊を新築せんとす、大磯熱海の外に別莊地なしとせるエセ紳士連の學ぶ能はざるところ、近來の快事なり

△西侯板伯　田健次郎其他數氏を從へて關西に風俗改良會を擴張す、又慶報とす

△鑛毒事件　控訴公判開かる、被害地住民は出生二人に對し死亡三人なること、飲料用水に毒分あること、壯丁の徴兵檢査合格少きこと、植物魚類の枯死せること、いづれか義人涙の種ならざるべき

△被告辨當　鑛毒被害人民の法庭にて喫する持參の辨當監獄のモッソウに劣る、見るもの皆泣く

△五十四人　の辯護人屆出有るは此事件を以て嚆矢とす

△外相夜會　又は觀櫻、觀菊の御宴は貴族上流の集まりなり、而も其宴會の度毎フチークやナイフの紛失多しと聞ては誰か驚かざらん、朝鮮を笑ふ勿れ支那を嘲る勿れ

△貧乏公卿　華族の中、大名華族の外、公家華族と云へるは品性最も陋し、支那人的朝鮮人的擧動は多く彼等に出づ

△大學賭博　大學生の賭博犯人捕はる、これ横濱紳士の賭博よりも更に悲むべし

△紳士貴女　の遊戯をして音樂に轉ぜしめよ、テニスに轉ぜしめよ、球突に轉ぜしめよ、自轉車に轉ぜしめよ、花合せのみが夜も晝も彼等唯一の遊戯たる間は日本に大の字を冠すべからず

△外國船長　郵船會社の二十一航路中歐洲濠洲北米等外國外の航路は孟買行を除ひて皆外人を船長とす、現今二十六人の外人船長あり、東洋汽船會社は一人も日本人の船長なし、日本人の船長ては外國に信用なく、貨物も乘客も集まらざるが故なり、東洋唯一の海國と稱して猶此の如し

△馬翁文庫　岩崎家購入のマクスミユラー文庫は已に英國を出荷せり、伯林の新聞が歐洲にて之を購入せざりしは英國大學の耻なり獨逸大學の耻なりと嘆きしは小氣味よし

教育評論

菊池文相と澤柳局長

警醒子

菊池氏が文相の椅子を占められたから、澤柳氏が辭職するだらうと想つたのは、勿論我等ばかりではなかつた。なぜさう想ッたかと言ふまでもなく、前文相の時代に發布した中學校令施行規則に就いては、當時の大學總長であッた、菊池氏とその立案者であッた、澤柳氏との間には、辯難攻撃數回に亘ッて、頗る目覺しいものがあッた位、殊に數學科の程度を下げたことについては、菊池氏殆んど全力を傾注してその非を鳴らしたといふやうな間柄であるから、菊池氏一たび文相となッたら、一は自己の宿論を實行しやうため、一は論敵たる澤柳氏の鼻柱を挫かうため、必ずやこの中學校令施行規則を改正するであらう、さうなれば澤柳氏も男だから、面白くないといふので、こゝに普通學務局長の交迭を見るに違ひないといふ想像は、無理ならぬことである。ところが意外なことには、中學校令施行規則もまだ改正せられるやうな噂もないし、澤柳氏も依然として、イヤ寧ろ意氣揚々として局長の椅子に倚ッて居るのである。そんなら菊池氏は文相となッた嬉しまぎれに、持論も何も打ち忘れて、たゞモゥボゥッとして御座るのだらうか、果してさうなら、菊池氏も案外無能な人だといはねばならぬ。由來、文部省は無爲で文部大臣は無能なものと相場がきまッて居るのだから、菊池氏一人無能でないやうにといふのは、言ふものゝ方が無理であるかも知れない。しかし、この分では、誠に敎育の行末が案じられてならないのである。

更に聞くところによれば、菊池文相は澤柳局長と密議の上、内訓を地方長官に發して、中學校の學課改正は、當分その實行を見合せ、從前の通り授業を行ふべき旨命令したといふことである。事のこゝに立ち到ッた譯は、中學校學課改正は、澤柳氏が年來の主張に基いたもので、動かすべからざる決心を以て斷行したのであるから、それをまた更に改正するといふことになれば、勢ひ責を引いて辭職することになる、多少普通學務に通して居る澤柳氏を出して仕舞ッては、その邊に一向眼のない菊池氏は、とても文相のお役目が勤まり兼ねる、さうかと言ッて、自分の持論も枉げたくない、どうしやうこうしやうのあげ句の果てが、前記の内訓となッたのださうだ。

このまゝでやッて行けば、表面は菊池氏の持論を實行するの勇氣がないやうに見えて、歩を澤柳氏に讓ッたとしか取れないが、內實新規則の實行を見合せ、舊規則で授業をして居るといふのだから、澤柳氏が歩を菊池氏に讓ッたのである。菊池氏は名に負けて實に勝ち、澤柳氏は名に勝つて實に負けたのである。事實果してこの通りなら、菊池氏が、澤柳氏を惜んで、公然と自己の持論を貫徹させやうとしないのは、餘んまり意氣地が無さ過ぎると言ふべく、又澤柳氏が、あれ程の勢でやッた改正規則を、表面は兎も角も、內實その實行を見合せることにされたなどは、實にこれ龍頭蛇尾、腑甲斐無いにも程のあッたものである。口善惡なき京童でなくても、「それ程局長の椅子が惜しいか」位は言ふであらう。

要するに、こんな意氣地のない文相や、こんな腑甲斐無い局長などのお揃ひだから、大藏省からは踏みつけられ放題踏みつけられ、新事業は勿論、前々から計畫されてある事業さへ手がつかぬのも、さら〱無理ではないのである。



大學講座の公開

我等は、數年前、大學圖書館の公開を促し、大學尋いで大學敎授の講本の公刊を勸告した。それは、學問は大學の專賣品でなく、又大學敎授は、國民智識の進歩を妨げる權力のないのは勿論、自己研究の結果を公にして、人智の進歩に貢献するところが多くなければならぬ筈のものであるといふ理由で。……そして、出來得べく

むば、大學の講座を公開して、一般人士の聽講を許すやうにしたいといふ希望を抱いて居た。

大學の圖書館に、どンな珍書があるかは知らない、大學の教授は、どの位エライ人だかは知らない、その講義も、どの位の價値のあるものだかは知らない。がしかし、我等は今まで、苟も大學と言はれ、我國唯一の最高學府であつたのだから、定めてかうもあらうかと、心窃に許して居たところもあッたが、大學出身の謂はゆる學士と稱するものゝ、年毎に無學淺識となり、意氣地なくなるのを見るにつけても、大學の講義といふものも、さ程有り難いものではなからう、大學教授といふものも、さ程エライものではなからう、大學圖書館と言つても、さ程な珍書もあるのではなからう、どいふやうな疑が起ッて來た。

疑は起ッたが、これを解くの道がない。圖書館へ入ることが出來ず、教授の講義を聽くことが出來ないから。

そこで、我等の宿論でもあり、殊に近來某内閣大臣とやらの發議だとかいふところの、大學講座公開といふことを、是非共實行させて見たいといふ考が、一層痛切になッて來た。曾ては、圖書館の公開、講本の公刊、講座の公開等が、少しでも一般學者の益になるだらうといふ考で論じたのだが、今は全くさうでない、大學の教授や學生が、手品師の『種』を秘密にするよりも、更に一層秘密にして居る圖書館には、どンな書冊があッて、それをどンな工合に讀ンで居るか、教授といふものは、果して能く我國最高の學府の教授たるに耻ぢない丈の講義をして居るのだらうか、といふことを試驗して見たいからである。

名譽ある帝國大學教授諸氏、我等のやうな無學なものをして、こんな無禮な言をなさしめるのも、實は全く諸氏の罪である。諸氏が圖書館を公開せしめ、諸氏が講本を公刊し、諸氏が講義を公開し、以て能くその眞技倆を示されたなら、誰か又こンな無禮の言を吐くものがあらう。

高等教育會議の改正規則

高等教育會議規則は改正せられた、しかし、たゞ議員の數が增加したといふ位で、別に變ッたところもない。元來此の會議の性質を變更して、諮詢機關から調査機關に移さうといふ議論もあッて、學政研究會からは、文部大臣に建言して、諮詢事項を擴張すること、常任議員を設置する事を希望した位であッたが、依然とし

て舊態を改めないことになッてしまッた。そりやア文部省の身に取ッては、調査機關にして、彼是小面倒臭いことを並べたてられるより、諮詢機關にして置いて、盲從か握潰しか、二ッに一ッの安全な方法を取るのが呑氣だから、それでからうしたのに違ひはなからう。從ッて高等教育會議といふものは、名前ばかりのコケ嚇して、教育界に重きをなす機關とは見ることが出來ないのである。

議員の數を增したといふのは、決して惡いことではないが、文部省の局長や視學官や、農商務省の局長のやうなものは、用事があれば、職務上當然列席することの出來るものであるから、別段これを議員の中へ加へる必要はない。それよりは、私立學校長の數と、學識ある者、又は教育事業に閱歷あるものゝ數を增す方が善いのである。

視學官廢止

府縣視學官の存廢が、行政整理上の一問題となッて居るさうだが、或る論者は、これを廢したら、教育上に大なる惡影響があるやうに言ッて居るけれども、我等は決してさうは思はない。たゞ府縣視學官だけに限らず、文部省視學官といふものも、繼ついでに掃き出して仕舞ふ方が良策だと思ふ。

早い話が、視學官といふものを置いてから、あれ丈の時間とあれ丈の金とを使ッて、そして得たところの効果は何である。機械の運轉するやうに、たゞノッソリと學校を廻ッて、ホンの皮相を視た丈で、それで愚にもつかぬ統計や怪しげな報告書を作る、寧ろあンまり凄じいではあるまいか。コンなものが、幾人居たッて居ないッて、國家の教育の上には、別に何の影響もないのである。殊に文部省のやうな、金の乏しい癖に仕事の澤山あるところでは、せめてコンな駄人足でも掃き出して、その時と金とを他の有用な事業に操り廻はすのは、蓋し適當な策である。我等は視學官廢止の議に賛成し、文部省視學官も府縣郡視學官も、悉くこれを廢すべしと叫ぶものである。

●ちりづか（全（明治三十四年八月廿七日から九月廿六日まで））

◎高等教育會議規則は改正されたが、改正といふ程なこともない。その議員の種類は、

（一）學習院長、華族女學校長、帝國博物館總長（二）內務省地方局長（三）陸軍及海軍教育主任將校各一人（四）文部省各局長及視學官二人（五）農商務省農務局長及商工局長（六）帝國大學總長、法科大學長一人、醫科

大學長一人、工科大學長、文科大學長、理科大學長、農科大學長、理工科大學長(七)高等師範學校長、女子高等師範學校長、札幌農學校長、高等商業學校長、高等工業學校長一人、高等學校長一人、醫學專門學校長一人、東京外國語學校長、東京美術學校長、東京音樂學校長(八)帝國圖書館長(九)高等師範學校附屬中學校主事、女子高等師範學校附屬高等女學校主事(十)商船學校長(十一)道廳府縣視學官二人(十二)師範學校長二人(十三)公立中學校長二人(十四)公立高等女學校長一人(十五)公立實業學校長三人(十六)私立學校長四人(十七)東京學士會院會員(十八)文部省學校衞生顧問會議々員(十九)學識ある者又は教育事業に閱歷ある者七人以內

◎高等教育會議々長　は、加藤弘之氏辭任の後、缺員のまゝであるが、近日中に、文部大臣は、議員中から人選奏請の上、敕命せられるとの事て、多分辻新次氏だらうといふことである。

◎中學生徒の入學制限　年一年に中學生が增加するのに、現行の教育制度ては、どこの中學校でも、その希望者全躰を收容することが出來ないために、父兄も困まれば學生も困る、この分ては、到底十分な中等教育を施すことが出來なくツて、却ツて學生を墮落の淵につき落すも同樣てある。なんとかして、この入學の制限を撤去し、十分收容の出來るやうにといふのが我等の持論て(前號本欄參照)あるが、聞くところによると、一部教育者の間にも、それ〲調査して、この制限を撤去せむと、寄り〲協議して居るさうだ。

◎小學校教員の待遇　日本全國、どこへ行ツても、小學教員が足らないので、困り切ツて居る。といふものは、その待遇がよろしくないから、義務年限が終ツた最期、すぐ飛び出して職を他に求めるからである。文部省も、この頃こゝへお氣がつかれて、何とか相當の方法を設けやうと、頻りに取調中とのこと。

◎帝國教育會の計劃　國語改良、言文一致、小學卒業生教導方法等について、いろ〲骨を折ツて居る帝國教育會ては、なか〲費用のかゝるところから、政府や東京市に向ツて、その補助を願ツたけれども、一向はか〲しく運ばないものだから、會自身が有志者の寄附を仰いで、十萬圓の資本金を募らうと、目下奔走中。

◎教育界の腐敗　「人は、宗教界の腐敗を云々するが、今ては宗教界の方は、腐り切ツて乾カラビて、臭くもないし穢くもないが、教育界と來たら、今が腐敗の頂點て、到底傍へ寄りつかれたものてない、市教育會は勿論、帝國教育會でも、學校でも、教員でも、生徒でも、アゝ臭い穢い。」と言ふものがある。

◎中學校攻擊　凡そ攻擊は、相手の弱點を見ぬいて置いて、そこへ突ツ込ツて始めて効のあるものだが、たゞ皮相の觀察やまた聞き位を土臺にして、その上へ怪しげな想像を建てゝ攻めつけたところが、痛いとも痒いとも思ふものではない、却つて無料廣告を有難く存じて居る位が關の山であらう。『京華日報』のやうに、部下の中學校を、片ツ端からなで切りにしやうといふやうな注文なら、隨分苦しい種も捏造しなければならない、攻擊の方法も千篇一律になツて、讀者もあきるし讀ンでも感じが薄い。要するに、强いて惡く言はうといふのは、確に一種の罪惡である。

◎宗教と教育　「今は宗教の時代てない、教育が取ツて代ツたのである。即ち今は教育の時代である。この教育の時代に、まだ宗教の必要をいふもののあるのは、畢竟教育者の力が足りないからである」と、妙な工合に悲憤慷慨した雜誌記者がある。借問す、宗教とは何、教育とは何、と言ひたくなる。

◉角帽　がそンなに有り難いか、點燈會社の集金人は角帽を被ッて居る。學士がそンなに尊いか、朝鮮の見習醫者を△△學士といふ。明法學士と力めるやうになッたからッて、何も帽子まで四角にするにはあたるまいと、湯島あたりの竹藪で、我鳴ッて居たものがあッたさうだ。これもまた、早く濟生學士とても威張りたい連中だらう。

◉立錐幾何と平面三角　中學校令が改正されて、數學科の程度を下げられたので、折角こしらへた立錐幾何や平面三角が、一冊も賣れないで困つて居た本屋が、近來ぼつ／＼賣れ出して、今ではどし／＼賣れるやうになつたので、「何でも文部大臣は菊池さんに限る」ッサ。

政界此言

媾和議定書調印後の患

沼東

秋氣已に入り來つて、世漸く寂寞たらんとせるの時、また媾和議定書の調印終り、北清の事一先づ此に結末を告げぬ。東洋の天地果して、これより靜平なる可きや。

四億五千萬兩、四分利附四十ヶ年々賦償却、議定書の文面や誠に明確なり、而も明確なる文面の、眞に事實上明確たり得可きや、若し然らばよし、否らざれば患此中に存せずんばあらず。

民衆四億、沃野四百萬方哩、制度宜しきを得は、僅々數億兩の償金、豈に敢て此を支拂ふに究せんや。さりながら今日の支那を以てしては、假令數百萬兩の支拂と雖も、容易なる事にあらず、況んや四億五千萬兩の償金を負擔し、之を年賦償却とせんにも、年々三千万兩の支拂を要し、其四十ヶ年間の元利を合計せば、無慮九億五千萬兩の大金を支出せざる可からざるに於ては、吾人は恐る、支那は如何にして此義務を履行し得可きやを。

海關税一部の引上、內地關税及鹽税の增徵、これ列國調査委員が、償金の財源として擧げたるものなり。然れども是は唯豫定の空策にして、實際よく其豫定の收入を得や否やは疑問なり。若し根本的に支那の税制を改革し、組織其法を得ば、敢て空望なりとはせず。さりながら支那今日の税制のまゝにては、税務の監督全く行はれず、一億の收入を求めんとせば、勢ひ支那人民は、十億の惡税酷租を擔はざる可からざる事となり、苛税猛虎の怨此に發して、稍もすれば再び禍亂の患なきにしもあらず。若夫れ然らずして、列國聯合して委員を設け、一致其內政に干渉せんか、徒らに船頭多くして、其船の却て山に登らん事を恐る。逡巡如此なるに於ては、折角の議定書も、空しく一片の反古と變じ、

為方なくも列强は、單に河川港灣の開放、鐵道鑛山の讓與を以て、滿足せざる可からざるの結果たらんとも計られず。若し果して然らんには、本邦も亦其運命に遭遇せざる可からず。吾人は其議定書調印濟みを喜ぶと共に、亦其結果を疑ふものなり。事の成敗は結果に在り。輕々しく現金の實收を豫想して、早くも其費途を議せんとするが如きは、これ寧ろ彼の空賣買に類せんとするもの也。

天高して氣漸く淸し、國家經營の士、幸に靜思熟慮して、苟も輕擧妄言を事とする勿れ。

加奈太移民制限法の否決

加奈太領政府は、今回英本國政府の厚意に基き、曩にコロンビヤ洲議會を通過し、試に實施せられつゝありし日本人、及び支那人排斥の目的にて、教育上の試驗を設け、或る種の事業に、兩國人の使用を禁ずるの法案を否決せりと。制限法は否決せられたり。日本國民は果して如何なる程度迄て、移住の必要を感じつゝあるか。我政府は果して如何なる點まで、殖民の發達を望みつゝあるか。

日本國民の海外に移住するもの、其數殆んど十萬に達す、而も未だ何等の勢力をも有する能はざるは何ぞや。吾人は想ふ、これ國民が或意味に於て、其必要を知るも、未だ其成功の道を知らざると、政府亦これを教ゆるの疎きとにあらんを。乞ふ少しく其所以を說かしめよ。

(一)我移住民は未だ永住の覺悟なきなり
(二)我移住民は未だ日本を知らざるなり

若し日本國民にして眞に殖民的膨脹の成功を欲せば、徒らに腰掛的勞働に甘せず、須らく彼地に永住の地を定め、少なくとも第二の故園を期せずんばあらず。而して意思未だ此に迨ばず、瑣細なる失敗に頓挫し、ホームシックに腦まされ、秋風常に夢を故園に吹きつゝあるに於ては、焉ぞ能く其成功をもとめ得んや。加之我移住民は、先づ其生國たる日本を知らざるなり。何となれば、彼地に於て日本國民獨特の事業を起さんとはせず、却て無經驗なる、事馴れざる彼地の事業に就かんとすればなり。(無教育者は是非なけれど)遺傳と經驗とに依て得たる我が長所を用ひて、業を移住地に起さんとはせず、却て我が短所を以て彼の長所に對せんとするは、之れ慥に自棄するもの、即ち日本を知らざるものにあらざるか。吾人は彼の墨西哥に珈琲を培

殖して、茶の培殖を試みざるもの、布哇に製糖業を興さんとして、稻田を拓くを計らざるもの、米國に牧畜業を擧げんとして、養蠶事業を起さゞるもの、濠洲に製糖業に從事するもの、、其近海に水産事業を起さゞるもの等の、何故に斯かる思想を有するかを怪むものなり。徒らに頑陋なる保守主義も亦弊なるも、振張す可きものは、飽く迄で振張せまほしきなり。此れ彼我相互の利益なればなり。

而してまた政府に於て、頗る移民事業に疎きやの感あり。今日平和的膨脹の急なるに迫んで、彼の武斷的不經濟的人物の養成所たる、中央幼年、乃至地方幼年學校迄も設置せらるゝに、獨り殖民學校、即ち日南子の所謂世界雄飛學校の設置なきは如何。誠にこれ現代敎育の一大缺點なりと云はざるを得んや。

一の加奈太が移民制限法の否决を叫ふ勿れ。よしや百の加奈太が該法の否决をなしたればとて、國民其成功の所以を勉めず、政府亦其道に盡さずんば、其結果や知る可きのみ。本立たすんば道生せずと、學ぶ可きは聖賢の訓言。

藏相の方針竟に如何

漁者嘗て語るらく、小池に網せんには、先づ池水をして動亂混濁ならしめ、魚群狽狽逆上するに迫んで、一度これを投せば、群鱗自ら潑々として計中に陷る可しと。而して現政府の經濟政策を語るもの、或はこれに近からん事を難ず。吾人はよもや曾根藏相の偉斗よりして、斯かる謂はれなき妙案の割出されんとは思ひもよらざりき。然るにやがて臺灣富籤問題、重ねて郵便貯金割增金問題の聲漸く囂々たるに及んで、ひそかに藏相の眞意を疑はざるを得ずなりぬ。

臺灣富籤の計畫、果して政府の意思なりとせば、吾人は云はんとす、政府はこれ鋒を逆にして、自己の肺肝を刺さんとするものなりと。何となれば、富籤營業は文明の進歩に伴はざる、未開時代の遺物にして、今に於て之を操返さんとするが如きは、内にしては即ち國民の僥倖心を煽動し、出精勤儉の鋭氣を殺がしむると共に、外にしては即ち間接に國庫空乏の狀態を揚言し、外國資本家をして、財政困難の極、或は股を殺いて肉を食ふの疑惑を懷かしめ、右手に外資輸入をさしまねきながら、左手に刄を取つて斷たんとするものな

り。矛楯も亦極まれりと云ふ可き也。

聞くが如くんば、今回政府の斯かる計策を思ひ立ちたる理由は、臺灣土人の貯蓄心を奨勵せん事、近々支那に設立の噂ある富國の爲めに、內地の資本を捲き上げられんを恐れて、これが豫防策に出づる事。臺灣の財政常に困難なるが故に、救濟策の一として之を設くる事。これ其所以の重なるもの丶如し。されどもこれ唯座上の僻見にして、目早き外人より見ば、こは唯財政困究の末に出でたる、遣り繰り算段の外認められざるべし。况んや蟷螂の斧を振つて、ロバート、ハートに對はんとするに於てをや。

然るに非は竟に是を曲く能はざるか、近日新紙の報ずる所によれば、藏相遂に此擧を思ひ止まれりと。今更ら思ひ止まる迄もなき事ながら、事果して異なりとせば、さすがに藏相が非を改むるの速なるを德とせずんばあらず。而してこれと同時に、斯かる無謀なる、小池に網する漁者様の小策の、長へに萌芽せざらん事を期せずんばあらざる也。

策の一方はひとまづ事濟みとなれり、されども其他方に於ける、郵便貯金割增金の議に于しては、藏相自ら其意見を發表したる程にて、その決心の堅きを知り得可きも、さいつ方藏相の方針なりとして、國民新聞の報ずる所によれば、また其策の如何にも迂遠なるを惜まずんばあらず。

郵便貯金に割增金を附する事

(一)貯金規則に依れば貯金預ヶ入の當月は利子を附せず
(二)貳拾錢以下の貯金には利子を附せず
(三)支拂命令を發したる以後は利子を附せず

此三ヶ條の規定によりて、政府の手に歸る可き剩餘金は、當然貯金者に返附するものにて、政府の手に收む可き者にあらず、然らば此割增金は如何に處分す可きか、割增金の法は即ち此問題を解釋す可き、積極的方法として案出せられたるものにして、割增金として預金者に返附す可き金額も、貯金運轉益金より支拂利息を控除したる、剩益金の全部にあらずして、唯此種の剩益金のみに止まるなり(某)

郵便貯金を以て日本銀行に預入れ、商工業の資本に當つる事

從來取り來りたる貯金運轉の方法は、悉く公債に投資するに在りしを以て、該方法に由るときは、一度貯金に吸收せられたる資金は、悉く財政に資するの材料となりて、更らに民間商工業に資する所なく、其結果として民間の資金を涸渇せしむるが如きことなきにあらずと雖も、若し該資金を銀行に預入れ、以て商工業の資金に融通せしむることゝなすに於ては、一度民間より吸收せられたる貯金は、該機關を經由して、再び商工業界に注入せらるゝこととなり、民間の融通上には、更に影響する所なかる可し、乃ち發案者は向後吸收したる資本は、日本銀行に預ヶ入れ、同行をして商工業に資せしめんと欲するなり(某)

以上述ぶる所、果して藏相の眞意なるや否やを疑ふと雖も、若し新紙の報する所を以て眞なりとせば、一見仰々しく論ず可き程の問題にもあらざるが如し。されども惡事は兎角傳播し易し、彼の割增金制度の如きは、國民をして自ら僥倖心投機心を助長せしむるの導火線たるを以て、縱ひ今回の計畫の如き、規模の微々たるものならんにも、打棄て置かんには、尺寸の患遂に千里の弊害を釀して、所謂勤儉貯蓄の美風を損し、勢再び制す可からざるに至らんを恐る、乃ち吾人は敢て藏相の爲めに計らんとす、曰く君子危に近寄らざらん事を。

若しまた其後者たる郵便貯金を以て、日本銀行に預け入るゝの議に就ては、其策の餘りに迂回なるを忌まずんばあらず。藏相の所謂、これを以て商工の資に當てんとするの言や可なりと雖も、其態々日本銀行に預け入るゝの策に至つては、俄かに首肯する能はず、寧ろ之を以て民間の公債を買上げ、或はこれを償還せん事の、却て藏相の意思を達するに於て便なるを信ずるなり。而も亦此等は既に過去の事實の明かに戒めつゝある所なり。(急げば廻はれ)とは古よりの誡なるも、殊更らに迂路を撰んで、日本銀行に貯金を預け、複雜なる新關係をつくるが如きは、吾人甚だ藏相の意を解する能はざる也。

兎にも角にも、財政整理は目下の一大難關なれば、藏相須らく意を其策の宜しきに決し、少しにても早く國民の渴望を醫すべし。世の財界整理を望むは、旱天雨を待つよりも切なる也。

宗教時言

存娼運動と佛教徒

旗幟須らく鮮明なるべし

衆甫

事に臨んで旗幟鮮明ならず、則ち外間の批評を招き意外の汚名を流すことあり、個人に於て然り、團體に於ても亦然り、這般の用意須からく周到なるべきなり。

基督教の週刊新聞『護教』報して曰はく

◎眞宗僧侶の存娼團体　府下各遊廓の妓樓を金主とし、廢娼對抗運動を目的とせる一種の團体を組織し既に先日其機關として『國の花』といふを發刊し、尙全國各遊廓に連絡を通して、鞏固なる存娼團体を組織する計劃の由(八月一日發行、五二七號)

「妓樓を金主として廢娼對抗運動をなし全國各遊廓に

連絡して鞏固なる存娼團體を組織す」と、これ事實なりとせは實にこれ宗教家の面目に泥を塗る者に非すや、若し夫れ事實ならすとせは、絶大の讒誣、何者か之に如かんや、輕々しく虚報を傳へて他人の面目を損するか如きは、操觚者の徳義に於て斷して之を許さす、況んや基督教の一記者として、事苟くも他宗教の名譽に關するに於てをや、必すや愼重をかさね事實を確かめ而して後徐ろに發表せしならん、予輩は願くは信せんと欲す。

予輩は未た所謂『國の花』なる者を見ず、未た關りて聞く所あらす、然れとも思ふ、醜業婦を稱へて「國の花」なりとし、公々然文壇に立ちて天下に呼號する程の破廉耻漢あるへしや否や、賄賂は文明の花なりと叫ひし、貪婪厭く無きの政客はこれありき、されと堂々文筆を驅りて社會の認めて悖徳となせる者を鼓吹し、剩さへ宗教家として全國存娼團體の組織を謀る程の狂愚、寧ろ勇氣ある者を見出し得へきや否や、よしや如何に窮すれはとて濫此に至るありとは予輩は聊疑なき能はす。殊に日常譏譽をこれ畏れ褒貶を是れ宗とせる、ヒくヒく然たる彼れ眞宗の僧侶にして何を以てかゝる勇氣を發揮し來るを得んや。余輩は人の非を辯護するを好ます、寧ろ摘發すへきを摘發して、以て世道人心を戒飾せんことを欲する者、故に言を立つるの輕卒ならさらんことを庶幾するのみ。予輩は憶病なる彼等に、たとひ善にもせよ惡にもせよかくまで明了なる旗幟を樹て得へしとは信する能はす。「護教」の聞くところ、果して何れよりせしかを知るに由なしと雖、恐らくはこれ巷説ならんのみ。

然れとも予輩か筆を勞する所以の者は、固より彼れ一記者の徳義を云云せんとにはあらす、風説は風説なり、かりて以て聊か佛教徒に警告せんと欲するあれはなり、人の譏を聞いて己の非を除くは道を修むる者の忘るへからさる所、佛教徒たる者大に顧みるところ無かるへかからず。

顧みれは昨年七八月の交、救世軍の吉原進入、二六記者の自由廢業幇助の事ありてより、全國妓樓の大恐惶となり、壯士となり、賄賂となり、到處人道問題の呼聲高く、廢娼論此機に乘して大に氣運を進め來り、端無くも社會改良の一端緒を見出さんとしたりし時、全國佛教徒は果して如何なる態度を取りたりしか、救世軍何をか爲し廢娼論者何たか爲す的の冷罵を逞くせしと無きか、よし左もなくとも廢娼論者の味方にはあら

さらりしなり。而して爾後今日に及ひて一宗派として一個人として如何なる措置に出てたりや、或は樒家なる樓主に依賴されて自由廢業の抑壓に盡せしありとの風說あり、或は淺草座に於ける佛敎演說には吉原妓樓の望に應して存娼論を鼓吹し、樓主娼軍を率ひて、坐下に列したりとの風說あり、或は常に存娼論をほのめかし妓樓の勢焰を張るが如き觀ある櫻新聞は某派の準機關なりとの風說あり。風說盡く信すへからす、流言多く中傷に出つるありと雖、抑また火無くして煙あることなく、弱點なくんは敵も亦乘せす、聊か名あり辯あるの佛敎徒には由來怪しき人物多し、豈それ盡く風說を否定するを得んや。事實は事實、風說は風說なり、强ちに追究せんとにはあらす、とまれ佛敎家の行動頗る曖昧にして、旗幟鮮明ならず、これ大に佛敎徒の罪なり、基督敎徒、救世軍の輩はともかく廢娼を唱へて、主義たけは人皆是を知る、故に未た嘗て存娼團結の主唱者なりとの批評は被らさるなり。彼等の之を被らすして佛敎徒の獨り之を被るは、これ斷して佛敎徒自己の罪なり、退いて再考せは强ちに人の恨むへからさるを悟らん。モルモン來れり、然れとも內に蓄妾亂行の法師ありては何を以てか彼輩の悖倫を議せん、アウッパラペ起れり、然れとも內に御弊擔きの宗徒ありては何を以てか彼の迷信を斥けん、旗幟鮮明行動正大ならずんば、終には存娼、多妻、所謂なんどの惡文字を以て敎綱とすと罵らるゝに至らん、しかも恐らくは遠き將來に非るへし。敢て佛敎徒に望む、苟くも社會の一問題に際會せば、宗派は宗派として意見を發表し、個人は個人として明かに向背を定むべし、善かれ惡しかれ主義無きは見ッとも無く、旗幟を擁せすしては戰ふへからず。而して今後意外の汚名に宗敎の神聖を穢さるゝべし。「存娼團結の主唱者」たる者あらは無論、苟くも流言たるも決して佛敎徒としては輕視すへきの流言に非す、大に省みて病源を斷ちて可なり、然らすんは禍の延く所蓋し頗る大なる者あらんなり。先つ以て指名を受けつゝある府下眞宗僧侶諸氏以て如何となす。

每月通信

▲モルモン宗宣敎師は去月廿日を以ていよ〳〵「一夫多妻は決して唱道致さす」との條件附きにて、神奈川縣知事へ布敎の屆出を致し候

▲同宗宣敎師四人の主長、グランド氏は小山驒一郞たる人を引き連れ

時々東京の同教視察として來京致し候、又同宣教師の一人は新潟に目を付け已に同地に出立致し候

▲モルモン宗は日本の外、獨、佛、英の諸外國へ同時に傳道師を送り、而かも好況にて先々月末伯林に同教徒の大會有り、四百人の信徒會せりとの報知有之候

▲大擧傳道　東京市内の成蹟は已に掲け候が、今聞くところに依れば全國の總計は六ヶ月間に八千零六十九名の新信者を得たる由に候

▲去月十日長崎へ露國の巫女七名來着致し候、宗教界ますく厄介物增加致し候

▲阿吽婆羅婆の顧問たり、軍師たる本庄賢安と云へるは本眞言宗の坊さんにて、後西本願寺の僧となり。商人となり、演說屋となり、政黨屋となり、終に此妖僧の顧問と流れ渡りし人物に候

▲米國シカゴに設立せられたる大哲提會は此度ひ次の人々役員に選擧せられ候、會長ポール、ケーラス博士、副會長アルバ、オーターマン、書記長アンガリカ、ダルマパラ、書記セー、コルウエル及ひエッチ、グレロー、會計エー、サクステダー、管理にはシスター、サンギヤミタ及び鈴木貞太郎等の諸氏

▲兼て紹介致し候、高輪の佛教大學より出たる雜誌は、高輪學報と題し、本月より發刊せらるべく候

▲大谷派本願寺より西藏へ派遣の使節は費用の無き爲め中止と相成りし由、殘懷此事に候、五千や一万の錢には代へられぬ好機會に候是非世界に對する日本の名譽の爲めに奮發せられ度ものに候

▲布哇の日本勞働者六萬一千人に上り、布教師の欠乏甚しく、此度更に二名の開教師本願寺より派遣すとの事に候

▲小田佛乘氏の主領たる教友會は同盟者已に五百名に上れりとの事に候　以上

欠伸錄

雜　評

一　妖　星

▲子は男子の通稱と云ふものを、婦人の方へ盜んで仕舞たのは近年の事であるが、誰か初めたのか心得ぬ次第である、下田歌子税所敦子などは歌子敦子と云ふのが本名で、決して子の字をくッゝけたのではない、若しこれに子の字を付くればウタコ、アツコ、となる、キノコ、タケノコ、マツノコと其滑稽を同うする

▲男子の通稱を盜んだお序手と云ふでもなかろうが、名刺の體裁もアチラでは女子の方が大きくて男子のが小いのに、日本では丸で其反對である、序手に云ふが永代橋の東詰に、名子印刷所と云ふのがある、これは名刺ではない名子と云ふ姓である、日本人賣捌所と同じく一寸マギラはしい

▲警視廳へ寄席の統計を聞きに行つたら、お役人が出てキセキの方ですかカンブツの方ですかと云ふ、譯らぬから問ひ返へしたらキセキは寄席カンブツは看世物

と云ふ次第であつた

▲四五日前友人からの返辭に至極御同感の至りに候ふと云ふのがあつた

▲國府犀東、號種徳、字公邁と云へば如何にも大家の樣に聞えるが、本名長松と知れては三文の價も無くなる

▲新聞記者の奥の手は只巧みに引延ばすにあり、曰く「煩ベタがベダ煩でベタ煩が煩ベタ」唯是れ而已、此秘訣を最も能く知て居るのは毎日の城北隱士

▲鬼子母神、切支丹坂、目黒不動、蓮華寺、盲唖學校、養育院、監獄署、瘋癲病院、釋雲照、妖怪博士と陰氣なものゝ集まりてある小石川區は、今又阿叫婆羅婆の本據地となつた

▲前月仝所八幡の祭日、小學生徒が地口の飾物をして紙の上に馬糞を散らして馬糞ベラ〳〵と諷じたのがあつたそうな

▲中江兆民正岡子規、二人の昨今は世人の最も同情を禁じ得ぬところである、聞けば櫻寢居士も赤十字社の病院に苦み正太夫も恢復すべからざる容體であるとか

▲兆民の一年有半に近代の非凡人を精撰して卅一人を擧げて居る曰く、藤田東湖、猫八、紅勘、阪本龍馬、柳橋(後に柳櫻)、竹本春太夫、橋本左内、豊澤團平、大久保利通、杵屋六翁、北里柴三郎、桃川如燕、陣幕久五郎、梅ヶ谷藤太郎、勝安房、圓朝、伯圓、西郷隆盛、和楓、林中、岩崎彌太郎、福澤、越路太夫、大隅太夫、市川團洲、村瀬秀甫、九女八、星亭、大村益次郎、雨宮敬次郎、古川市兵衛、

▲三遊亭圓朝は毎月死んだ友人の墓參り日を極めて所々を歴巡し、死ぬまで一ヶ月も廢せなんだと云ふ、第一流の人間は何かに異つたところがある、平沼專藏は犬の樣に云はれるが、彼にも一寸異つたところがある、丁度大倉喜八郎が元旦に草鞋を穿ひて舊主人の家を祝すると同じく、專藏の舊主人明治屋渡邊治右衛門の門前を過ぐるときは、どんな急がしい時でも必ず車を下り帽を採り一禮して過ぐるとの事である

酸瘡の文壇

文藝界雜俎

白嶺生投

▲窯業共進會の開設

窯業品の共進會、はじめて上野に開かる。出陳の點數

萬を超えて世評はなだ喧し。由來この種の工藝品は雜貨物と一樣に遇せられて、藝術的價値はさらに顧られざりし所、しかるに、今、これを一堂の下に陳ねて弘く世の鑑賞を乞ふに至る。工藝界の進步として、これふかく喜ぶべき也。ねがはくは、ひとり實業品のみならず、すべての工藝品、世の藝術的鑑賞を受くるもの、また實にこの會の如くならんことを。

▲窯業品と圖案

窯業共進會陳列の作品、ほとんど全國にわたりて各地概ね出品せざるはなし。試についてこれを觀るに、近年窯業勃興の機運に伴うて、各地の製造術非常に進步し、工人の技能いづれもはなはだ稱するに足る、たゞ惜むらくば、繪畫文樣の術すこぶる拙惡にして、製造術の進步せると相副はず、工人の技能大に見るべきものにして圖案のためにその美を減殺せられたるものあり。かくの如きは、作畫家その人を得ざるがためにして、各地の工場主またこれを顧る所なきの弊に座す。窯業品の發達をねがふもの、この點について、ふかく思を致すを要す。



▲梁川氏の『月前狂』

綱島梁川氏の『月前狂』といふ小說、『明星』に於て公にせらる。一個多恨の年少、宮部某を拈出して、少女と少女の良人とに對する胸中の悶々を描く、情緒纒綿、余韻雋永、月曜文學記者の所謂無韻の抒情詩也。氏は、從來倫理學者もしくは談理家として世に知られたるもの。しかも今この作あり。その平生を知らざるものは、恐らくば、氏が造語の計りがたきに驚いて、その才藻の凡ならざるに服すべし。

▲美術學校の改革

紛議の府を以て目せられし美術學校、久保田氏退いて正木氏これに代り、教職の大半を淘汰して積年の宿弊を一掃せんとす。その新に擧ぐる所を見るに、大村西崖氏あり、下村觀山氏あり、而して傳ふる所によれば、さらに竹内棲鳳氏を京都に起して、教鞭を執らしむべしといふ。當年紛擾事件の立者、美術院の寵兒、これに加ふるにオヤス鄕の大家、その間よく相和するや否や、吾人は、謹んで、しばらく新校長閣下のお手際を拜見せん。

▲一條某の繪畫

一條某の繪畫、このごろ一部文士の間にもてはやさる。某の畫、纖巧にして細緻、清新やゝ見るべき所あるも、所謂ごまかし多くして彌縫の跡蔽ふに難く、少女以外の人物後景に至つては、好んでその手法を模する清方氏にすら及ばず、審也、止水の諸氏に比しては、もとより遙かに下れるもの也。しかも、今日の名あるを得たるもの、思ふにたゞその筆致の纖巧にして、一時眼に新なりしによるか。雑誌『萬籟』これについていはく、

初戀の女でさへ、女房にすれば、鼻につくと云ふに、萬筆一揆、何等の變化なき成美の畫、獨り人目を欣ばしむるを得んや。十五か、六七八迄の島田髷、成美の畫材は遂に此外に出つる能はず。『明星』より『新聲』を通じて、幾多の作、皆斯の如し。彼が將來に於て、五年の後、十年の後、二十年の後、亦斯くの如かるべき乎。

言やゝ卑しきの嫌あるも、某の弊所を道破して、すこぶる痛快なるを覺ゆ。

▲第二の『新著月刊』

『新著月刊』出づ。材料の選擇、文壇に對するの態度、前の『月刊』と全然異なるも、前者以外の特色を存して、後來望を囑すべきものなくんばあらず、時文の記者は金井長風氏ならんと睨みしは僻目か。

▲市川か阪東か

新出の『新著月刊』、和漢蘭坊、伽羅齋臭の撰にかゝる「新作俳優一覽表」といふものを掲ぐ。中に前頭三百圓市川又三郎といふ俳優あり、劇通見て笑つて曰く、市川又三郎とは、こりや一體誰のことだい。市川團十郎の眞似をするんで、市川とは、ヘン、阪東が聞いてあきれらあ、と。吾人聞いて解する能はず、すなはちその言を記す。

▲雙生兒の英太郎

お隣りの喜いちゃん、お向ふの美いちゃんと相語つていはく、此俳優一覽表には、小供役者の市川英太郎が二人居てよ。どれ、をや〳〵、英ちゃんの阿母さんは、いつ双兒をお生みだつたらうね。と。

▲文壇の新用語

「文壇新用語集」として、吾人に示すものあり。いはく、

一　本能の直進――「手套を投ぜられ」て、「芋の蔓」だの、「早稻田問屋」だのと、醜陋の言を吐く事。

一　勝淋文士――勝淋丸を服する文學士の事。

一　サイノロジー――妻惚爺、「妻君を愛する殆ど其度を超ゆる事。

短文

五十年後の宗教に就て

▲斯かる預言的大問題を短文に綴るは最も至難の事とす然れ共試みに僕をして云はしめば

第壹、根本的要素

一、教理自身に於て時間的に万世不變、空間的に萬國通教、亦研究的學理と一致して而かも人類高下の諸階級に適する者

二、完全なる傳道師即學德双備せる人物を多數に有する者

三、完全なる傳道師を得ん爲めに日本目下の宗教界に速かに卒先大陶汰を行ひ以て其數を減少せる者

四、講演說教等の方法一定せる者

五、忠孝博愛公德等總て倫理的問題を說示する傳道師は躬ら模範を自身に示し后對他教導を爲す者

六、信者の多數が信念堅固にして言行能く一致せる者

第貳、傳道的要素

一、就中目下の少壯年者及婦人の教育的傳道に着眼し其外幾多各種の學校を有する者

二、能く地理的眼光を放ちて內外諸國樞要の各地を撰擇し此に傳道的地盤を强固にする者

三、全宗內の異派相依りて合同傳道を謀る者

四、慈善の語を現實的に應用せる者

五、徒らに建築修繕等に冗費を要する殿堂社宇を廢し之に代ゆるに實用的新會堂を有する者

六、完全なる宗教音樂の設備ある者

七、假りに基督教者に云はゞ第壹日本國特種國體の重さを知り次に社會百種の事情に對し餘り不平面せざる者

八、假りに神道家に云はゞ或一種の娼婦的諸種の醜猥なる祈禱を吹聽せざる者

九、假りに佛教者に云はゞ堂班位階等を其寺院に世襲的にせざる者

十、目下傳道資金少くも五百万圓以上を積立て且之を將來安全に保管し得る而已ならず年々其資を增額し得る方法を取る者

以上大別二種の要素に基き根本三分傳道七分の割合にて一直線に進行せば其宗教は所謂五十年后に於て我國の獨占宗教と爲るを保證す併神儒佛耶等の內何れの宗教が勝利を占むるかに付ては蓋し僕は佛教眞宗の一僧侶だから是非共我宗をして最后の勝利と爲さしめたひ者と僕及我子孫と

共力其任に當る決心だ、併し過言かは知らさるがどうやら日本の既往と現在とに照らし勝利は眞宗に皈する者らしひと昨夜一夢を結へり（大陸最南端の一孤客）

▲五十年後日本に宗教無し、若し有らば國家の不祥なり、亡國の徵なり、國民は此五十年間を期して宗教の撲滅に全力を注がざるべからず（武士道生）

▲チョイト姉さんは今夜おみき大師の縁日に行くて本當?、あたしは今から阿叫婆羅波の教會へお護符を貰ひに行くの!、隣りの伯父さんはモルモン教會へ入り浸りで二三日も歸て來ないから、伯母さんがチンくを起して喇嘛の坊さんを呼んで祈り殺して貰うッて騒くの、おッかないことね!（五十年後の裏店住人）

▲我國最近五十年間の歷史を回顧せば「我が社會は外國に比例なき、迅速の進歩をなしたり、而して我が宗教界に於ても、維新以來西教入り來り。今や全國を通して、該教の信徒を見ざる處なきに至りしは、亦速かなる變化と云はざるべからず、されど、今日より以後、更に五十年の未來を想見するときは、今日以前の進化の如く、速かに進むべきものなりや、將た退くべきものなりや、大預言者に非ずんば、容易に之を明言する能はざるべし、吾人を以て之を見れは大宗教家出てゝ、天下の人心を風靡するに非んば、今後我が宗教界に於て、著しき變動を來たすことなかるべし、今時我國宗教界に於ける人物評を聞くに、佛教と云ひ、基督教といひ、學者として、事業家として、或は其他世に秀でたる人物なきにあらずと雖も、宗教家に至りては、兩教を通して未た一人をも見出す能はずといへり、蓋し宗教界の尤も必要なる人物は、學者にあらず事業家にあらずして宗教家なり、然るに今此の大切なる人物を缺きたる我が宗教界は、前途果して有望なりと云ふべきか、偉人は忽然として出づるものにあらず、大宗教家に至りても亦然り、必ずや之れが用意の時代なかるべからず、一人の宗教家なき教界に於て、大宗教家の起るを望む、たとひ大旱の雲霓に於けるが如き、情の切なるものなりと雖も、之を得るの至難なるは、砂漠に於て水を求むると一般なるへし、然らば我が五十年後の宗教は果して如何、曰く著しき變動なくして徐々進化の道程をたどりつゝあるものなるへし、即ち耶蘇教に於けるユニテリアン、佛教に於ける新佛教の如き運動によりて、只だ一部の迷信を除去しつゝあるものなるへし、近時の宗教界より察すれは僅々半世期間にしては、差したる變動も著しき進化もあるへしとは思はれさるなり、然りと雖も宗教も亦社會の影響を蒙るところのものなれは、今後我國の社會にして更に一段の進化を來たすことあらん、宗教も亦從つて如何に變動するべきや進化すべきや未だ俄かに知り易からさるものあるなり（一頤生）

▲佛教中には所謂布施、寶談、葬式及び法衣の虛飾坊主が澤山浮遊して居る、是等の愚僧悉く洗去られ、宗内の家内喧嘩は跡なく消ふる、慈善と道德と安心立命は佛教の要素となり、日本の佛教に非らすして世界の佛教と云ふ大いなる精神の教とならざる可からす

又耶蘇教は從來の如きゴッドは今少し國體に適し眞理に逆らざる樣に改稱し、尙一增佛教に類似せしめ、私生兒を自白する樣な神の子說或は創造或は洪水說の如き怪談は秘して出さず、益々進んで教義を深妙に進せしめさる可らす、其他言ふに足らさる天理教やモルモンの如き淫亂の教は凡て自然と自滅して此に初めて佛耶兩教の大競爭の天地となる、是は實に五十年後に現はるゝ教ならん（睡々庵）

▲日蓮宗と救世軍の衝突か見たい、喇嘛とモルモンの親類附き合ひが見度ひ（ちか）

▲それは希臘である併し生きた希臘は最早在らぬ、それは宗教である併

し生きた宗教は最早在らぬ、全世界の宗教に探て（佛と云はず耶と云はず）こゝ五十年後は衰頽の極てある、人生を支配する人心を陶治する道具の換り目である、世界の宗教と云へる大演劇の幕合ひである、次の幕は千兩役者の顔揃ひなるか馬の脚の陳列か、見物は堅唾を呑んで待つて居る　　（蒼山）

▲識者は云く我等は殊更に或一種の宗教を奉せすとも我には我に信す可き一種宗教的概念理想を有す何そ我以上に主宰を仰くの必要あらんと、一歩下りて單に物質的腦髓に固まれる海綿思想の學者然たる今世有勝のハイカラ先生云く、我は天に恥ちす地に恥ちす前に疾ましからす后に恐るる處あらす敢て亦法律に悖らす常に美擧善行を修せり何そ其れ宗教を要せんやと、愚民は云く宗旨は太切なり、何處其處の神樣の御水は不思議だ彼の御寺の御兕は百發百中だと、是れ或者は自惚極端に走り、或者は倫理と宗教との範圍に迷ひ、或者は病氣平愈痴情的心願の成就を以て宗教の大本と誤解せり、然り然らは日本現時の宗教界は國民一般通して無宗教者也即ち國民の心是未た定まらす、其言行思想悉く寢言に過きす、而して其概ね旱ふ所僕は商業上及外國語研究上手段として洗禮を受けたり、又僕は祖父母の家訓上神佛を崇拜すと、何そ其薄弱なる議論で、是等悉く皆他受的信仰表象にして一も取るに足らす、故に斯かる刻下の形勢に鑑すれば余は斷言す、今后五十年の曉には好く行きて國民の全般始めて覺夢し或は自受的に異口仝音或る一種の宗教を叫ふの漸く宗教選擇時代に立到るとを、惡く行けば遂に一妖教の許に屈伏せられて世界中最劣等宗教國と云はるゝに至る、吁此半世紀は大々的警戒を要する者は獨り日本の一宗教てアロー　　（新嘉坡驚戒子）

▲モルモン教會、歸依者最も多く、アウンパラパ之に次ぐ、喇嘛教回々教火教皆盛んにして、天台眞言禪浄土今の法相華厳と同じく名のみとなる　　（青山生）

▲僕の豫言は屹度的中する、五十年後此中央公論が屑屋の手から（これは失敬）でも展轉して、萬一半世記後の識者の手に依て披見さるゝ事有りと假定せよ、其人は定めて予の大卓見大先識に驚き嗟呼五十年前中央公論短文投書家にもかゝる識者の在つたかと絕叫するであろう！さて其僕の未來記とは何んてある

一　實行的宗教の世となる　　ユニテリアンや新佛教や只研究的の哩々宗教はいつまでも頭が上らぬ、眞宗希臘教羅馬教及び日蓮宗と耶蘇新教の一部、これが五十年後我國の宗教である

一　宗教の中心　　耶蘇は素より佛教も本山は悉く東京に集まる、本願寺の如きも京都は只殿堂のみとなる、佛教は眞宗の外悉く名計りとなりて閉息する、眞宗も各分派合同して一個となるの傾向あり

一、宗教學校　　今日の反動として東京に於て宗教學校他の私立や官立學校より盛大なり、高輪の我校は其霸權を把る

一　外國傳道　　朝鮮と滿州と支那に眞宗盛んならんとす、亞米利加にも五六十の教會出來て獨立す

一　天理蓮門の如きものは世に容れられず、去て朝鮮臺灣支那の愚民宗教となる

一　慈善事業　　宗教家の本職となりて祭葬追弔は其餘事となる。勞働問題の如き委く僧侶傳道師の手に依て雇主と被雇主との調停を見る

以　上　　（高輪の一生）

▲例に依て對照して見樣と存する

佛　教	基督教
教義説明法一變する	悉く日本的獨立のものとなる
大多數の宗派は死滅する	大多數の宗派は合同する

儀式莊嚴基督教に假寄る　　勸募集財佛教に眞似る
東本願寺借金に倒れる　　ニコライ會堂地震で潰れる
寺院は悉く美術品となりて人集まらす　　會堂は多く興行物に應用さる
新佛教會堂を建てゝ讃美歌を唱ふ　　ユニテリアン新佛教に合同して釋迦を祭る

（芝白金生）

▲書架の隅に古ぼけた一册の雜誌を發見したから、取りあげて見たら、今から半世紀以前の中央公論であつた、開いて見ると、「我國五十年後の宗教と題する短文を集めたところがあるから、五十年後の豫想は如何であつたかと、一讀したところが、中々色々の預想が書いてあつて面白ひ、是に於て、僕は今日の宗教界は預想に對して如何かと比較して見ると中々昔人の思つた通りには行かないで、二十世紀も早や半ば過ぎたる今日に於て、我國のみならず、先進國なる歐米に於てすら、宗教界の迷信は中々跡を絕たない、科學の進歩と共に並行することが出來ない、歷史以前の無智蒙昧度しがたき迷信者が、まだ中々蠢々として存在して居るには、どうもなさけない、とうに跡を絕つべき天理教や、蓮門教もまだのこつてあるのだ、アウンバラバラの如きもまだ信仰するものがあるそうだ、五十年以前、世論囂々であつたラマ教、モルモン教、はた回々教の如きものまでも、遂に今日は我國に其寺院を見るに至つた、是れ果して宗教界の進歩か、ハタ退歩か、之れが爲めに我社會風俗の上に著しき進化も見えず、依然として弊風の改まらざるより見れば、决して進歩とはいへない、一方に於て迷信を打破する學者があれば、又一方に於ては、却つて迷信を助成する宗教者があるのだ、歐米に於てさへ又此頃迷信にちかい信仰が下層社會に流行しておるといふとだ、五十年前の預想者に此有樣を見せしめたなら、果して何んと云ふだらう、今日自由に空中を飛行し得る器械が出來れば、信仰によりて生ながら天國へ昇らる、などといふ、馬鹿げた考へを出す迷信家も居るのだ、中々人間の信念の開發進歩といふものは、遲々たるもので、昔しも今も大した相異が見えない、實にじれつたいとは此事であると、切齒扼腕、忽ち耳朶をつんざく音にびつくり頭をめぐらせば之れなん隣寺の時の鐘が僕の甕窓の夢を驚かしたのであつた。

（一頃生）

▲五十年と云へば即ち半世紀である生理學者は人間の肉躰が僅か七ヶ年の內に全く一變化を來すとさへ云ふのであれば七ヶ年七倍强ある五十年の後には社會の制度組織が必ずや非常な變化を生ずるは火を見るより明らかなことであるが、宗教も其の如く果して大變化を受けるてあろうか、顧みれば維新後三十有餘年の間に物質的の進歩發達は數ふるに遑あらぬ位だが精神的なる宗教はどれ丈進歩したであろうか、實に指點するに苦しむ位である、一般に我國人が宗教に對する觀念の尙ほ幼稚にして劣等なるは驚く計りで此に精しく論ずるまでもなく西洋分明に付て少しも味ふ所なき德川時代以前でもよし如何なる妖教婬祠が起ることあつても斯程までに勢力を得なかつたろーと思はれる、天理教や蓮門教が數年の內に數百万の信從を作りて確固動かすべからざる宗教的基礎を形作り、近頃はまたアウンバラバなる妖僧が社會の一隅より頭を擡げて上層に位する貴顯や貴女に取入り旣に田中宮相夫人や德久深野など云ふ堂々たる知事までが此妖僧に魅せられて其膝下に跪伏合掌する有樣ではないか、斯くも宗教觀念の劣等なる我國民敢て社會の下層と云はず中層上層凡てを擧げて迷信の渦中に惑溺したる人々が、五十年の歲月の中に高尙純美なる宗教の堂奥に達し能く之を味ひ得る樣になろうとはどうしても思はれない五十年後の人間の肉は劣等なる觀念に充ちし現代人士が直ち

に分ちたるものである其流るゝ血はまた迷信に充ちし今人が注いだものである、左すれば如斯習慣や觀念を遺傳的に受繼げる中世紀後の人は今後科學は進歩し教育は普及するにせよ根本的に此等の思想を勦絶することは難いのである、されば眞心に合理的倫理的なる宗教の眞光明を發揮することのとても出來ないことを憂ふるものである、現今に於ても一部の有識者の間には宗教の研究盛んで其眞價値を發揮するに勉め其美所妙所を躰得して實に飲するに足るものあるが、是等は秋渚の螢と同樣で指を屈するに足らない、而かも其人の感化影響はこれまた一部の有識者に限られて常識に乏しき貴族や頑迷なる下層を導くに及ばない、そこで其間に截然たる區劃をなし一部有識者對多數無識者とに一大鴻溝が出來て自然此儘で五十年位の短時日を經過して仕まうに相違ない、併し人類の進歩てうことは強ち物質界にのみ局られたる眞理にあらざれはよし其進歩の度遲くとも除々其歩を進むるは明らかなれは、堂々たる上層に位し高等教育を受けたる知事などが魔道に蹊み迷ふ樣な迂態はあるまい否切に日本將來の進歩の爲めに而かあらんことを望むものである(神田三々坊)

課題

我國の交通機關に就て(十月十五日まで)

我國の寄席劇場に就て(十一月十五日まで)

前月の出版界

◎スケッチブック 下卷 文學士 淺野和三郎譯
京橋 大日本圖書株式會社發行

「ウエストミンスター寺院」より「夢が窪の村夫子」まで十一篇を收む、計四百頁、一字一句忽にせず忠實に飜譯と註解の勞を取りたる著者の勞を多とす、故森田思軒のスリーピーホーローを譯せし如き詩筆は無きも、毫も艱澁のところ無く、原文を讀まざるものにも一讀篇を終へされば息まざらしむる丈けの價あり、アーピングの妙文を味はんとするものに採ては大に必要なるべし(五拾錢)

◎草野氏日本文法 文學士 草野淸民著
神田 富山房發兌

三十二年肺患にて倒れたる草野氏の遺著なり、氏は國文學科にあり文法狂と呼ばれし人、病を須磨に養ふや瞑目するまで筆を抛たず、而も完成を得ずして逝く、此書爲めに躰裁の一致せず欠漏多きも亦他書に見るべからざる長所有り、斯道の學者を益すること多からん(壹圓)

◎武士道 文學博士 井上哲次郎講話
赤坂 兵事雜誌社發行

博士が有志將校の爲めに陸軍幼年學校に於て講話するところを一册とせるもの、我國の武士道が外國に例無き特産なるを說き、例の山鹿素行を武士道の權化とし、大石良雄吉田松蔭を其門人として說明す(五錢)

●家庭讀本 夏の巻　堀内新泉著
神田美土代町　開發社發行

篇中收むるところ九篇、第一篇「庭の若葉」は棒行豆屋の芳松の話、貧と病に苦める母と子が互に思ひやる様讀むも涙溢るゝ、第二編は「螢狩」愛らしき三人兄妹の話し、第三篇は「遊泳の名人」富める慳貪の長者か終に大苦痛を受け貧しき勤勉なる指物師が遂に大安楽を受くると云ふ外國の物語り、第四篇は「雨後の月」四十五と三十五との夫妻十五の男兒と十三の女兒、心地よき家庭の歡楽を寫し、第五篇「蚊やり火」夫は布哇出稼きに行き殘る母と子の有様、第六篇「姫百合」京都は四條寺町通りお艶と云ふ十七の娘とお峰と云ふ十三の娘の仲好き様を描く、第七篇「夕すゞみ」主人が納涼がてらに家族や近所の者に有益な話しをなして聞かせる第八篇「夕立」治作と云ふ老農の家庭第九篇「燕子」月給三十圓の官吏の後妻が先妻の子との間に於ける眞の母子よりも温かき情愛を寫す、以上總じて讀者をして一點の厭氣を生ぜしめず、此頃の不健全なる小説を目にして此書を採れば恰かも「炎熱酷吏去。清風故人來。」の感あり、特に雨後の月、姫百合、庭の若葉の三篇を愛讀せり（十六錢）

●思ひ思ひ　櫻痴居士作
春陽堂發行

人心の思ひ〳〵なるは、猶その面の異なるが如しと云へり。實に世の中は千差萬別、思ひ〳〵の境界、走馬燈の社會なれば、政治家ぶる高髯紳士、大策士と自分免許の小股すくひ、數々の怪物が次から次へと出現するも、不思議でも何でも無し。されば此篇に書綴りたる一場の滑稽は、素より根無艸にはあるなれども、斯る狀况の此廣い日本に必ず無いとも申されまい。假令無いに仕た所が似寄の情態は何方にか、きつと影法師ぐらゐは映て居やう、是ぞ即ち思ひ〳〵の浮世なる。今この編を春陽堂の主人が出版するも實は酔狂じみた業皆さん勉めて御一讀あるとも無いとも亦思ひ〳〵
居士のはしがき其儘を紹介（三十錢）

●世界國勢要覽
博文館發行

太陽の臨時增刊として出づ、海外にていづる政治家年鑑に倣ふて世界各國の國勢一斑を詳かにす、有ゆる階級の人々に重寶なる書物なり、毎年月を定めて一册づゝの發刊を望む、猶慾には次年より雜誌躰では無く書册としても少し小形なるものに改められんことを望む（三十錢）

●長虹
新聲社發行

これは新聲の臨時に長虹と題して現はれたる別册なり、西園寺侯櫻癡三叉風葉矧川宙外其他文士數十家の作を收む、挿畫躰裁例に依て凝つたものなり、流水の評したる黑岩涙香は面白く讀まれたり（二十五錢）

●俳句選　第一編　内藤鳴雪氏選評
神田南甲賀町　内外出版協會發行

『文庫』に掲載せし俳句中より圏點以上の句及び評語ある句を抄録したるものにして本篇には新年、春、夏、秋、冬の四部を收めたり鳴雪翁の評語は滑稽洒脱にして俳趣に富み文壇の珍を以て稱せられしものなれば門外漢も讀入て詩味を感ずるのみならず、俳句を學ばんとするものも亦此句と評とを併誦せば啓發する所極めて多かるべし（十五錢）

●新著月刊　第一卷第一號
小石川區指ヶ谷町　仝發行所

名づけて『新著月刊』といふと雖も内容に至つては全く前の月刊と趣を

異にせり本號の要目を擧ぐれば臺所ラボラトリー（藤本善治）本多上野介の流案死處（山方石之助）ゾラの三戰爭（櫟川生）塞下曲（長井金風）薄化粧（小杉天外）おぼろ夜（小林四絃）悪魔哲學（青柳有美）時文評論、點頭錄、菊五郎と團藏等（十二錢）

●二十世紀傳道演說

京都東六條　法藏館發行

耶蘇臭き題目なれども却て佛教の演說集なり、開卷第一南條博士の行道進德を初めとし、其他二十人の演說を筆記せるものなり、田舍人の家庭の讀物として、說教の材料としては可ならんも、何故に二十世紀など云ふ大袈裟の名を付せしかは終に解する能はず、但し二十世紀的人物の演說の意なるか、或はまた二十世紀に最も適當せる演說の意なるか、多分二十世紀に入りて出版したるものとの意ならん（十二錢）

●佛教金言集　織田得能著

東京神田　光融館發行

大小乘諸經の中より吾人が服膺すべき格言を拔粹し倫理部と哲學部とに區分して一々解釋を施したるものなり、說教者や演說者は必ずや一本を座右に供へ置くべし、但し解釋は漢文を直譯せしもの、やゝ生硬に過ぐるの憾みあり（三十錢）

●淨土三經之大綱　齋藤唯信述

東京　光融館發行

本書は仝師が淨土三經の大綱を關八州會に於て講ぜし講錄なり固より片々たる一小册子唯だ其大綱に過ぎざれば敢て多きを求むべからざらんも吾人が切に聞かんと欲する須要なる項目の多くを脫したるは如何に例令ば大經の價値を定むるに最も要とする今本異譯別本異譯など云ふことには詳細の說明を與へずして具略の異のみと獨斷したるが如きまた淨土を說くに及んで「その西方に存する理由は說明すべき限りのものでない」云々と結びて指方立相を研究以外に置きたる如き畢竟これ舊時代の講錄と何の擇ぶ所かある吾人は更に一步を進めて新研究を施されんことを望む（二十五錢）

●眞美人　石川仲將述

京都東六條　法藏館發行

著者が曾て近江婦人慈善會の爲めに說話せられし演說筆記と云ふ、眞美人は形にあらずして心にあることを經文を引き或は世間の例などを擧げて面白く述べしものなり（八錢）

●改悔文講話　伊藤哲英著

東京　光融館發行

右は仝氏が眞宗の中興蓮灯大師の改悔文を俚耳に入り易き樣、最も平易に最も通俗に講ぜられたるものにして、眞宗の法義を味はんとする求法の士に取りては、實に適當なる著述たるを疑はず（十五錢）

●俳藪　第一、二號

神田錦町二丁目　晩鐘會發行

俳句專門にして四六判十六頁の瀟洒なる雜誌也、表紙繪は流石に十千万堂宗匠の意匠丈けありて甚だ意氣に紙質も佳く編輯も亦頗る氣がきゝたり內容の如何は門外漢たる評者の批議し得べき所にあらずと雖も紅葉、竹冷二宗匠を筆頭として參人、苦花、活東、諸氏の吟、一派の句風を見るべく殊に小峯大羽氏の俳諧季寄圖解は畫家且つ俳人たる氏の特色を發

撃したるものとして他に見られぬ本誌の珍なるべし（七錢、お近所生）

●俳星　第二卷第六號
秋田縣山本郡能代港町　仝發行所

是亦俳諧專門の雜誌にして體裁殆だ「ほとゝぎす」に近似し秋田縣下の刊行物なれども部下雜誌の間に伍して遜る所あるを見ず編輯は主として石井露月氏の任に當るが如く全地方の俳人を數多網羅して根岸派ふりの俳風を鼓吹せり爲山氏の表紙繪、上出來なるも白ぬきの畫はなくもがなと思はる（六錢五厘）

●秋水　第二卷第一號
名古屋市安房町　大聲社發行

「中京文學」廢刊以後の文學雜誌也玉茗、露石、瓊音等の作あり（五錢）

●英才詞苑　秋の卷
博文館發行

中學世界の增刊なり、懸賞小說論文敍事文抒情文書簡文英文新體詩漢詩和歌俳句を集め附錄として秋聲金風木佛等諸氏の小說雜錄を添ふ、中學生の讀物として此上も無き面白きものならん（二十錢）

彙報

●死亡者數　東京府の調査に依れば本年一月以降六月迄の上半期に於ける府下（伊豆諸島を除き）の各區役所町村役場に於て埋葬を認可したる死亡者總數は一万九千八百四十八人にして昨年に比すれば六百六十一人の減少なりと其月別を示せば

一月	三千七百十四人	二月	三千四百五人
三月	三千四百七十五人	四月	二千九百五十三人
五月	三千三百二十九人	六月	二千九百七十六人
七月	千九百八十四人		

●養育院の現況　窮民行旅病人及び孤兒共に增加し窮民の入院願は常に三十人乃至四十人づゝの滯りあり又行旅病人も多き時は一日八人もあり平均一ヶ月八十人位に及び入院者總數七百四十四人の内窮民二百七十四人、行旅病人二百九人、孤兒二百六十一人なり斯く入院者俄かに增加して最早餘室なきゆゑ應急の處置として六十餘坪の假病室一棟增築のことを市參事會へ申請中なりと

●四監獄現在囚　去月十一日警視廳第四部の調査に依れば府下四監獄の現在囚は左の如し

市ケ谷　男囚八百四十七人、女囚四百廿五人、別房男九十八人、同女三人、帶子女三人、女刑事被告人十二人

巢鴨　男囚千六百四十七人、刑事被告男百八十八人、別房男十六人、懲治男八人

鍛冶橋　刑事被告男八百人、同女四十四人、同男囚四十九人、同女四七人、別房男十三人、帶子男二人、同女一人

八王子支署　男囚百〇八人、女囚八人、刑事被告男十一人、別房男五人、同房女四人、懲治男二人、同女一人

●資產家數　日本國中（北海道琉球とも）で五十萬圓以上の資產を有するもの四百四十一名、米國のミリオネーア即ち百萬弗（我二百万圓）以上の富豪は三千八百二十八人あり

●無料宿泊所の成績　淺草に於ける同所去八月中の成績左の如し

區別		男	女	小計	五六七三ケ月人員	合計
業務を與へたるもの	大人	九	—	九	三一	四〇
	小人	—	—			
養育院に入院せしめたるもの	同	三	二	九	五	四
	同	四	—			
共濟慈善會に送付したるもの	同		—		—	一
	同		—			
福田會に入院せしめたるもの	同		—		四	四
	同					
東京感化院に入院せしめたるもの	同	—	—		—	—
	同					
警察署へ引渡したるもの	同	—	—		—	—
	同	—	—			
止宿のみせしめしもの	同	二七六	三	三〇	四一四	七一四
	同	三				
總計						七一四

●金鵄勲章と年金○○○○○○ 明治二十八年一月十六日有栖川宮熾仁親王殿下の功二級金鵄勲章を受けさせ給ひしより今日に至る迄金鵄勲章受領者の數は

功二級	十人	功三級	三十三人
功四級	三百四十四人	功五級	八百七十五人
功六級	——	功七級	九百四十八人

年金受領者の現員二千百五十三人(此金額五十四萬七千四百圓)

●世界各國の軍艦○○○○○○ 最近英國議會に提出せられたる世界各國の軍艦表に依り日英露佛四國の既製及び製造中に係る隻數を擧れは左の如し(但し×印は製造中)

	英國	露國	日本	佛國
戰鬪艦	五〇 ×一六	一四 ×一〇	六 ×一	二八 ×五
裝甲巡洋艦	九 ×二〇	×一一	×六	七 ×一五
防護巡洋艦	一〇三 ×四	三 ×一一	一四 ×三	三八 ×二
非防護巡洋艦	一一	三	九	七
裝甲海防艦	一〇	×一四	四	一四
特務艦	一二	×二五	—	—
水雷艦	三五	一七	一	一五
驅逐艦	八九 ×二四	一〇 ×四三	一一 ×三	九 ×一四
水雷艇	九五 ×四	一七一 ×二四	三八 ×三六	二三五 ×四四
潜航艇	〇	〇	〇	四 ×一二

●百年間歐洲人口の増加○○○○○○○○○○

露國	三千八百八十万人	佛國	二千六百九十万人
獨逸	二千四百五十万人	墺匃	二千四百三十万人
伊太利	一千六百八十万人	英國	一千六百二十万人
西班牙	一千百五十万人	土耳古	七百三十万人
米國	五百三十万人		

而して昨千九百年の人口は左の如くなりと云ふ

露國	一億六百二十万人	米國	七千六百十万人
獨逸	五千六百三十万人	墺匃國	四千七百万人

英國	四千百万人	佛國	三千八百七十万人
伊太利	三千二百四十万人	西班牙	一千七百七十万人
土耳古	九百八十万人		

即ち露國の人口は百年間に二倍餘の增加を爲し米國は右諸國中の最下位より第二位に進み佛國は第二位より却て第六位に下りたるものなり

●狩獵免狀下附數　農商務省は去月各府縣知事の請求に應じ夫々本年度の狩獵免狀を下附したるが其の總數十九萬六千七百十一枚なりといふ其の內譯は甲種一等百五十六、二等五百八、三等一萬五千六百六十四、乙種一等千六百七十七、二等九千八百七十三、三等十六萬八千八百三十三枚なり

●日本人と外國勳章　外國勳章の初めて我國人に贈與せられたるは明治九年六月五日露國より時の參議兼外務卿寺島宗則氏が神聖アンナ第一等勳章を受領せしを始めとす爾來二十五年間即ち本年八月末迄に本邦人が外國勳章を受領せし勳章の總數及び國別は左の如し

英吉利	一	露西亞	二九二
和蘭	二一	佛蘭西	一八〇
葡萄牙	三九	獨逸	一四二
巴威里	一四	撒遜	一〇
瓦敦堡	三	撒遜溫馬耳	八
撒遜格保額達	二	ヘッセン	二
梅格稜堡	一二	白耳義	五五
伊太利	二〇三	羅馬尼	二
丁抹	三九	瑞典諾威	三一
西班牙	四九	澳地利匈牙利	一〇五
支那	八四	布哇	一〇三
希臘	七	波斯	一五
土耳其	八九	布爾牙利	一
モンテネグロ	三	塞耳維亞	四
埃及	三	暹羅	三九
安南	三四	東甫寨	一七
ザエチジュラ	一	羅馬	二
總計	一六三六		

●臺灣の警察官署と吏員　最近の調査に據れば臺灣に於ける警察官署は警察部三、警察課三、辨務署第二課三十二、出張所五、支署七十六、派出所三百四十五ヶ所にして此の吏員は警部以上二百六十人、巡査四千〇三十八人、巡查補四百八十人、警吏及び警丁四百五人合計五千百八十三人なり又監獄署は本署五、支署三ヶ所にて此の吏員は典獄三人、看守長十八人、監獄書記十五人、通譯四人、監獄醫五人、看守四百十一人、女監取締五人、押丁五十七人、教誨師三人、授業手一人、囑託二十四人、雇員二十人、傭員十一人、合計五百七十八人なり

●京都大學の施設　木下京都帝國大學總長は來年度に於て文科大學を設置する見込にて文部省へ其豫算を提出せしが尙大學內に印刷場を設置し各教授の講義を印刷し生徒以外にも閱讀せしむるの便法を設けんとの見込にて之に要する速記者も雇入るゝ筈なりと猶同大學の要求は文科大學設置の件の外、理工科大學の造船科新設、醫科大學の增築等なり

●支那女子の留學　支那女子の留學は之を嚆矢とすべし彼の張之洞の幕下にして留學生の監督たる錢恂氏は其子息をば辮髮を斷ちて慶應義塾に入らしめしが今茲十八になる娘をば四谷愛住女學校主小具貞子に託して寄宿勉學せしむることとしたり

⑦**北海道の教育事業**　北海道廳にては來年度より教育上大計畫を立て第一着に高等女學校小樽商業學校水産學校等を新設し又一方には師範學校中學校商船學校等の設備に關し大擴張を爲す豫定なるが其經費總額は十三萬八千七百二十三圓の多きに達し本年度に比し四萬千餘圓の增加を見るに至るならんと云ふ

●**モルモン宗愈布教屆を出す**　過般來横濱に滯在し居る米國モルモン宗の宣教師等は宣布に從事したき目的を以て我法規に隨ひ愈よ去月廿日神奈川縣知事に對し長文の布教屆を提出したる由其要領は日本國に於てモルモン宗の教義を教授する爲め一私人の家屋、教會堂、會館並に公道に於て說教すると、本教會の教理を示す處の論說文及其他の出版物を流布すると、凡ての集合は全く宗教的のものたるべく聖書モルモン教典教條神約並ビール、オブ、グレートプライスの如き當教會規定の書冊に依り布教すると等にして且教義の說明事項中一夫多妻は最早當教會の許さゞる處一妻多夫の教は說教致さずと聲言しあり而して布教に從事する宣教師の氏名は左の四名なり

エッチ、ゼエー、グランド　ルイ、エー、ケルン　ホーレス、エス、エンサイン　アルマ、オー、テイビル

●**大學傳道六ケ月の結果**

東京府	五千三百〇九名
大阪	七百二十六名
京都府	壹百餘名
横濱市	七百六十名
神戸市	四百餘名
堺市	百五十餘名
靜岡市	七十五名
名古屋市	七十餘名
甲府市	二百餘名
岡山市	六七十名
金澤市	六十九名
市川町	五十名
合計	八千〇六十九名

此の外札幌、函館、青森、盛岡、仙臺、上州、千葉、新潟、信州、北陸、山陰、廣島、松山、九州、臺灣等を加ふる時は。上半期に於ける成績は意外に多數ならんと

●**朝鮮の基督教**　最近調査によれば韓國現在基督教の區別は左の如し

一佛國天主教
一露國希臘教
一英國教會
一米國プレスビタリアン派
一濠洲プレスビタリアン派
一加奈陀青年教會派
一韓國巡回傳道派
一米國メソシスト派
一バプチスト派
一羅馬教派
一プロパゲーション、オブ、ゼ、ゴスペル派

右の內最も勢力あるは佛國天主教派にして其信徒數九萬に近し其右に次は合衆國加奈陀及び濠洲新教各派にして其數五千以上なり其次は羅馬教派にして三千內外なり其他は何れも二百乃至五百にして勢力微々たり而して布教地方は京畿、全羅、忠淸各道最も盛なりと云ふ

●**古社寺保存費增加**　從來古社寺保存に要する經費は十五萬圓なりしが特別保護に屬する古社寺及び國寶の修理等に要する費用は何分數百年來廢殘に委したりし今日とて頗る巨費を要するを以て來年度には二十萬圓を請求したりと云ふ

●教誨檢閲　伏見宮殿下には此程第一師團の各部隊御檢閲に際し衞戍監獄へも臨ませられ其節囚徒の教誨を命じ本願寺出張の教誨師松浦貞憲氏は分類教誨を爲せしに殿下には其終了まで默聽したまひたるよし



